
神は俺を選んだのか？

何気ない電卓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神は俺を選んだのか？

【Nコード】

N0186R

【作者名】

何気ない電卓

【あらすじ】

姉妹を持ち、さらにハーレムな関係を作っている茶髪の鈍感男。そんな男の親友をつとめている黒髪の少年がいる。そしてある日の朝、猫を助けた。その代わり『黒髪』の親友が死んだ。そして神様によって生まれ変わった。異世界で。いきなりだけど、そんなお話*初投稿なので期待は難しいとおもいます。しかし、完結は成し遂げたいです。そんな作者です。話が進む毎にキーワードが追加されていきます。PVが100000、ユニークが100000人突破しました。読んで下さった皆様に感謝感激雨あられでございます。

現在番外編を執筆中

普段の生活（前書き）

いらっしやいませ。

導入部分の前半のようなものであしからず。
ではどうぞ。

区切りを加えました。

4 / 3 0

普段の生活

チャイムの音が頭に響くほど鳴る。

「ではここまで。ちゃんと予習するように。」

そう言い、男性教師が教室から出ていく。すると、

ワイワイ……ガヤガヤ……

出て行った瞬間から緊張の糸が切れ、静まっていたのが嘘のように騒がしくなる。

「あー、すごくつかれた！。やっと昼飯だ！。」

その中で茶髪の男子が呟く――周りの騒音によって本当に呟くほどにしか聞こえないのだ――と、

「お疲れさん、相変わらず古典の先生に弄^{いじ}られていたな。ロクにノートとれなかっただろう？後で見せてやる。」

1人の黒髪の少年が弁当片手に近寄り、苦笑気味に話しかけた。

「ははは、ありがたく写させていただきます。」と額を机につけるほど茶色い頭を下げた。それを見た少年は、さらに苦笑を深くした。

それはどこの学校でも見られる光景、まさに普通の学校生活である。
……ここまでは、

「こんにちは。お兄ちゃんはいですか？」

と、先ほどある男子を弄^{いじ}っていた先生が出た扉から、かわいらしい声が聞こえる。

そこで喧騒が少し弱まる。 - - 男子の多くがその声の主を見て感嘆したからである。 - - と、

「失礼する。私の弟はいるか？」

その扉の逆側から、今度は鋭さを含んだ声が聞こえた。

すると、騒がしさもまた少し弱まった。 - - 女子のほとんどがその声の主を見て感嘆したからである。 - -

「お、二人とも来たか。こっちこっち!!」

先ほどの疲労の姿は何処へやら、茶髪の男子は元気よく手を振っている。

「あ、いたいた。じゃあ、失礼しま〜す!!!」と一年生が、

「ん、いたか。では入れさせてもらう。」と三年生が、

1人の男子の席にむかって歩き始める。

周りのクラスメイト達は、その二人の進行方向に邪魔にならないように避けたり、机を動かしたりする。

まさに、人海が割かれていくかのように。

そしてその二人が目的の場所に着くと、

「よし、じゃあ昼飯を食べよう。あ、席借りるけどいいかい？」

と、許可をとりながらも席を動かす茶髪の男子。

「こんにちは先輩、妹さん。俺も一緒に食べてよろしいですか？」

弁当箱を見せながら、その光景を見ていた黒髪の少年も丁寧に姉妹二人の許可を求める。

「いいぞ、食べよう。」

「賑やかなほうがいいです！いっしょに食べましょう！！」

難なく許可をもらえたようだ。

「よいしょっと。さあ、食べよう。腹が減ってたまんねえよ。」

どうやらあちらももらえたらしく、席を動かし終えた直後に少し声を張り上げていた。

「そうだな。では、食べようか。」

そして先輩の『鶴の一声』によって食事が始まった。

）――放課後――）

「じゃ、また明日！」

「ああ、また明日な」

と、茶髪の男子があいさつをしている光景が見られる。――してもらった女子は少し顔が赤かったようだが――

「さてと、一緒に帰らないか？」

「お、いいぜ。帰ろう帰ろう。」

その光景を見ていた黒髪の少年が茶髪へと声をかけ、二人同時に教室を出る。

他愛もない会話をしながら階段を下りている中、黒髪の少年はもう片方の男子へと話題を変えた。

「しかし、相変わらずお前はモテているな。姉や妹はともかく、委員長や令嬢、果ては不良少女や女教師までとは。」

それを聞いた茶髪は首を捻り、

「そうか？ただ普通に挨拶して、ただ会話して、ただ一緒に遊んでるだけだぞ？」

少年にとっては予想通りの発言だったのだが、思わずため息をついてしまう。

「はあ、そこだけ治してもらいたいよ。」

「何か言ったか？」

「いや、お前の未来がどうなっていくのか見当つかないだけだ。」

「はあ？」

と、これも他愛もない雑談を交わしながら下駄箱場に着くと、

「ん、やっと来たか。さあ、帰ろうか。」

と先輩、

「お兄ちゃん、待ってたよ。一緒に帰ろうー!!」

と後輩。

「お、待ってていたのか。じゃあ、帰ろうぜ。」

姉妹から声をかけられた茶髪の男子は、帰りの誘いを受け入れて陽気に自分の下駄箱へと向かう。

それとは対照的に、

「また会いましたね。俺も別れ道まで付いて行っていいですか？」

黒髪の少年が姉妹二人に話しかける。否、許可をもらっていた。

それにつられて、花と評された二人も同じ表情。

1人だけ分らないという顔。

これが毎朝の4人の日常。周りの人々にとっても普段のこと。

そして、この日とその光景の『見おさめ』になる。

「訳がわからん。行くぞ。」

そう言い、華麗な花を二人連れて信号を渡る。

「はははっ、そこがみんなから好かれるからな。」

と？
「」

おいてけぼりをくらった黒髪の少年はそう言い、ふと視界の隅に白い影が過ぎ去るのを捉えた。

無意識に目で追うと、どうやら白い猫が足早に通り過ぎたようだ。

「あの仔も元気だな。あいつのように。」

そう言いながらも、その仔の様子を見る。

白猫が走る。その先は横断歩道。

「ははっ、律儀な白猫だことで。」

そう和やかになっているときに、ふと思う。

確か先ほど3人は青信号で渡っていた。白猫とは直角に違う方向の横断歩道を。

では、今その白猫が渡っている横断歩道の信号は、何色か。

それは、『赤』。

「前言撤回。やはり気のせいだったか。」

そう言いながらも白猫を目だけでなく、体も使って追いかけた。

もう半分は渡っていた。やはり白猫。すばしっこい。

車なんて無視。横からの音なんて気にしてられない。ただ走る小さな命を助けるため、自分も走る。

そうしてやっと捕まえた。3分の2まで渡ってしまった。

「このような交通の多いところで住んでいるのなら、規則というものを覚えることを推奨する。」

そう白猫に言い聞かせる。こちらを見て首をひねっている。

「わからないか。とりあえずうまく生きろよ。」

そう言うと、真横から大きな音がする。

その方向を見ると、数字が書かれている板が目の前にあった。

ああ、これは車のナンバープレートじゃないか。

何故目の前まで迫っているのか。

それは車がこちらに向かっているから。

自分は今何処にいるのか。

それは車道の真ん中にいる。

なら、車がこちらに来るのは当たり前か。

もうここまで来られると避けることができないな。

あゝあ、せつかく白猫を抱えているってのになあ。

しょうがない、

「俺の分までな。」

そう言い、猫を歩道へ投げ飛ばした。

その瞬間、

つたく、毎朝毎朝そんな挨拶をされてるみにもなってみろっての。

まあ、確かに姉さんや妹はきれいだ。

どれほどかというと、非公認のファンクラブがあるほどだ。

しかし、二人とも彼氏を作る気配がない。

拳句の果てに、『弟（お兄ちゃん）がいてくれればいい』とまで言う始末。

弟として、兄としては、どうかなあとつくづく思う。

まあそんなことは置いといて、

相変わらず変なことを言うあいつ。

お前は俺の親じゃ無いってのによ。

けど、あいつはあいつでモテると思うけどな。

積極的にはいかない反面、気のきく小さなことは行う。

そして、事の顛末^{てんまつ}を物静かに見ているやつだ。

表舞台には決して出ず、裏で走り回っている。

『縁の下^{きずもと}の力持ち』まさに言葉通り。

しかし、その活躍を知っているのは教師たちと一部の人だけだ。

さらに、家事が完璧ときた。

実際に姉さんや妹にも教えているそうだ。

俺も何回かあいつの料理を食べたことがあったが、

旨すぎて何も言えなかった。

『主夫^{しゅふ}』これも言葉通り。

しかし、彼女はいない。

本人曰く、『好きな人がいなくても生きていける。』と。

もつたいない。

ふと、その張本人がまだ来ていないことに気付いた。

「なあ、あいつは？」

俺の両脇にいる姉妹に聞いた。

「あれ？　そういえばまだ来てないね。」と左側の妹。

姉さんもそのことに気付いて後ろへ振り返り、

「そういえばまだだな。何をして……」

姉さんの言葉が止まった。

「ん？　姉さん、どうし『プアー——————！！！！！！』ってえ？」

後ろからクラクションが大きく響いた。

何事かと振り向こうとしたとき、

『何か』がぶつかる音

『何か』が地面に落ちた音

そして、『悲鳴』

「ってうわ！朝から事故かよ。」

そう言いながら向かおうとしたとき、右側から誰かが走りだした。

「お、おねえちゃん!？」

妹の声で分かった。姉さんが走った。

向かう先は事故現場。

「ちょ、ちよつと姉さん!？」

つられて俺も走る。

妹も後ろから付いてくる。

まあ、姉さんはあーゆーのはほつとけない人だからなあ、

さて、事故をした車は……路線バス。

車道の途中で止まっているからそうだろう。

しかし、人身事故かな。

「おい！しっかりしろ！気を失うんじゃない!!」

どうやら姉さんは事故を受けた人のもとに着いたようだ。

声を掛けながら、容体をみている。

しかし、いつにもまして必死だな。

「おいおい、本当に人身事故かよ。おい！大丈夫……」

そこで止まった。

後ろにいる妹からも息をのむ気配がする。

その場に倒れていたのは、

俺の『親友』だった。

「おい！……っかりしろ！……じゃない！！」

うう、頭に響くなあ

あれ、この声って、ああ、先輩かあ

必死になっちゃって、どうしたんですか。

ってあれ、先輩、顔赤いですよ。

あらら、周りも赤いや、赤い世界。

なんでこうなったんだろう。

……お、猫。

そっか、猫を助けようとしたんだっけ。

目立つ怪我はないようだし、大丈夫か。

こっちを見てるね、大丈夫だな。

ほら、こっちこい。

お、きたきた。歩き方も変わんないようだし。

おいおい、指をなめるなつて。くすぐりたいだろ。

つてあれ、指になんか液体が付いてるや。

体を擦り付けるなつて。

あゝあ、せつかくしろい毛なみが黒く染まっちゃったよ。

もったいないなあ

まあ、しろかどうかは分かんなくなっちゃったけどな

ん？あいつも来ちゃったか。

どうした、その顔は。妹さんも。

ああ、そんなにひどいことになってるのか。

ならしかたないな。

さて、ちよつとねむたくなってきたな

ああ、せんぱい、なにを言っているのかきこえませんよ。

そんなにからだをゆすらないでください。あさめしがです。

ほんのすこしねむるくらいですから、だいじょうぶですよ

じゃあ、ちょっとしつれいします。

-
-
-

•
•
•
•
•
•

.....

[illegible]

この事故によるけが人はなし。

しかし、死亡者が1名。

17歳という若さで亡くなった。

そして、『この』世界に彼の存在は消えた。

普段の生活（後書き）

おつかれさまです。

前書きに書いたとおりに話が進んでません。

死んだだけです。

誤字、脱字、文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

では、頑張って書いていきますので、出来たら応援をよろしくお願い
します。

ありがとうございました。

どうやら俺は……え？（前書き）

いらっしやいませ。

続いて導入部分の後半です。
やっとなります。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

どうやら俺は……え？

……

……

…

あれ？

ここどこだ？

木がいつぱいだな。

森の中というのは分かる。

けど、どこの森なんだ？

確か、交差点のところで車にひかれて死んだんだっけ？

いかん、うる覚えだ。

とりあえず、

木漏れ日こもが気持ちいい。

すこしここにいたいなあ。

まあ、そういうわけにもいかないか。

しかし、ここは本当にどこなんだ？

……とりあえず、あるいてみるか。

太陽が木の葉によってさえぎられる。

それによって、地面に降り注ぐのは小さな光の集まりとそれらを囲んでいる影。

それがきれいだと思った。

見上げても、見降ろしても、気持ちが変わるようだ。

その中をただただ歩く。

無限に続くきれいな景色。

このような場所はあるだろうか。

いや、俺がしっている中では無い。

もう一度自問する。

ここはどこか。

……わからない。

まるで俺が知らない世界のようなようだ。

……あながち間違っていないような気がする。

何故なら俺は死んだのだから。

ならここはどこか。その答えは目の前に広がっているが、光景の意味が理解できない。

どうしようか。どうもできない。

さて、ほどなく歩いていると気になったことがある。

音がしない。

いや、言い方が違ったか。

鳥のさえずりや風による木の葉のざわめき。

それらが聞こえない。

ただ聞こえるのは、自分が踏み出すたびに聞こえる草の音。

行けない場所に入ったのか、俺は。

そう思い、足を止める。

草を踏む感触はする。

木の幹に触れるが、何の問題もなくごつごつしていた。

息も吸える。生きてるかのよう。

誰がいる確率は低いと思うが、とりあえず叫んでみる。

「誰がいるかぁー！ー！ー！ー！」

「はい」

いました。

「うおっ！ー！後ろかよ。」

「歩き回らないでください。仕事が増えます。」

出会って早々叱られた。俺が悪いのか？

そう思いながら相手の姿を確認する。

身長は俺と同じくらいの170cm代。

顔つきも17か18歳くらいのなかなか整っている。

そして服装だが、マント。

マントで体を包み込んでいるので、なかの様子は分からない。

性別も判断が付きにくい。

ふと、そうゆうふうに見ていると失礼だと思い、

「いきなりで済まないが、質問をしてもいいか？」

「それが質問ですが、いいでしょう。」

一言多いな、こいつ。

「ではありがたく。ここはどこだ？」

「ここは私が作った森です。」

「お前が作ったのか。いいんじゃないかな。」

「褒めてくれるやつがいるとは思わなかったな。」

まあ、ありがとう。」

目線を少しそらし、最後に呟く。

……ここはかわいいと思ってもいいところなのか？

「どういたしまして。」

さて次に、ここには鳥とかはいないのか？」

「私は静かなのが好きなのだ。」

「そっか。けどせめてそよ風があるともっと気持ちいいと思っぞ。」

「ふむ、風か。検討しておこつ。」

腕を組み、少し俯く。

なんか一つ一つの行動や仕草が絵になるな。

「まあ部外者が言う立場ではないから、参考にな。」

さて次だが、お前は誰だ。」

この森を作ったと言うし、何者だ。

「名乗って無かったかな？私は君たちでいう『神様』だ。といっても、その『神様』のなかの1人だが。」

「……おいおい、神様ときたかよ。」

目の前に『神様』とは、何とまあ。

なんたる、俺が死んだことを受け入れるとあとのことはどうでもよくなってきた。

死んでしまつと後はやることが無くなる。

魂となっているだろう俺は考えることしかできない。

俺が感じていることはすべて魂へ響いてくる。

その『感触』を考えて、受け入れなければならない。

目の前に見えるもの全てを。実際に感じているもの全てを。

ならこの『神様』を認めなければなくなるだろう。

「……お前が『神様』と信じておくよ。

じゃあ次。俺はなぜここにいる。」

「それは君が死んだから。」

10文字程度で解決。なるか。

「まあ、本当のことをいうと、君の死は我々にとっては予想外だった。

あの猫がひかれて死んで、君はそれをみて地面に埋め墓をたてる。

そうなるはずだったんだ。しかし、君はそれをさせなかった。

すると、その出来事で起こる死は別のもの、なおかつその猫に1番近かったものに起こる。

それが君だった。本当に我々は驚いたよ。『運命』を捻じ曲げたのだから。

そうなるとその者を調べたくなる。そうして調べた。

するとどうだ、君はなかなか『あの』世界では良いことをして
いたらしいじゃないか。

だとしたら我々は君をほっとけなくなる。

予定より大幅に早く死を迎えるのはもったいない。

せめてもう1度人生を送ってもらいたい。そう思った。

ということで、君はまた生きてもらう。

しかし、元いた世界では君は死んだから、次は別の世界で生きて
もらう。

なので、こういう処遇となったわけだ。わかったか？」

「……」

「おい、聞いていたのか？」

「あ、ああ。俺って生き返るのか？」

「生き返るというより産まれてくるの方が正しいな。」

「産まれてくる？ということとは赤ちゃんから？」

「その通り。ではがんばってくれ。
できるだけこちらも協力する。」

「おい！ちょっと！いきなりがんばってくれて！！」

「では、また会おう。」

言い返そうとした瞬間、めまいが起き、気がボーンとなり、目の前の景色が暗くなっていった。

「君にはとても期待している。」

それが最後だった。

「――???――」

「おめでとう、アルシア。元気な男の子だよ。」

そのこえを聞いて俺は^{まぶた}瞼を開いた。

目の前にはしわくちな顔をした人だった。

おそらく声からして女性と判断できる。

しかし、突然のことなので思わず

「オギヤア!!オギヤア!!」

泣いてしまった。恥ずかしい。

しかし、周りの大人たちはその鳴き声を聞いて安心したようだ。

「おーおー、げんきに泣いておるのお。」

そういい、顔にもっとしわをつくって笑った。

「ほれ、アルシア。あんたの子供だよ。」

ついに俺の母とご対面か。

「はあ…はあ…ふふ、初めまして。あなたのお母さんですよ。」

うわ、べっぴんさんじゃないですか。この人が母さん？姉さんですよ。

「そうだ、名前をつけてあげなきゃ。」

あそっか、俺赤ん坊だから名前つけてもらっただつたな。

というか、その役目は父親ではなかったのでは？

「ん〜、どれにしましょうか。」

そういえば、俺の父親の姿が見当たらないのだが何処だ？

せつかく俺の母さんが俺を産んだっていうのに。

「よし、きめた。あなたの名前は……」

あ、名前。

「シャン、シャン・サムウィルですよ。」

どうやら俺は……え？（後書き）

おつかれさまでした。

やっと名前が出てきました。

名前考えるのはとても難しいですね。

汗が出るほど考えました。頭痛がしてきた。

さて、一日に2本は頭がパンクします。

ので、案が思いつかなければこのままでいきます。

さすがに名前は変えません。さすがにね。

誤字、脱字、文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

また会えたらうれしいです。

ありがとうございました。

世界はこんなもの（前書き）

いらっしやいませ。

今回は説明の回です。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

世界はこんなもの

俺がシャン・サムウィルという名をもらって早くも5年が過ぎた。

生まれてからすぐは右往左往うへみぎみぎひだりしていて泣きまくっていたが、1年も経てば落ち着いた。

そして母さんや街の人達にさまざまなことを聞いた。

今、俺は図書館で本を読みながら、今まで集めた情報を整理していた。

まず、この世界について。

やはり俺がいた世界とは違った。

元になっていた世界になかったものが3つほどあった。

まずひとつが『魔法』。

それを初めて見たのは、生まれてまだ数カ月たったときに、母さんが目の前で火を灯したからだ。

自らの手のひらに。

もう呆然としたね。泣くことを忘れてしまったよ。

それはともかく、その時が『魔法』という存在を知った瞬間だった。

これは母さんから聞いたり、図書館で調べたりしたのだが、

魔法は基本4属性に分けられる。

物を燃やす生命の灯火『火』

すべてを包む生命の源『水』

生命の存在の産みの親『地』

空気と生命を動かせる『風』

さらにその4属性を応用して出来るものもある。

『雷』、『氷』、『樹』などがある。

また、それらとは別の存在からできたものがある。

それが『聖』、『闇』だ。

『聖』は怪我や状態異常を治す。

『闇』は毒、呪いなどを付加する。

あいはん
相反する存在なので互いにいがみ合っている。

これらが『魔法』というものだ。

次に見たもの。それは街中であつた。

これは3歳のころに街に出たときだった。

売店が立ちならんでいて母さんといっしょに出かけていた。

俺が住んでいる国はとても豊かで毎日騒いでいた。

まあその話はおいとして、その時にほかの人とは背丈が大きい者がいた。

始めは「うわあ、でつけえな。2メートルは軽くあるんじゃないか？」と思っていたんだ。

そして頭をみると、

「……あれ、角か？」

その人の額に円錐状えんすいじょうのものが二つあった。

よく見ると体の色が肌色ではなく、緑色だった。

このときは「まさかな……」と思った。

それでその日の夕食の時に母さんに聞いてみると、

「ああ、それは『オーガ』のことかしら。確かにこの国にしてみたら珍しいほうね。」と。

本当に人外だったよ。

このあともまた、聞いたり調べたりした。

この世界には人間のほかにも多くの種族がいた。

ほぼ人間と遜色そんしよくない者や異なった者など、様々だ。

街中で見つけたオーガのほかにも長く鋭い耳を持つ『エルフ』や、獣の一部を持っている『獣人』などがある。

さらに世間には知られていない種族もいるらしい。世界は広い。

そして最後に知ったもの。それは『魔物』、いわゆる『モンスター』だ。

野生の動物と考えるもいいが、基本人間やほかの種族を襲うのでこちらに分類させてもらう。

これも見た。けど自分自身は国外には出ていない。

ではどうやって見てたのか。それは、闇売買。

野生のモンスターを檻の中にいれて、そのモンスターを買ったり、売ったりしていた。

行っている場所は裏道。人目のつかないところだ。

人が見なければ何だって出来る、それをよしとしてやりたい放題に行っていた。

俺は覗く程度にしか見れなかったが、近づきたくなかった。

何故なら、私欲丸出しの顔が多くいたから。気持ち悪い。

まあ、この後にモンスターのことも調べただけだな。

しかし、さすがにこのことは人に聞いたら性格な情報は得られないと考えた。

理由？ そのモンスターらの恐怖や容姿を無駄に誇張する可能性があるから。

なので図書館の図鑑を読んでいた。さすが種類が多くて一冊に7～10日、少なくとも4日は掛かったけどね。

一つのカテゴリで少なくとも4～5種類はあったから。

たとえば魔獣の中で四足獣、その中の『ウルフ』というカテゴリがある。

『ウルフ』と分けられるのは、元の世界では『イヌ』や『オオカミ』のようなもの。

それが60～70種も書かれてた。それだけで2日は掛かった。それほど多い。

しかも種族と同じく、まだ確認されていないものまでいるらしい。

さて、今度はこの世界と元の世界での違い。元であったはあったがこことは構造が違うもの、それを挙げていく。

まずは、『通貨』

元では各国によって各種類の貨幣や紙幣、さまざまな単位が国内だけでなく世界中を回っていた。

しかしここでは、各国でも単位が同じだった。それは『カート』という。

決して買い物で押して使うものではない。単位だ。

そしてそれらはすべて貨幣で回っている。

貨幣は貨幣で、銅・銀・金となっている。

簡単に示すと、

銅<銀<金

銅貨1000枚⇐銀貨1枚。銀貨1000枚⇐金貨1枚

こう表せる。元のとほぼ同じ様で安心した。

そして貨幣を作る国は違えど、共通貨というわけだ。

RPGのゲームと同じ。密かなご都合設定。

次に違うもの。『大陸』だ。

図書館で地図を拝借したところ、「ああ、やっぱり違うよな。」と。

大陸は大きく分けて7つ。海と陸の割合は6：4だ。

俺が住んでいる大陸はオーベント大陸といわれている。

その大陸は地図のなかでは2番目に大きいらしい。

示すとすると、

グラントルガ大陸＞オーベント大陸＞ユナシャリア大陸＞キクツチ
大陸　ネーブニ大陸＞ラグドフ大陸＞シャネ大陸

となっている。

各大陸の説明は後々に話すでしょう。

もちろんその地図には日本列島はともかく、ユーラシア大陸や他の大陸ですらなかった。

そして最後の違い。それは『言語』

俺が生まれた時に母さんたちが言っていた言葉はわかった。

つまり、日本語だ。外国人さんたちが流暢じゅうちやうに話す光景は新鮮だよな。

この言語、日本語に聞こえるが『日本』語ではなかった。『トルケト』語という。

日本語に聞こえるのにトルケト語とは是如何これいかに、と思われるが、流さ石すがにこれは説明するのは難しい。

「トルケト語が日本語に聞こえるけど何で？」と言われれば、相手は必ず首を捻ひねるだろう。

「『日本語』ってなに？」と反問されるのがオチである。

とにかく、この『トルケト語』のほかにも多くの言語がある。

基本、1大陸に1言語だが、その大陸の地形上の関係などで2〜3

個あることもある。

詳細は割愛させていただく。機会があればだが。

話を戻そう。

たとえ喋ることができるとしても、文字としてはどうなのか。

さすがに文字までは一発で分からなかった。

英語などと同じように横書き。文字とも記号とも受け取れるものが列を組んでいた。

俺は焦っていたが、周りは子供なのだから分からないのは当然、と受けとらえていた。

ただ努力を多く費やしたので他の子供たちより早くトルケット語を理解できた。

なので、「お利口さんだねえ」と周りから笑顔で言われる。

これには俺も苦笑しかなかった。精神年齢19歳にもなってお利口さんはちよつと……

まあ、これらが違ったものだ。

他にも時代の違いか、電気などの目に見えないもので動く『機械』

はなかった。

「……ふう、こんなものか。」

そう言いながら。読み終え閉じた本をもとの位置にもどす。

以上が俺が調べたりして頭の中で整理したものだ。

紙と筆記用具があればもつと内容を小さくできたのだが、如何せんこの時代は紙…羊皮紙ようひしが一般庶民には手が出にくい代物しろものなのだ。

ただでさえ我が家は少し家計を切りつめているのだが、致いたし方かたない。

ともかく、今の状況ではここまでが限界である。

これが『この』世界である。

これがこの少年が生きたこととなった世界

しかし、その知識はすべての一部にままならない

彼はすべてを得ることに、

知識として得るか、体感して得るか

どれを選ぶかは、今は我らには分からない

世界はこんなもの（後書き）

おつかれさまでした。

今回に限ってはすごく考えました。

自分が読んできた中で、異世界の詳細を書かれているものがすくなかったので、

自分が納得できるまで考えました。

矛盾が起こったら……orz

とにかく、主人公が生きる世界はこうなっています。

実と言いますと、これに続けて国について書こうとおもいましたが、

流石に一度に設定を書き続けるのは読者さまが混乱してもおかしくない。

そう思いましてこのように分けました。

さて、次回の国・・クランディス王国についてのお話ですが、

骨はできています。後は肉付けとなっているので、そんなに時間は掛からないかと思います。

しかし、納得できるまで考える性分なので掛かってしまうこともあります。

……矛盾が発生してしまいましたが、精進していきたいと思います。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。

できるだけ早めに修正します。

ありがとうございました。

国の歴史（前書き）

いらっしゃいませ。

今回も説明の回です。

忍耐強く読んでいただけるならうれしいです。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

国の歴史

俺が住んでいる国について書かれている本を読んでから、だいたい6時間が過ぎた。

ある程度理解できた俺はその後、夕食の材料を買いに行き、そのまま帰宅した。

夕食であつたシチュー（のようなもの）を食べ、今は寝台の上で寝転んでいる。

頭のなかはもちろん、『克蘭デイス王国』についてだ。

まず、建国のことについて考えていく。

国として成り立ったのは^{じつれき}洗暦853年 - 現在は952年 - 。

『国として』というのは理由があつた。

建国者はルドファルト・クランデイス。

もとは一介の^{ようへい}傭兵で貴族の軍に所属していた。

彼は人を惹きつける才を持っていた。

その才で多くの人々から信頼を受けていたそうだ。

同僚や上司、後輩、はたまた貴族本家からも受けていた。

そうすると自然に仲間が出来、重大な会議などにも顔を出していた。

もちろんその場にいる者全員が^{とが}咎めることはなかった。

そして会議が終了したとき、ある者が言った。

「国を作ってみたらどうだ。」と。

その発言はだれもが驚いた。

発言者は、貴族の主だったのだ。

もちろん誰も反応に困惑した。

反応が無いことに業を煮やしたのか、ぶっきらぼうに

「ルドファルト、お前が作ってみないか。」といった。

指名された本人は当然困惑した。

すると周りは、

「ルドファントが作る国か……」

「それは少し興味が沸くな。」

「是非作ってくれ。俺も家臣として働いてみたいんだ。」

など、ワイワイと聞こえてくる蚊帳の外。

彼はそれらに心が揺らいだ。

そしてとどめは、

「何、資金などは私から提供する。やってみないか。」

発案者の言葉だった。

そして、ルドファントは……折れた。

その後は着々と準備が進み、滞りなく国『もどき』が出来ていった。そして準備が完了したとき、彼は思った。

「国が出来たのなら、『国王』は一体誰のか。」と。

国を作ったとはいえ、主導者がいなければ衰退するのみ。

かといって作った本人になる、というわけにはいかないだろう。

ならば、発案者である貴族の主が王になるのが必然ではなからうか。

そう思っていたのだろう。しかし、その考えは後に破壊されてしまった。

それは、国『もどき』が出来たことを祝う会合でおこった。

皆が互いに祝い合い、酒や料理に舌鼓をうっていたとき、

貴族の主が舞台に立ち、

「いきなりですまないが、私から大切な話がある。」

そういった。

さすが貴族の主、先ほどの喧騒がうそみたいに静かになった。

そして、言った。

「私たちが準備に頭や体を使い、こうして立派な国が出来た。これは私でも予想がつかなかった。

そして完成が近付き、ゆとりがもてるようになった時、ふと思った。

国の長である『国王』はだれになるのか。

皆が私を選ぶのならば私は嬉しいが、現在は一族の長。二つの長を勤めることは非常に難しい。

なので私は勝手ながら辞退させていただく。

その代わり、私はある者を推薦する。

その者の名は、『ルドファルト・克蘭ディス』。私の大切な友人だ。」

言い切り、手に持っていた葡萄酒で口を湿らす。

そして、

「この者は国王に相応しいと私は思う。」

いや、先ほどの言葉に齟齬そごがあつたので訂正させてもらう。

この者は国王に『なるべき』だと私は思う。

このことは私が勝手ながらに推薦したことだ。納得できない者もいるだろう。

なので、ここで皆に問う。

ルドファルト・クランディスを国王となるべき者だと思ふもの、

挙手をしてもらいたい。」

祝宴会には相応しくない選挙。

会場は未だに閑散としていた。

もちろんルドファルトは突然の出来事なので茫然ぼうぜんとして、その光景を目に映していた。

一人の手がゆっくりと上がっていた。

周りの目を気にしながらの挙手であつた。

すると、別の場所からも手が挙がつた。

そこからだった。

ぼつぼつと上がった手が多くなり、気がつくと全員が手を挙げていた。

いや、全員ではなかった。……貴族の主と『国王』となるであろう者が空いている手を下に向けていた。

その光景を見た主は、自らも手を挙げた。

そしてただ一人、挙げていない者に顔を向けた。

主と視線を交わしたルドファントは、小さく、誰にも聞かれないように小さく息を吐き。

『国王』が天に向けて手を伸ばした。

この時が『自らが作った国王』が誕生した瞬間であった。

その後に政策、軍隊、外交が行われ、あまり問題なく年月が過ぎていった。

そして洸年866年。国が出来て13年。

国王になる前からついていた妻と息子に見守られながら息を引き取った。

享年45歳。持病よるものであった。若すぎる死である。

しかし、その表情は微笑んでいたそうだ。

1	1	1
2	1	1
3	1	1
4	1	1
5	1	1
6	1	1
7	1	1
8	1	1
9	1	1
10	1	1
11	1	1
12	1	1
13	1	1
14	1	1
15	1	1
16	1	1
17	1	1
18	1	1
19	1	1
20	1	1
21	1	1
22	1	1
23	1	1
24	1	1
25	1	1
26	1	1
27	1	1
28	1	1
29	1	1
30	1	1
31	1	1
32	1	1
33	1	1
34	1	1
35	1	1
36	1	1
37	1	1
38	1	1
39	1	1
40	1	1
41	1	1
42	1	1
43	1	1
44	1	1
45	1	1
46	1	1
47	1	1
48	1	1
49	1	1
50	1	1
51	1	1
52	1	1
53	1	1
54	1	1
55	1	1
56	1	1
57	1	1
58	1	1
59	1	1
60	1	1
61	1	1
62	1	1
63	1	1
64	1	1
65	1	1
66	1	1
67	1	1
68	1	1
69	1	1
70	1	1
71	1	1
72	1	1
73	1	1
74	1	1
75	1	1
76	1	1
77	1	1
78	1	1
79	1	1
80	1	1
81	1	1
82	1	1
83	1	1
84	1	1
85	1	1
86	1	1
87	1	1
88	1	1
89	1	1
90	1	1
91	1	1
92	1	1
93	1	1
94	1	1
95	1	1
96	1	1
97	1	1
98	1	1
99	1	1
100	1	1

現在の王はナヴァジス・クランディス第3国王。

921年に20歳で王位継承を受け、現在で20年が過ぎた。

温厚な性格で自らが市内を見て回っていた。

俺も2・3度目にしたことがある。

実際に容姿を見てみると、なるほどさもありなんと思った。

表情はいつも微笑みをし、行動もゆったりと、しかし通行の邪魔にならないように進んでいた。

表情を陰しくし、睨みつけるような眼をもっているのかと思っていたのだが、これで拍子抜けした。

まあ、常時眼光を周りに飛ばしているよりかはマシだ。

話を戻そう。

第2王国はシャナルダ・克蘭デイス。初代の息子である。

ナヴァジスも2代目の息子。血族である。

シャナルダは現在、息子に王位を継承し、自分は隠居の身となっている。

しかし気持ちはまだ若い様で、毎日街中を回っているようだ。

1	1	1
2	2	2
3	3	3
4	4	4
5	5	5
6	6	6
7	7	7
8	8	8
9	9	9
10	10	10
11	11	11
12	12	12
13	13	13
14	14	14
15	15	15
16	16	16
17	17	17
18	18	18
19	19	19
20	20	20
21	21	21
22	22	22
23	23	23
24	24	24
25	25	25
26	26	26
27	27	27
28	28	28
29	29	29
30	30	30
31	31	31
32	32	32
33	33	33
34	34	34
35	35	35
36	36	36
37	37	37
38	38	38
39	39	39
40	40	40
41	41	41
42	42	42
43	43	43
44	44	44
45	45	45
46	46	46
47	47	47
48	48	48
49	49	49
50	50	50
51	51	51
52	52	52
53	53	53
54	54	54
55	55	55
56	56	56
57	57	57
58	58	58
59	59	59
60	60	60
61	61	61
62	62	62
63	63	63
64	64	64
65	65	65
66	66	66
67	67	67
68	68	68
69	69	69
70	70	70
71	71	71
72	72	72
73	73	73
74	74	74
75	75	75
76	76	76
77	77	77
78	78	78
79	79	79
80	80	80
81	81	81
82	82	82
83	83	83
84	84	84
85	85	85
86	86	86
87	87	87
88	88	88
89	89	89
90	90	90
91	91	91
92	92	92
93	93	93
94	94	94
95	95	95
96	96	96
97	97	97
98	98	98
99	99	99
100	100	100

次に国内についてだが、説明が多いので掻い摘んでいく。

まず政策だが、心配するほどでもなく安定している。

種族、門家関係なく豊かに過ごせるようにしている。

これも、初代の才によって考えたものだ。

現に、周りは笑顔や笑い声が絶えず、夜でも熱気が冷めないほどだ。

俺も「元の世界よりもすごく幸せだ。」と思ったほど。

軍隊も鍛錬に励んでいるところを公開し、祭りなどにも積極的に取り組みんでいる。

これも同じように笑顔を毎日みかけている。

そして外交なのだが、このことには少し不安がある。

国を作ったのは一介の傭兵、提供したのは貴族。

これは一般ではありえないことだそうだ。

何故ただの傭兵が国を作ることが出来たのか。

何故貴族が支援を行うのか。

貴族が傭兵に支援するのは、依怙^{えこひいき}鬲^い肩^きではないか。

こんな疑問や批判が飛び交っている。

また、その貴族は他国と親交を結んでいなかったのだ。

なので、他国にしてみたら少し不満や疑問の目を向けるのは当然だ。

表面では受け答えをするが、裏では罵詈雑言はじぞうごんをまき散らかしているかもしれない。

しかし、すぐ攻めるといふ訳にはいかない。

なので現在は様子見となっている。

「考えていたら、知恵熱がでてきた。」

そう言い、床に立って窓に目を向けた。

そこには程良く輝いている月と星が空にあった。

これが俺が調べた中での国だ。

あの本に載っていたことのほか、俺が考えたことも混じっている。

なので台詞などはすべて想像だ。

疑問や矛盾があっても俺には説明できない。

「同じ月でも考えていることは違う。」

何となくそんなことを言い、窓を閉める。

ただでさえ光源が少ないのに、その中の一つを閉じた。

残るは蠟燭ろうそくの灯。

その光を目に焼き付け、呟く。

「……明日は早く起きなきゃいけなかったな。」

そして最後の光に息を吹き掛け、

目の前の世界を黒く染めた。

[illegible]

彼は生みの国について知った

しかし、その知は意味がないことを我らは知っている

それは

故郷から出るのか、故郷が追放するのか

もしくは、
- - - - -

どうなるのかは、彼はまだ知らない

国の歴史（後書き）

おつかれさまでした。

今回は国についての説明でした。

やはり人物名を考えるのは難しいですね。
身をもって感じました。

矛盾があつたら報告をください。

脳を捻り潰すほど繋がります。強引でも。

政策や軍について説明を詳しくしませんでした、
これは後々にすべてを明らかにしていきたいと思ひます。
そこまで行くのに覚えていたらいいなあ。

さて、次回ですがまだ考えてません。

理由はあるのですが、出来るだけ早めに更新したいと思ひます。
主人公の名前と世界の説明だけでは、話が進みませんからね。
これを打っている間に案は浮かぶのですが、
それらをどう繋げるのか、時間をください。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

事情により更新が遅くなるかもしれませんが、ご了承ください。

ありがとうございました。

やつからの御告げ（前書き）

いらっしやいませ。

前回と打って変わって、説明は無いです。

しかし、話は進んでいません。

それでもよろしい方がいらっしやいますと、うれしいです。

では、どうぞ。

4 / 6 言い訳をあとがきに加えました。 * ↑ がそれです。

区切りを加えました。 4 / 3 0

やつからの御告げ

（――翌日――）

前の世界での習慣を体が覚えていた様で、太陽が昇ると同時に目が覚めた。

あの頃まで目覚まし時計を使っていたのだが、その音を聞けなくなるというのは何だか少し寂しい気持ちになる。

ともかく、俺はいつも通りに気持ちだけでもはつきりとさせ、毎朝行っていることをする。

それは、筋トレ――筋力トレーニングだ。

朝から何故そんなことをやっているかというと、時間を少し^{さかのぼ}遡らなければならぬ。

俺が生まれて4年を祝う日……つまり誕生日のときだ。

誕生日ってのは知らない人から祝ってくれると何だか嬉しくなってくるものなんだな。

そんなこんなで気持ちよく寝台で寝ていたんだ。

興奮しながらも、ゆっくりと意識がどこかへ落ちていく。

ふと気がつくと、俺は森の中にいたんだ。見たことのある森。

俺の姿を確認してみると……なんだか身長がのびた様な気がする。

つまり精神の姿で出てきたのか。17歳の姿で。

違和感があったと思ったらこれか。納得。

そう自己解決して、顔をあげる。

すると、目の前にいる人物が言った。

「お誕生日おめでとう。」

「祝福する気がないだろ。」

そう、（自称）神様が無表情にいた。前と同じように。

「で、何であんたがここにいる？」

「まあ待て。そう焦るものではない。」

両手を俺に向け、どうどう。オイコラ

「君を呼んだのは、少し話がしたいだけだよ。」

「ならその話をしようじゃないか。俺はさつさと精神も休みたいんだ。」

「そうかい。長話も何だから、座るかい？」

そう言うやつの後ろには椅子とテーブルがあつた。しかし、

「……何故ダイニングテーブルなんだ。」

前の世界での、家の中にあるテーブル。

それが堂々と置いてあつた。四足立てて。

しかも材料が鉄かよ。さらに合ってない。

それに加えて、椅子もだ。

何故ソファなんだ。何故？　なんで？

色も背景に合わないピンク。勘弁してくれ。

「何かおかしいのかな。」「違和感があるから言っている。」

間髪いれずに言う。

「……そんなにおかしいのか。……しかしこれが普通だと思っていたのだが……」

そう呟き、またあの時と同じように腕を組んで俯く。

こいつのセンスは大丈夫なのか。心配になってきた。

「……ともかく、さっさと話を聞かせてくれ。」

俺はそう言いながらナンセンスなソファに腰かけた。

「そうだな、ではしようか。」

そう言い、やつは俺の隣に座った。

「……何故となりに座る？」

「座れるものがこれしかないからだ。」

ならもうひとつだせばいいじゃないか、と言おうとした時

「私が準備で目を離れた隙に、いろいろと知ったようだな。」

いきなりの問いかけが来たので、仕方なく答える。

「まあ俺もこの世界に住むことだし、知っておいても損はないだろう。」

「ふむ、その心がけは良いことだ。短い時間によく調べられることができたな。」

「そりゃどうも。」

確かに我ながらによくやったと思う。

何せ毎日図書館へ足を運んだのだ。休むことなく。

なので、その職員全員に顔を覚えられたのだ。

もちろん俺も職員全員の顔を覚えている。

だから会ったびに挨拶をしている。いいよね、交流って。

「ところで、その『準備』って何だ？」

やつの言葉に少し引っかけがある単語を聞いてみた。

「なに、ちょっとしたことだ。楽しみにしとけ。」

微笑みながら言う。

くそ、なんて綺麗な微笑みなんだ！

「はは、それは俺に関係するものなのやら。」

で、話はそれだけか。」

気持ちだけでもいいから寝たい。

「ああ、話は終わりだ。ここからは『命令』だ。よく聞いておけ。」

そう言った途端、やつの雰囲気が変わった。

「この先に国にとって、君にとっての重要な事件が起きる。

あえて何時、とは言わないが君も準備をしておくといい。

なかなか難しいと思うが、今の時点で私から言えることはこれだけだ。」

真っ直ぐに俺の目を見てヒントを言う。

その言葉に、俺は無言で続きをうながす。

「我、汝に『使命』を言い渡す。

汝、強くなれ。 ただそれだけだ。」

そんな短い言葉だった。

「それは、今からでも間に合うのか？」

「十分に間に合う。逆にお釣りがでるほどだ。」

そんなことを言っているやつは、いつも通りの様子でいた。

「そのお釣りってというのが何なのか分からないが、気が向いたらな。」

「ふっ、それは楽しみだな。」

鼻で笑い、信用したような口振り。褒めているのか、馬鹿にしているのか。

「とりあえず、今回の話は終わりだ。肝に銘じておくように。」

「はいはい、御意。でいいかな。」

そう言い、笑いあった。

「あ、そうだ。」

ふと、気になったことを口にした。

「あいつらは……あいつは、元気なのか？」

最期の俺を見たあいつ。今はどうなっているのだろうか。

「……ああ、元気に女を釣っているよ。」「ハハッ、クロス」

おつと失言。

「じゃ、君の精神を戻すよ。」

「ああ、頼む。」

そう言い、やつの周りに魔力らしきものが出ていた。

「あ、そうだ。強くなることの助言をしておく。

君の国の軍隊の稽古を見たり、今までと同じように本で調べるといいだろう。」

なるほど、確かにそうだな。

「おう、ありがとう。」

俺からは感想なんだが、

ちょうどよく気持ちいい風だ。じゃあな。」

一陣の風が吹いたころは、一人しかいなかった。

「ふつ。なかなか面白いな、『君』というものは。」

--	--	--

朝の挨拶を交わしている鳥の囀りさえずが聞こえてきた。

「……気分はまだ眠たい。」

そう言いながらも寝台から離れ、窓を開ける。

いつも通りの日の出前。空がほんのりと明るくなっている。

今でも囀りを交わしている鳥は屋根の上で、歩いたり跳ねたりしている。

『この先に国にとって、君にとっての重要な事件が起きる。』

そんなことがこれから先起きるということはこの光景を目の前になると、笑い草の話である。

誰もが思わない。信じない。つまり、在り得ないということだ。

しかし、俺はだれにも言いふらさない。言えるわけがない。

平和な国の中心で『事件』を叫ぶことは、後で侮蔑の眼差しを受けることだ。

「……とりあえず朝食を考えないと。」

そう言い残し、俺は自室から出る。

「調べるが増えた。俺、図書館の常連以上に通っているんじゃないか？」

4歳から鍛えることがこんなに苦しいと思ったのは、いい思い出である。

[illegible]

彼は我らに『使命』を受け取った

しかし、彼はその『使命』の重要性を知らない

我らは彼に『使命』を言い渡した

しかし、我らはその『使命』によって驚愕させられた

そのことは、後に分かるだろう

やつからの御告げ（後書き）

おつかれさまでした。

前書きに記しました通り、話が進んでません。

逆に戻って、過去の話をしてますね。

……いや、この話をしないと進まない訳があるからなのですが。自分にとっては、早く進ませたいなあ、と。

さて、内容ですが。

正直、自分の印象では

「これ、何か支離滅裂となっていないか？」と。

やはり日を跨ぐと考えが変わってしまうのが痛いです。

一日の内に済ませるタイプなので。

なので、矛盾がありましたらご報告ください。

*「森の中で風は普通吹かないんじゃないか？」という疑問をもらいました。

もう少し言い訳を言うと、『神だから不可能を可能にするのさ。』
だそうです。（汗）

次回についてです。

やはり案はでています。

幼馴染をだすか、他人に巻き込まれるか、

どう進めていこうか悩んでいます。

なので時間がかかるかもしれません。

と、前回もそう記したような気がします。

暇さえあれば、パソコンの前で寝転がりながら、はたまた座椅子に腰かけながら。

思いつく限りに考え、推敲して書いています。

その話はおいとして、お話を考えてきますので少々お待ち下さい。

誤字・脱字・文法の間違いなどがあればご報告ください。
できるだけ早く修正します。

がんばっていきます。

ありがとうございました。

俺はこうなっています（前書き）

いらっしやいませ。

何か物語の進むスピードがバラバラです。

進んだり、止まったり、戻ったり。

今回はすごく進みます。と言いますか、進みました。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

俺はこうなっています

）――7年後――）

ナヴァジス国王やシャヌルダ元国王が中で生活をしている城がある。

その近くで軍専用の闘技場が設置されている。

ここでは名の通り、軍人が己を鍛えている場所だ。

その場で鍛錬を行っている。

それにしても軍人の服装をしている人――正に軍人^{まさ}なのだが――がある場所に注視している。

どうやら他の者たちもそちらを見ているようだ。

ちらちらと見ながら木で出来た剣を振る者がいれば、自分が行うことはほったらかしにガン見をする者。

つまり、その場にいる軍人全員が見ていた。――一部を除いて。

その一部の者たちは――その注視の的となっている集団だ。その数、5人。

「おらっ！！」

一人の男が中心にいる人物に木の両手剣を振りおろす。

子供はともかく、大の大人が自分の体重すべてを振り下ろす剣に乗せた衝撃というのは、最低でも骨折という状態になる。

今 将^{まさ}に彼はそれを行った。

しかし、それは徒勞^{とらう}に終わった。

何故なら、彼は飛んでいた。空中に。

そして地に落ちた。自分が何をされたのかですら知らず。

中心にいた者は、右足で立っていた。

では左足はというと、さっきまで彼がいた方向、後方に向いていた。

その高さは、胸部のあたり。

そして、その足はゆっくりと降りて行き、片方の足とならんだ。

そして一言

「荒い。」

それだけである。

二つの音がした。

次に向かってきたのは両側、つまり二人だ。

同時に向かっていき、右側は両手で縦、左側は片手で横へと構えながら走る。

しかし、中心の者は動かない。先ほどのままで立っている。

そして二人は走り、

振り下ろし、薙^ないだ。

- - - 空気を - - -

先ほどまで目の前にいた標的^{こつぜん}が忽然と消え、二人は驚愕^{きょうがく}の表情^{あら}を露^{あら}わにしていた。

あいつはどこに消えた！？

その答えは、右の者の体が吹き飛ばされるかの様に真横へ向かった後だった。

また、二つの音。

一つは地に滑る音。

音源は先ほど木剣を振り下ろした者。

もう一つは、地に着く音。

その音源は、消えたはずの者であつた。

横薙ぎをした左の者は未だにその表情のままである。

そして、消えたはずの者の顔がまた消えた時、

顎^{あご}からの衝撃によつて上に、体ごと向かつていた。

残り一人。

そう思い、反撃者となる者は、自分を除いて立っているただ一人の方向に顔を向ける。

その生存者は目の前にいた。

そして今将にに木剣を振り下ろそうとしていた。

不意打ち、観戦者は誰もがそう思った。

そしてそれを受ける者は、自分に向かってくる剣に、触れる。

体を右側へと避け、左手はその剣にそって柄つかに滑らせるように向かう。

攻撃者は危険を感じたのか、慌てて剣を上にする。

しかし、その行為が徒あたとなった。

それを察知したのか、反撃者は右手で柄を握る。

左手は剣身を中心に添えている。

そして、

右手を上へ、左手を下へ押した。

攻撃者は相手の予想外の行為に手を離してしまった。

するとどうだろう。剣はその場所で勢いよく回転し始めた。

これは誰もが予測がつかなかった。

そして半回転したところで止まった。

柄は反撃者の方へ、

剣先は攻撃者の首元へ向いていた。

一瞬で静寂となった闘技場。

「……参った。」

その一言で先ほどとは真逆の、騒がしい歓声が上がった。

「お疲れさまでした。あの、大丈夫ですか？」

さっきまで反撃者となっていた者――少年の声が聞こえる。

「おお、大丈夫大丈夫。そっちこそお疲れさん。」

そして、こちらもさっきまで被害を受けてしまった者たちがいた。

「いやあ、しかし相変わらず強くなったねえ。」と、最後にやられた中年の男性が感心しながら言う。

「そうだな。あえて痣^{あざ}が残らないようにしてくれてるのだからな。」と、上に飛ばされた若人の男性が思い出したかのように言う。

「それって屈辱になるんだけど、何かこうもあっさりとやられると逆にスッキリするな。」と、最初に吹き飛んだ青年が笑いながら言う。

「お前の性癖が覚醒したところで、評価をいただくか。」と言い、

横に体を滑らされた中年代の男性が少年に顔を向ける。

「性癖じゃねえ！！！」これは青年。

さて、現在は酒場で模擬戦の後の反省会を行っているところだ。

俺は模擬戦を行った度^{たび}にこうやって兵士たちの評価を言うんだ。

……ん？ お前は誰だって？

あゝ、そうか。7年も経っているから俺がだれか分からないか。

大の大人を倒していた中心の人物。

そして、被害者となった人たちへ心配の声を掛けた少年。

両方とも俺、シャン、サムウィルだ。

今は12歳と大分成長^{だいぶ}したと思う。

身長は150cm代と伸びたし、体重も……成長期だから増えているし、ね。

あとの7年間は、やつの助言の通りにやった。

筋トレは当たり前のこと、図書館で体の動かし方の本や武器について載っている本をすべて呼んだ。

また、軍人の闘技場に行つて見学したりした。

その結果にこの状況だ。

筋肉モリモリ、というわけではないが、筋肉質な体を手に入れた。いわゆる細マッチョ。

体術もある程度はできるようになったし、武器の扱いも慣れた。たまに怪我するけど。

毎日闘技場に通ううちに顔を覚えられ、1年経つと一緒に鍛錬を行っていた。

すると、何時しか「模擬戦をやってみるか？」と言われ、続けているところになった。

何故こうなったかという……兵士さんたちが弱いからだ。

最初は「うわ、怖えよお」と怖気おじけ付いていたのだが、いざやってみると

「あれ？なんなの、これ？」と思うほど隙がありまくりだった。

動きもそんなに早くもないし、剣を受け止めたときの衝撃も耐えられた。

そして反撃をすると、ばったばったと倒れていく。

……え？嘘でしょ？

その後、「なんでそんなに強いんだ？教えてくれ！！」と懇願され、その輪が広がっていった。

結果、兵士さん全員に教えている。なんでこうなった。

まあ、ちゃんと俺がやってきたことを教えて、それを覚えているかを模擬戦で試験を行う。という感じだ。

兵士さんたちの成長は目紛めまぐるしいもので、なかなか強くなくなっていった。

ん？じゃあ、なんで兵士さんはさっきはボコボコにやられてたのって？

そりゃあ、俺も負けたくないから鍛えているんだよ。

- - - 閑話休題 - - -

俺が彼らに評価を言わなきゃならないのだが、

「そうですね、全体的には良かったです。しかし、みなさんは相手一人のことしか見ていないような感じがします。」

中盤でしかけた二人の攻撃は良かったです。あれが一番まともだと思います。

自分一人ならともかく、もう一人の味方がいたら攻撃の仕方を決めたり、合図を決めたりとしてください。

そこから連携攻撃ができれば、相手はほぼやられるでしょう。

以上で評価と助言です。」

そう言い切り、手に持っているが入っている杯さかずきを口元に運び、舌を湿らせる。

傍聴者4人はその言葉を聞き、頭の中で理解を得ようとしている。

他の兵士もそうなのだが、最初のころはまったく分かってもらえなかった。

俺の教え方が悪かったのかと思い、優しく且かつ簡単に分かりやすく教えたのだが、効果は僅かだった。

なので、大人たちにむかって「勉強してこい。」と一言。

「その間、俺はここに来ない」と付け加えると、全員が闘技場から出て行った。必死の形相けいしやうで。

その後で聞くと、「だって君が来なくなると強くなれないから。」と全員が口をそろえて言った。

なんと言いますか、熱心なのやら、馬鹿正直なのやら。

ともかく、勉強をしてきたやつから順に教えていった。

成長が著^{いちじう}しいのは嬉しいことだが、最初からやっていてくれと思った。

- - - - - 閑話休題（2回目） - - - - -

さて、今度は個人に教えるか。

「次に個人の評価ですが、誰からいきますか？」

そう言うや否や、全員が手を挙げた。

真面目なのは嬉しい反面、見境がない。

しかし、そこでやめるわけにはいかない。

「はあ……じゃあ、攻撃をした順番でいきますよ。」

そして説教^{およ} 及び助言を始めた。

俺が言ったことを要約すると、

一人目は猪突猛進しすぎ。相手の動きをよく見て、攻撃の仕方を
臨機応変りんきおうへんに行え。

二人目は力を入れすぎ。剣を地面にたたきつけるくらいなら、次の行動の準備をしておけ。

三人目は冷静になれ。実践では何が起こるか分からないから常に気を保て。

四人目は油断をするな。最後まで気を抜かずに倒すまで気を張れ。

こんな感じで言い渡した。大層に聞こえてしまうが。

それらを言つと彼らは感動したようなご様子。

目を潤ませてウンウンと頷きを止めなかった。傍はたから見ると異様な光景だ。

俺はその光景の一部の存在から早く離れたいので、簡単に締めて酒場から出て行った。

[illegible]

時を経て、彼は『使命』をまっとうしていた

我らはその状況を知っていた

しかし、彼にとっての1つ目の『事件』を迎える

運命はどの方向へ傾いてゆくのか

俺はこうなっています（後書き）

おつかれさまでした。

いきなり時間が進みました。

中身をじっくりと読みたいかたはごめんなさい。
とりあえず、今の状況はどんどん進めたいです。
年齢を幼すぎたのか・・・

そして主人公が強くなっています。
兵士をばったばったと倒しています。
なんだこれ。

さて、戦闘描写は上手く伝わったでしょうか？
初めてのことはかりなのでとても心配しています。
さらに、この後も戦闘を入れるつもりなので・・・
下手くそでごめんなさい。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

ドキドキとワクワクの日々が続いています。

ありがとうございました。

2 / 27 ルビにミスを見つけたかったので修正いたしました。
まだあるかもしれませんが……

崩れた音・・・前編（前書き）

いらっしやいませ。

今回は2つに分けます。下手したら3つに分かれるかもしれません。
なので、短いです。
理由は後ほど。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

崩れた音 - - - 前編

さて、闘技場で模擬戦を行ったのが、太陽がてっぺんより西側にいた時。

そして反省会を始めたのが太陽が夕焼けになっていた時だ。

で、酒場から出ている現在は、その太陽がなく、対称の月が昇っていた。

つまり夜である。流石に長く居過ぎた。

母さんには遅くなると言っておいたが、早く帰らないと怒られるだろう。

「つか、未成年が遅くまでいたら駄目なんじゃないか？」

店員は見て見ぬ振りだったんだが、大丈夫か？

とにかく、俺は母のオーガ化が増えないように早く帰宅する。

さて、酒場から我が家までの間は、家が15軒ほど建っている。

とすると、一軒一軒の間に細い道……裏道が多くある。

その道は、世界の紹介であつたように怪しい事を行っていることが多い。

何故こんな話をしているかというと、

「……っ、………！……！」

こんな声が聞こえた。

男がなにか叫んでいるようだが、ここからだとかくようにしか聞こえない。

「好奇心は猫をも殺す」老若男女問わず持っている好奇心。

転生した身としても気になってしまふ。

そして、声が聞こえる一本の細い裏道を覗く。

「ふざけるな！！なんでそんな事をしなきゃならないんだ！！！」

「すべてはあの方のため。どうだろうか？」

どうやら何かの交渉みたいだ。

まさか、モンスター売買が行われているのか？

それにしても、檻や大きな荷物らしき物は見当たらない。

それに雰囲気何か怪しい。

「断固拒否する！二度と姿を出すな！！！」

どうやら交渉は決裂のようだ。

いきなりのことなので頭の中が混乱してしまった。

中年の男が怒気を含めた声を叫び、こちらへ向かおうとする。

「やばっ」と思い、慌てて身を隠そうとした。

すると、

「そうですか、致し方ないですが……」

そう言い、男性らしき者は男に近づき、

「……私の前から消えてもらいます。」

男の体に剣を生やした。

男の心臓部分から剣の先がこちらに向いていた。

暗くてよく見えないが、剣に何か液体らしきものがついていていた。

男は苦悶^{くもん}の声、呻き^{うめ}声を出しながら、後ろの男性を見ようと首を動かすが、

それは叶わなかった。

その前に、生えていた剣を抜かれてしまう。

剣を刺されてから全身に力が入らず、その支えとなっていたものがなくなると、男はその場で倒れてしまった。

倒れてから男の声は聞こえない。

返事としては、男から出る液体。

「本当に残念です。あなたなら我々に協力してくれると思っていたのですが……」

倒れている男『であつた』ものを見下しながら言う。

「仕方がないですよ。あなたが『拒絶』と言い切ってしまったのですから。」

まるで言い訳のように言いながら、死体の首に剣先を突きつけて、

止めを刺した。

「……おい。こいつを片付ける。」

先ほどとは打って変わって、冷徹な声が聞こえた。

俺はその光景をただ見ていることしかできなかった。

初めて見た『殺人』。いや、生物がプツリと生命を切られた瞬間を、始めて見た。

動く様子が無い。生気が無くなった。息一つしない。

そして、男から『音』が無くなった。

糸を切られたマリオネット。正にそれである。まさ

俺は何もできなかった。

声一つも出せず、街の人に助けを呼ぶこともできなかった。

無力。そう、俺は『無力』であった。

そして、恐怖を抱いていた。

その相手は何か。

人を殺した男性に、か。

それとも、

命の『存在』が消された男に、か。

どちらか分らない。ただ、恐怖しかなかった。今度は俺が殺される。今度は俺があのようになる。

そして、『それ』によって俺は、やってしまった。

砂をすり潰したような音。

音源は、俺の靴からだった。

そして、

「おや、何方どなたがいるようですね。」

彼はその『世界』を垣間見た

そして、『世界』に引きずり込まれる

それは、幸か不幸か、どちらなのか

崩れた音・・・前編（後書き）

おつかれさまでした。

本当に短かったです。

いろいろと考えていくうちに頭がオーバーヒートを起こしてしまい、寝込んでしまいました。

これを書いている今はだいぶましになっています。

さて、話を分けた理由としては前述のとおりでもあります。

1話で一つの出来事を書くようにしています。

しかし今回は長くなってしまい、また皆様を待たせるわけにもいかなかったので、

強引にこのような処置にしました。

後に編集を行うかもしれません。

さて、次回の更新ですが、

文章として書くのにまた時間がかかりそうです。

なので、またいつも通りのペースです。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

崩れた音・・・後編（前書き）

いらっしゃいませ。

前編と比べて長くなったと思います。
文字数は数えていませんが。

では、どうぞ。

3 / 3 ほんのすこしだけ文を付け加えました。

区切りを加えました。 4 / 30

崩れた音 - - - 後編

死神の目がこちらを見た。

俺はそう思った。ただ一人の男をみただけで。

思わず、尻込みをいつてしまった。

足音が一つずつ、こちらに歩いてくるように聞こえる。

月明かりを遮られてできた闇を見ている。

俺は目を動かすことができなかった。

恐怖によって身動きがとれないこと、見えない殺害者を見たいという好奇心。

ここでもまだ『好奇心』が出ている。

しかし殺す対象は、『自分自身』という可能性。

何故人間は危機に瀕している時に、冷静に判断できるのだろうか。

こんなことですら考える事ができる。

まるで時間が止まっているかのようにいろいろと考えが出てくる。

しかし、現実是非常である。

いや、この世界では『現実』といえる世界なのか。

そんな考えもできた。

音が聞こえる。靴を鳴らす音。コツコツと。

何故俺はこの裏道を覗いてしまったのだろうか。

後から悔むから『後悔』。そんな言葉が頭の中に浮かんだ。

正に文字通りだ。文字通り過ぎて何故こんなことを考えているのか。

だめだ、混乱している。さっき冷静に判断できるという考えはどこへいった。

このようなことを頭の中で回っていると、

相手の靴の先が月明かりに照らされた。

「まさかこのようなものを見ていたお方がいらしたとは、思いもよ
りませんでした。」

笑いを含んだ声が両壁に響いて俺の耳に聞こえる。

一歩、近づく。反対の靴がすべて露わになる。

「もう少し時間を遅らせて『話し合い』をしておけばよかったのでしょうか？」

誰にも聞いていない疑問を呟く。答える者は誰ひとりいない。

靴の先から上の存在を照らしてくれた。

しかし、感謝はしていない。逆に恨みを覚える。

「だけでも、今の時間帯でも十分に遅いですよね。」

再び笑みを含んだ声。違いはその笑みの深さ。

そうである証明は、男性の表情。

服装は青いローブを身に着けていた。中身の格好は分からない。

第一印象は『知性』と言えるほどの顔つき。おまけに眼鏡をかけていた。

髪色は色が薄い茶色。ほぼ金髪といってもよい。形は肩まで伸びているようだ。

その男性の表情は、『笑顔』。

その種類は、相手を畏怖嫌厭^{いふけんえん}とさせるもの。

両端が異常に引き上げられた口、逆さ三日月となってる目。

顔に3つの月が浮かんでいた。

そして、口を再び動かし、

「何故こんなところに子供がいるのでしょうか？」

一層『笑み』を深くした。

そして俺も、一層『恐怖』を感じた。

「本来こんな時間にあなた見たいな子供は、いてはいけませんよ。」

まるで先生のように言ってくる。

言う者がこの姿だと納得できる。

しかし、状況がこれだとどうだろうか。

「しかも、私を『怪物』のような眼で見るとは、自分でも傷つきますよ。」

そう言い、苦笑した。

俺は未だに動けずにいた。

人の形をした恐怖が目の前にいるという事実。

その事実を理性は受け入れようとしない。否、^{いな}できないでいた。

それを知らず、彼はまた口を開く。

「……そうだ。こうしましょうか。」

思いついたかのような声をだし、尻もちをついた俺の前でしゃがむ。

死神の顔が突如近づいた。

しかし、俺は動けなかった。

相手の表情は笑み。満面の笑みであつた。

しかし、俺は畏怖の顔。

この場、この瞬間に、対称の人間ができた。

彼は提案した。

「早く帰きなさいという名目で、

あなたの存在を消しましょう。」

死神の笑みを見た。

「ふつ。しかし、先ほど殺人を犯した私があなたを殺すというのは、
かわいそうですね。」

そう言い、あわ憐れみのまなざ眼差しを向ける。

笑顔はそのまま。

「なので、こうするのはどうでしょう。」

あなたを殺すのは私ではなく、

私の部下たちではどうでしょうか。」

死の選択肢が増えた。

部下？お前は上司かなにかなのか。

しかも、今ここにいいのか？

それらの答えを言うように、

「……おい。『あれ』は片付いたか？」

冷血な声。無表情。

「……先ほど終わりました。『次』はどうしますか？」

闇から声が聞こえる。

確かに部下がいた。

そういえば、男性は言った。

『……おい。こいつを片付けろ。』

その言葉は彼の後ろに向かって言っていた。

つまり、最低でも一人はいるわけだ。

「次は、こいつの子守だ。」

ちゃんとやっておけよ。」

そして、無表情からの『笑み』

そう言い、彼は闇へ戻った。

代わりに現れたのは、フードを被^{かぶ}った者。

どれもフードを目深に被っているため、顔の様子が分からない。

その数、4つ。

ほんのちいさな音も立てずに姿を出した。

もちろん中身は人間であろう。身長に差が見える。

それを確認した後、俺は瞬きをした。

したはずだった。

彼は一つ目の『事件』 - - 『試練』を迎えた

そこで彼は、初めて『死』を目の当たりにした

次の『死』を与えられるのは

彼か、もしくは……

崩れた音 - - - 後編（後書き）

おつかれさまでした。

中途半端なところで切りました。

頭が追いつかなくて笑えてきました。

考える時間も少なくなってきたので。

話を強引に進めるのは大変ですね。

自分は細かくしてしまう性分なので、しかたありません。

他の作者様方が羨ましいです。

……勉強ですね。がんばります。

服の種類が分かりません。

今までも服装はイメージできるので、

その服の名前を知らないことが度々《たびたび》……全てでした。

このことも勉強します。

少し話しの方向を変更しました。

本来ならもうバトル開始なのですが、

ふと気づいたことがありますので変えました。

これも性格がでてしまってますね。すみません。

さて、友人から「お前の文に難しい言葉ばかりある。自重しろ。」
と言われました。

しかし、それらはただ思いついたことをただ書いているだけです。
難しかったら……自分で調べてください。おねがいします。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。

できるだけ早く修正します。

今思ったら、主人公の容姿を書いていない！

……話が進んでいったら、自分の顔を見られる機会があるので、そこまで我慢しててください。

現在は皆様の想像で補ってくださいとありがたいです。

ありがとうございました。

決断と戦闘（前書き）

いらっしやいませ。

今回は戦闘がはいっています。

なので、地味に長くなってしまいました。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

決断と戦闘

「やあ、こんばんわ。」

目の前にあの『神様』がいた。

突然現れた人物に茫然としてしまい、何者か気がついた時には安心してしまっただ。

その姿を確認した後、周りの風景を見渡した。

裏道。前回の森の中ではなく裏道。つまり、場所は変わっていないかった。

『神様』が立っているところは、俺の目の前。

では先ほどの4つの影は何処へいったのか。

「お、おい。さっきのやつらは、どこへいった？」

自分でも驚くほど声が震えてしまった。情けない。

「その質問に答える前に、此処こゝが『何処』か分かる方がいい。」

そう言い俺から目線を逸らし、俺の背景へと向けた。

俺もそれに倣ならい、上半身を動かして振り返る。

視界に広がった『色』は、白。

俺がいたはずの世界の色は『闇』の黒。しかし、ここは『無』の白。
遠近が分からず、奥があるのかすらわからない。

『白』と『黒』の境界は、俺。

「今さっきまでいた君の景色を切り取った空間。つまり、『異空間』
と言うものだね。」

やつはそう言い、微笑んだ。

異世界での異空間。俺にしてみればそう捉えられる。

しかし、異空間というのものはこんなにも繊細であり、不気味であるのか。

前の景色は『さっき』とは寸分狂わずに似ている。それどころかそのままである。

しかし、いざ振り返ると何もない『白』の世界。家、空、月も何もかもが無い。

だが、今俺が手についている地面は紛れもなく本物の感触だった。

「さて、私が君をここに連れてきたのは理由がある。」

そう言い、俺に手を差し伸べた。

その手を取り、地についていた腰を上げる。

先ほどの精神への衝撃がまだ治まっていなかったのか、フラツとよろめいてしまった。

まずいと思い、おもむろに左手で壁に手をついた。そこから伝わる感触は、本物。

その感触に安心できたのか、立ち直ることができた。

それを見ていたやつは一つ頷き、

「なんとか安定できたようだな。今回は時間があまりないから手早くすませるぞ。」と言い、

俺に向かって一本の指を突き付けた。

「君には、ここで『ある』決断をするかしまいかの選択が迫られている。」

そして間を置き、

「だがその前に、君に一つ質問をする。」

そう言った。

俺はその前の『ある』決断について知りたかったが、質問に答えるため続きを促す。

その無言をやつは受け取り、

「では、君に問う。

君はまだ生きたいか？」そう言った。

ただそれだけの短い質問。

しかし、彼にとっては重大な問題だった。

答えはすぐさまに帰ってくる。

「もちろんだ。まだ生きていきたい。この世界をもっと知りたいんだ。」

やつはその答えに頷き、口を開く。

「承知した。ならば、君はここで決断してもらう。

君はこれから『死』の淵ふちに立たされることとなる。その淵はとても狭く、脆い。

なので、たった一つの小さい石の重さが加わると『死』へと落とされてしまう。つまり、君の行動次第で落ちてしまうわけだ。

だが、君はまだ生きたい。その淵から脱出したい。ならどうするのか。後ろに下がるのも良し。その淵から飛び、向こう側の淵へと向かうのも良い。

どう判断し『生きて』いくのかは君次第だ。我々がどうこう言うことではない。」

そこで一区切りをつけ、

「君の目の前に広がる世界を否定するな。その行為は同時に『死』をもたらすこととなる。

君には『力』がある。その『力』をどう駆使し、誰のために使うかは考えて行け。

万物に『正解』は無い。何万、何億もの答えがある。その中の答えが、君だ。

万物を知りたいなら、万物を受け入れろ。それが最善、最短の道だ。」

そこまで言い、俺の目を見る。

「さて、残念ながら時間が迫ってきているようだ。本当に残念だ。

とにかく、君の『未来』はそうなってゆくだろう。

『未来』については考えなくていい。思うままに行動していればいいんだ。

我々は君をいつまでも見守っている。どんな道を歩くとしても咎めはしない。」

異空間に違和感が出てきた。

崩れ始める壁。穴があき始めた地面。『白』から『黒』へと変わる俺の背景。

どうやら、異空間が消えはじめたようだ。

その中、やつは言った。

「そうだ。君が生き残ったら『プレゼント』をあげよう。

神様から直にもらえる『プレゼント』。楽しみだろう。

中身は『秘密』だがな。

じゃあ、がんばって生きてこい。」

そして俺が瞬^{まばた}きをした。

気がつく、戻っていた。

目の前にいるのは『神様』ではなく、4つの影。

後ろを振り返ると、家、空、月があった。

俺は戻ってきた。

そう思い、その場で立ちあがった。

そうして俺は考えた。どうやって生き延びるか。

影たちは俺の様子の変化に怪しんでいる。

今さっきまで恐怖に彩られた表情から一変、後ろを振り向いたり、

立ちあがって顔を伏せたりした。

その違和感に悪寒を感じながらも、間合いを詰めていく。

『上司』からの命令。それを達成するために。

ゆっくりと近づいていく中、俺は顔を上げた。

そして実行した。

「なら、対抗するまでだ。」

俺が決断をしたと同時に、やつらは身構えた。

どうやら様子が変わったので警戒しているようだ。

しかし、俺は何もしない。ただ立つておくだけ。逃げずに、じっと。

この行為だけでもやつらの警戒レベルは上がったようだ。

突如、先頭の影が動きを示した。

彼が片手で構えたもの。それは両刃の剣であった。

その彼に促されるように後ろの者たちも同様の剣を抜いた。

最後尾のものは少しもたついていたようだが。

しかし、俺はそれを見せられても動じない。

これから行う戦法を考えていた。

俺の様子が警戒レベルを超えたのか、先頭が突如走り向かってきた。

それと同時に、俺はこれから行う戦法を決めた。しかし動かない。

4つの影の中で二番目に身長が高かった先頭の者は、剣を縦に振りおろそうとしていた。

さすがに知識があるのか、細い道では無闇^{むやみ}に振り回すことが出来ないことはわかっているようだ。

まるで、模擬戦のものと同じように。真っ直ぐに俺に向かっていた。

しかし、俺はそれを阻止した。

足で。

もう少し詳しくするなら、左足の裏。つまり靴底でだ。

俺が履いている靴は他の同年代の子が履いているものと同じだ。

ただ、長期間使用するがために靴底は少し厚く、また硬くなっていた。

履いている者は子供。つまり、大人よりも走ることが多いのでよりそういう構造の靴が多かった。

なので、靴底である程度の剣を止めることは簡単なのである。

そんなことはつゆ知らず、俺以外の者は驚愕の雰囲気を出した。

もちろん、表情が分からないため『雰囲気』なのだが。

先攻者もその内の一人。そのまま固まってしまったようだ。

その隙を俺は見逃さなかった。

左足をそのまま左側の壁へと押し、剣を叩きつける。

その反動を利用して、右足を相手の頭部へと蹴り込んだ。

右足の先の狙い。それは相手の^{こめかみ}蟀谷だ。

そのまま相手は頭を壁に叩きつけられ気絶した。

それとは打って変わって、俺は左足で壁を蹴りゆっくりと回転しながら着地する。

これで一人が倒れた。同時に残りの影に緊張が走った。

俺の目的は『できるだけ相手を殺さず、戦闘不能にさせる。』ことだ。

大人相手にこの目的は厳しいが、今俺が出来ることはこれだけだ。

また、初の対人戦で死者を出すと俺の心理に大きなダメージを与えることになる。

俺が学んできた中で人を殺すことが出来る技もあったため、やる気が出れば一応は出来る。

ただ、それらは無闇むやみにするものではない。

なので、誠に勝手ながら俺はハンデを持っているのだ。

たった一人の幼い男の子に大人がやられる。その事実は誠に受け入れ難いだろう。

しかし、目の前の光景は正にその『事実』だった。

俺は軽く頭を振り、次の相手を睨^{にら}んだ。

それに答えたのか、一番背が高い影が近寄ってきた。

剣を構える時に見える片腕からして、先程の者より力があることが窺^{うかが}える。

そして相手は縦に振りおろした。

それに対し、俺はさっきと同じように左足で受け止める。

しかし、ただ受け止めるだけでは体が持たない。ならどうするか。

剣に加わる力をそのまま下に受け流しながら、足もそって下ろす。

相手は受け流すとは思わなかったようで、致命的に体制を崩してしまった。

そして左足が地面についた瞬間、右足を上げる。

狙う場所は、腹部。その中の鳩尾だ。

俺が狙うところに気付いたのか、とっさに防ごうとする。

しかし、その行為……いや、判断自体が遅かった。

渾身の力を右足に溜め、人間の急所を狙った。

はたして、大きな体の影はその場で耐えることが出来ず、そのまま後ろへ『くの字』で飛んでいった。

後ろに控えていた残りの二人は、自分へ向かってくる物が何か分からなかったようだ。

一人は咄嗟とつとに避けたが、残りの一人が巻き添えを喰らったようだ。

何か声が聞こえたような。たしか、『ぬきゅっ!!!!』だったわけ。可愛らしいな。

| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

さてこの攻撃方法、どこかで見たことはないか？

二人目を倒すときに行った攻撃の方法。実は模擬戦で、一人目に行った攻撃と同じなのだ。

上からくる攻撃を左足で下に受け流しながら足を下ろす。

そして足が地面に着いたとき、その左足に重心を置き右足で蹴る。

言葉での説明は簡単だが、実際にやってみると意外と難しい。

どれほど難しいかは、自分で体験するほうが早いだろう。

振りかぶりの動作が小さかったため、力も速さも遅かった。

そのため、安易に右側に避けることが出来た。

そして相手に次の動作をさせないために武器に手をかける。

この行為も模擬戦での4人めに行ったものだ。

右手を剣の柄に、剣身を左手で切らないように掴む。

そして右を上へ力を加える。

これは、『^{てこ}挺子の原理』を利用したものである。

支点を左手、力点を右手とする。

そして右手を上^へに力を加える。このとき、左手はその位置にとどまるようにすることが重要。

すると左手を中心に力が加わる方向へ回転する、というわけだ。

相手は突然の行動でなす^{すべ}術も無く、武器を取られてしまった。

俺はそのまま半回転させて剣先を相手の喉へ突きつける。

いきなり窮地^{きゆうち}にたたされた影はどうすることも出来ない。

このまま殺されるのを待つしか出来なくなってしまった。

しかし、俺はそうはしなかった。

相手が剣先に注意を向けている隙に、左手で鳩尾を打って気絶させた。

残り一人。その者は大きい影の下敷きとなっていた。

力が足りないのか、上にのった影をどけることが出来なかった。

なにやら「にゅううー!!!」やら「こによやろー!!!」などが聞こえてきた。

声からするに女の子のようだ。

え? 『女の子』?

その疑問に気付き、かといって警戒を緩めることはできない。

大きい影を足で退け、その下の者の首元に剣先を突きつける。

その者は、やはり女の子であった。

フードが捲れてしまい、俺と同年代くらいの顔つきだと分かる。身長も4つの影の中で一番低かった。俺より少し低いくらいだ。

いきなりの救出に目をぱちくりとしていたが、突きつけられているものが分かったと表情が固まった。

「おい」

「ひゃい!!」

怯えているような返事が返ってきた。大丈夫かこいつ？

というか、こいつの目に涙がたまってきたているのがわかるのだが。

「お前は俺を殺すか？」

とりあえず敵意の確認を行った。だが、

「私を食べてもおいしくにやいですよー!!!!」

会話が成立できなかった。誰が食べるか。

すこしイライラしてきた。

「お前は食わないよ。とにかく、やるのかやらないのか、どっちだ。」

「ふえええ、食べるのなら他の人にしてくだしゃいー!!!!」

だめだこいつ、俺を人食いの何かだと勘違いしてやがる。食ってないのに。

少し強くするか。

「誰がお前なんぞ食うかつ!!まだやるのか!!どうなんだ!!!!」

少し声を荒げて言う。

すると、その声で言葉が止まり、

「……きゅっ」と、気絶した。

……え?ここでの気絶?えー!?

確認のために剣を持っていないほうの左手で頬を軽く叩く。

しかし、まったく起きる様子がない。どうしようか。

「……しかたない、持って帰ろう。」

もちろんこんなことをするには理由がある。

一つは、持って帰って家で尋問するため。

もう一つは……このまま置きっ放しにするのが可哀相かわいそうだから。

とにかく俺は剣を捨てて、女の子を背負って帰路に着いた。

もちろん母さんには二つの理由で怒られました。

決断と戦闘（後書き）

おつかれさまでした。

さて、なんだか長くなってしまったような気がします。

理由は上記のとおり、戦闘描写がつつらと書かれています。

みなさまにはうまく伝わったでしょうか。

今回は模擬戦で説明しなかったことを書きました。

その中の梃子の原理についてですが、この説明は自信がありません。うる覚えのなかで書いてしまったので、間違えていたらごめんなさい。

新キャラができました。

彼女には話に関係させていきます。

一応重要な役割なので、ご期待ください。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

少女の起床（前書き）

いらっしやいませ。

今回は軽く？話を進めます。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 3 0

少女の起床

いつのまにか木製の窓の隙間から、新たな日の光がこぼれていた。

それを確認した俺は無事に朝を迎えたことに安心した。

それと同時に朝まで耐えたことによる溜息が出てしまった。

俺が見ている先に人影がある。

その者は、昨夜気絶した少女であつた。

その子は今、俺の寝台に寝かせている。

そこから聞こえてくる音は、小さく規則正しい呼吸の音だった。

未だに気絶から一度も目覚めていない。

そのことを知っているということは、俺は家に帰ってから一睡もしていないことになる。

さて、何故俺がこんなことになっているのか。

それは家に帰ったところから話さなければならぬ。

といつても、掻^か摘^{つま}んで説明するのできるだけで短くするぞ。

女の子を背負った俺を見た母は、予想外の出来事に啞然^{あぜん}とした。

今更だが親の立場から考えると、息子が知らない女の子を背負っていたことは驚愕^{あたい}に値するだろう。

そんなことは露知らず、俺はさっさとその子を俺の部屋の寝台へ横たえた。

流石に両手が塞がっていたため、部屋の扉を開けるのに苦労したけど。

さて、女の子を寝台へ横たえたときに明かりをつけた。

そしてその時にその子の全貌を見ることができた。

ここで少し、言葉の修正をしなければならなかった。

『女の子』ではなく、『少女』といった方がいいか。

その子の顔つきはその言葉にあっていた。

髪色は程良い茶色であつたが、髪型はフードに遮かきられ分らない。

よくよく思い出してみると、身長も俺より少し低いくらいだから『女の子』と言つのは少しばかり大きすぎる。

あと体つきもだ。少し背中に膨らみを……ゲフンゲフン。

と、とにかくこれからは『少女』と改めさせてもらつ。

コンコン

俺がそんなことを考えていると、後ろからノックの音が聞こえた。

振り向くと母さんが扉を叩いた体制でいた。

背景の明かりによる逆光で表情は分らない。

「お帰り。その子はどうしたの？」

何気ない一言。ただ状況が状況なので、直ぐに答えることができなかった。

「……帰り道で倒れていたから介抱しようとおもったんだ。」

苦し紛れの言い訳。これはかなり厳しいだろう。

「……そう。じゃあその介抱の前に言わなければいけないことがあるけど、分かるわね？」

あれ？背景が揺らめいているように見えるのだが、気のせいかな。

《説教の話は説明するのに長すぎるため、省略させてもらいます。》

……廊下で立ちながら説教をくらうのは身体的と精神的に負担がかなりくることが分かった。

もちろんその間に少女の様子を盗み見していたから尚更だ。なおさら

だが起きる様子は一切なかった。肝が据わっているというか何と
うか。

「とにかく、その子が起きたら此処まで来た説明をしておきなさい。

シャンはここで見ていなさい。夕食を持ってくるから。」

そう言い切り、その場を去った。

後に残るのは俺と少女と、静寂と光。

部屋に戻って扉を閉め、今一度少女の様子を窺^{うかが}つ。

相変わらず安らかな寝顔を上に向けていた。息も拍子よく聞こえる。

しかし、その表情には似合わない服装。

明かりに照らされても黒い色をしているフード。

模様が無いということは真っ黒ということになるか。

闇に溶け込み標的を静かに、音もなく亡^なくす。

ふとあの瞬間を思い出した。

あの『死神』が行ったのはそれだ。『無』から『有』をだす、残酷な例。

それを俺は見た。そして恐怖した。そして、標的にされた。

幸運なのは、『死神』の手によって死を与えられることでは無かったことだ。

しかし、その幸運は何時まで続くのか、どこで終わりを迎えるのか。

それを知っているのは、『死神』だけだ。

だから俺は何も『することがない。

『される』ことは彼の両の掌に収まりきらないほどある。

もしその手を握ると、俺の存在が潰される。

何を『される』のか、知るまで待たなければならない。

「……ヤン」

そしてそれを俺は抵抗もなく受けなければならない。

「……シャ……？」

なす術もなく。

「シャーン……！」

その声で俺は視界を取り戻した。

目の前にあるのは少女と寝台と、母さんの顔。

「大丈夫？ 顔色が悪いわよ。」

心配色の声が耳に入る。そのことに少し安心した。

「あ、ああ。大丈夫、だよ。何もないから。」

虚勢を張るために笑顔を向ける。

ポツリ

そんな音が俺の真下から聞こえた。

そこに目をやると、周りより少し色が濃くなっていた場所があった。

円状。少し間を置いて理解する。ああ、汗か。

なんだ、俺は汗を掻いているのか。そんなに暑くないだろうに。

『シャン？ どうしたの？ 俯うつむいて。』

またもや掛けられる声。おまけに両の肩から暖かいものが包んでいく。

「うん、大丈夫だよ。どこも悪いところなんてないよ。」

虚勢の笑顔。俺は何故こんなことをしているのだろうか。

「そう？ならお母さんはまだやらなきゃいけないことがあるから、何かあったら呼んでね。」

そう言い、近くのテーブルへ夕食を置き、扉から姿が見えなくなっ
た。

それを確認をしたあと、俺は溜息をついた。

この溜息は何の意味が込められているのだろうか。

俺の心情が見られることなく済んでよかった、という安心か。

それとも、その心情を母さんに言えなかった、という後悔か。

どちらか、それは俺にも分からなかった。

意識を溜息から少女へ向ける。起きる様子は無し。

「そこまで激しくした覚えはないのだが。」と呟きながら夕食を手に取る。

その後も、少女の胸部の上下以外は一つも動かなかった。

そして現在に至^{いた}る、という訳だ。

眠くないといえ^{うそ}ば偽になるが、『慣れ』というのは真^{まこと}だ。

実はもとの世界にいた頃は、ほぼ毎日が徹夜か無眠であった。

理由は様々《さまざま》だが、俺の体はそれに慣れてしまったよう
だ。

だからこのような状況になっても苦しくない、という訳だ。

—《よい子は真似をしないでね。君の身体を壊すことがあるからだ
よ。》

ここまで寝なかった理由は、逃がさないこと。

もし俺が寝てしまい、相手が起きてしまうと必ず逃げることだろう。

なら逃げないように監視をしていればいいこと。

という単純明快な発想たんじゅんめいかいで寝ていない、という訳だ。

しかし、監視している間はまったくもって起きなかった。

これではやり損だ。けど相手は寝ている少女。勝手にやっているの
は俺だ。

そう思いながらも、明かりとは色が違う光が漏れているところへと
目を向ける。

普段通りの朝を迎えることができた。外は平和。内は緊迫。

この事実を知っているのは俺のみ。

席を立ち、朝日が漏れる窓へ向かった。

それを開くと漏れから流へと変わり、光が部屋の一部の床へ一直線に照らす。

そうすると明かりも消していいかなと思い、テーブル上の火を消す。

すると、背後の寝台から布が擦れ合う音が聞こえた。

振り向くと寝台の上にある白い塊かたまりが動いていた。

どうやら朝の眩まぶしさが彼女にも届いたようだ。

俺は、彼女の意識を早く起こすために体を揺ゆすった。

「おい、起きろ。朝だぞ。」

そう言いながら掛けの布を手早く、しかし強引にせずはに剥はいだ。

黒い塊――横よこに蹲つっていた少女がいた。

「起きろー。早くしないと大変なことになるぞー。」

言葉を棒読みしながら目の前の塊を揺する。

「……うにゅー、おきましゅ。」

舌ったらずな声が聞こえ、少女の目がゆっくりと開いていった。

俺が見えたのは、少女の青い瞳。

彼女が見えたのは、俺の黒い瞳。

第一印象はそんなものだった。

「誰ですか、あなたは。」

「それは俺も言うことだ。」

「とにかくまずは自己紹介といこうか。

俺はシャン・サムウィル。どこにでもいる少年だ。

お前は？」

そう言い、相手の紹介を促す。

「……リユナ。……リユナ・ティフィラル。」

小さい答えが返ってきた。

「そうか、リユナっていうのか。これからはそう呼ぶよ。」

許可を求めるように言った。頷きが返ってきた。

「じゃあリユナ、起きてすぐだけど質問するよ。」

『君は、何者だ？』

その質問だけ、声を低く尋ねた。^{たず}

同時に俺は右へ首を傾げた。^{かし}

言った瞬間、左の耳元に風が通り過ぎる音が聞こえた。

相手は右足の蹴りの体制。座った状態からの蹴りとは、なかなか正確にはできない。

俺は左手で足首を掴み、引くでもなく、払うのでもなく、

押した。

その行動に彼女は驚いた表情を浮かべた。

しかし体は二撃の用意をしていた。曲げた左足。

そして俺の顔へと伸ばした。

脚の攻撃を背中を反らしてかわした。

その反動を利用して両手を床へ着き、俺の脚を天井へ上げる。

脚と天井の間にあるのは、彼女の脚。当然ながらその脚も上げられた。

その隙を見つけ、体をくの字にして脚を床へ着かして彼女へ迫った。脚を上げられ体制を崩した彼女は、戻された右足を前へ突く。

しかし、その突きは意味を成さ^ななかった。

反撃者は出された脚を左腕で固め、右手で首を掴む。

そして言った。

「今一度問うぞ。お前は、何者だ。」

低く、冷たい問い。

その答えは、

「……わかった。答える。」

頭^{こぶし}を垂らして返ってきた。

獣人特有の耳を見せながら。

とりあえず彼女の首と脚を解放し、寝台へ座るように言った。

俺は近くの椅子へ腰掛けて先程とは違う問いを聞いた。

「その質問の前にだが、リユナは獣人だったのか。」

その言葉に体をビクつかせ、尋ねるように言った。

「……そうだと言ったら、軽蔑するの？」

まるで俺を恐怖の対象へと変えようとする、確認。その言葉に疑問が沸いたが、

「何で軽蔑しなきゃならないんだ？ 種族なんて星の数ほどいる。いちいち怖気おじけづ付いていたら気が持たないよ。」

それを聞いた途端、彼女は安心したような顔になり息を吐いた。

「どうした？『よかった』みたいな顔をして。」

「い、いや。なんでもないよ。」と苦笑い。

何か疑問が解決したのか、頭のフードを脱いだ。

その頭から見えるのは、肩までのびた髪と、先程の『耳』であった。

獣人――それは人間と獣の特性を合わせた種族。

特徴は頭部にある『耳』。それと、腰の後ろに生えている『尻尾』。

どちらも人間にはない、獣特有のものである。

その獣の種類によって耳の形や尻尾の長さがそれぞれ違うらしい。

しかし、その二つを隠すと人間そのものと見えるようになる。

世界の立場はどうなのか。それは人間より下位である。

人間は、普通我らに無いものが付いていることはおかしい、と考えた。

その考えから生まれるもの。それが『差別』となった。

現在でもその考えは通っており、奴隷まで造るようになった。

もとの世界でいう『ペット』である。扱いはこっちのほうが格段に悪いが。

初対面の、さらに敵同士なのに何口説いているんだよ、俺。

相手が苦笑いならともかく、警戒するだとうが。

そう後悔しながら、目の前の少女の顔色を窺う。

その色は青ではなく、赤。

真っ赤であつた。頬が。

「……可愛いなんて言ったの、君が初めてだよ。」

満更でもないご様子。別の意味で、なにやってんだ俺。
まごうじ

「は、話を戻そうか。君は一体何者なんだ？」

聞こえなかったことにして、慌てて本題へと戻した。

すると、彼女は顔を真剣な表情へと変え、

「……私は王の側近、その娘だ。」

その言葉から『自己紹介』は始まった。

[illegible]

『齒車』に回り続ける『普段通り』

もし、その『歯車』が意外な『歯車』と噛み合い、回るとすると

我々はその後の『歯車』がどうなっているのか、知らない

何故なら、その『歯車』は数え切れないほどあるのだから

少女の起床（後書き）

おつかれさまでした。

あまり話が進みませんでしたね。

必死に考えていますが、納得のいくものがなかなか出てきませんでした。

なのでこれも不完全燃焼なお話となってしまいました。
申し訳ございません。

さて、少女は猫の獣人でした。

ちなみに種類は考えてあります。

モデルは『アメリカンショートヘア』です。

自分は猫のことについてはよく分からなかったので少し苦労しました。

分からない方は自分で検索していただくと、特徴を掴みやすいと思います。

次回ですが、だらだらと続かせるつもりはありません。

時間はかかると思いますが。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

一人の自己紹介（前書き）

いらっしやいませ。

なにやらぐだぐだとなってしまいました。
半分が説明です。

では、どうぞ。

4 / 1 0 少し修正。

一人の自己紹介

彼女の現在までの経緯はこうだった。

リユナが産まれたのは今から12年前……つまり俺と同年であつた。

両親ともに獣人であり、純血な猫種であつた。

父方は現王の側近、母方は現王の従者という仕事をしている。

何故こんなことをしているのか。それには少し時を遡^{さかのぼ}らなければならぬ。

王の側近を勤めている父は優位な権力を持っている。側近政治とまではいかないが、王に助言をして政治を収めている。

その座を目指して王家に仕える者は少なくない。もちろん彼女もだ。

入城したのは8歳のころ。幼いながらもこの国では普通であつた。いや、国ではなく『世界』だ。

若者の夢の多くは、生まれの国のために働くことである。それが、就きたい職位があるからだ。

彼女の勤め初めは従者からであった。それもそれほどおかしくない。仕えたての者たちは、初めは従者となり素質を見極められて、各隊に所属するようになる。

その素質の見極め方は、定期健診と同時に魔力の検査や魔術のテストが行われていく。

つまり、従者という仕事の間にどれだけ強くなるか、いかに時間をうまく使っているかを問われる。

—（たぶんそんな人物を問われているんだな）と俺は思う。）

その検査を受けた彼女は、回復魔術が特に優れていた。このことは何も異論を持たなかった。

しかし、その後に配属された部隊に問題があった。

まず一つが、隊長の人物だ。

その隊長を勤めているのが、彼女の父親であった。

この国の王の側近は、一人ではなく複数人いるのだ。

外務・軍隊などに各一人ずつ代表者が『大臣』となり、職務を果たすのだ。

なので、父親である隊長が実の娘を選んだという訳だ。

すると、周りから『家族の依怙^{えこひ}鼻^い屑^き』な噂が流れてしまう。

実際にそのようなことは全く無いのだが、多くの者が冗談半分に流しているのだ。

しかし、それほど広くは流れなかった。

その理由が二つ目の問題であった。

父親の部隊は……裏専門の任務が主であるからだ。

つまり裏交渉はもちろん、暗殺を行うのだ。他の部隊より性質^{たち}が悪い仕事を受け持つのだ。

なので多くの者がその部隊にいい印象をもっていないのだ。

冗談で広めている者も、同情を含めているが多い。

これが大きく二つの問題だ。

さて、では父親から娘への依怙鼻屑ではないのなら、何故彼女を配属させたのか。

答えは単純。『回復役がほしい』からである。

ではそれまで回復役の者は居なかったのか。いや実際にはいた。『いた』のだ。

これまでの回復役の者は他の者たちと比べると、運動神経が低かった者が多かった。

なので、相手の多くはその者を真つ先に仕留めることがあった。

一つの任務を受けるごとに一人が死ぬことは多かったのだ。

つまり言い方を悪くすれば『使い捨て』な役だ。

彼女をその役につけられたのだ。

もちろん反対した。実の娘を『使い捨て』役にさせるのはおかしい、と。

しかし悲しくも権力の前では何も出来ない。己^やむ無く入隊したのであった。

彼女が携わってきた仕事……いや、この部隊に舞い込んでくる任務はやはり酷^{ひど}いものであった。

基本仕事の時間帯は主に深夜。これは人目に付かないようにするためだ。

そして内容は暗殺が多かった。国として害となる者たちを無くすために。

彼女にとってはとても衝撃が大きいことがほぼ連続に起こった。

しかし周りの人々は平然と、淡々と処理を行う。

彼女は思った。この仕事が人気が無い理由が分かった。

続いて思った。この仕事は私には荷が重過ぎる。

「次の任務で辞退を出そう。」と。

そして、その最後の任務で出会ったのが俺だった。

あっさりと仲間が倒されていく。

その光景を見ると、恐怖の感情と共に感激の感情が心の中に浮かび上がった。

私とほぼ同じ身長の子が大の大人を軽く倒す。それに恐怖。

今まで苦しめられていた環境からあの子が打破してくれる。それに感激。

相反する感情に戸惑いながらもその子を見ていた。

すると突如、一番大きかった仲間の男がこちらに飛んできた。

いきなりのことに彼女は避けることも、動くことも出来ず、そのまま下敷きとなってしまった。

背中から感じる地面の冷たさと、上から感じる重さを理解できたと

ころで押しのけようとした。

しかし筋力が無いのか、そう簡単にどけることができなかった。

動かすことに四苦八苦していると、突如重圧感が無くなった。

変わりに感じたもの。それは首に突きつけられた剣の『鋭さ』であった。

その剣に辿って襲撃者を見めるが、月明かりの逆行によりちゃんと見えなかった。

姿が真つ黒。その不気味さによって、『怪物』と勘違いしてしまったのだ。

「だからあんなことを言ったのか。」

思わずため息をついてしまった。

「……ごめん。本当に怖かったから、つい。」

リユナが申し訳なさそうに俯いて言う。

実際、俺も大人気なく――（子供だが）倒してしまったことに反省はしている。

「じゃあ、あの時お前らに命令してたやつは？」

「あれが……私の、父です。」

俺の疑問に低く答える。まるで怨む^{うら}かのように。

その答えに「ああ、なるほど。」と思った。

実の娘を暗殺の現場に出す。怨まない理由はどこにあるのか。

「……とにかく、ここまでが私についてです。」

憎む思いを振り払うかのように話を強引に締める。

「あ、ああ。ありがと。じゃあ今度は俺の話とするかな。」

そう言い、席を立ち扉へと向かう。

「どこに行くのですか？」

いきなりの行動に疑問を持つのも当然だ。

「なに、飯でも食いながら話そうかと思ってな。」

「……その間に私が逃げる可能性があるかもしれませんよ？」

確かにそうだ。

「けど、自分自身のことを聞いてくれた人から逃げるのも、なんか嫌だろ。」

俺の答えに何も答えなかった。

その『無』の答えに内心頷き、部屋から出た。

母さんは起きているのだろうか、と思いながら。

「へえ、だからあんなに強かったんだ。」

頬を少し膨らますほど朝食のパンを含みながら言う。飲み込んでから言え。

「否定はしないけど練習すれば誰でも出来るよ。」

一つ一つを喉に通して言う。

俺はこれまでの生活などを説明した。

もちろん「俺は異世界から来たんだ。」なんて言えないから省略しただけだね。

俺の自己紹介のあとは母さんと交えての雑談となった。

そして一緒に部屋に戻ると、俺は言った。

「さて、ここに居続けると何かと問題が起こるかもしれないから帰るか？」

そう促した。もちろん彼女は

「帰りたい。」と言った。

「けどこのまま帰ると君にとっても大きな問題が起こる。分かるか？」

俺は答えを求めた。リュナは訳が分からない様子で首を傾げる。

「考えてみたら分かる。」

リュナの仲間は気絶させられた。そして君は俺に連れて行かれた。

その状況で仲間が気付くと、君の姿が見えない。

ここで二つの考えが浮かぶだろう。

一つ目は、君が俺に殺されてどこかに隠された。

二つ目は、君が逃げた。

俺の姿を見た者にとっては一つ目は限りなく無い。

つまり君は逃げた可能性が高いと思い、ちまなこ血眼に探しているはずだ。

もちろん上司である君の父親にそのことは伝わるだろう。

その中でヒョイツと姿を現すとどうなるか。

『裏切り者』の烙印を付けられて何かの処罰を受けるだろう。

それでも出たいか？」

思っていたことを彼女に言い、確認を取る。

リユナは聞いているうちに顔を青ざめ、答えは首を激しく横に振る。

リユナの性格からしたら当然の答え。そのことは見越していた。

だから俺は提案する。

「なら、これから無事に帰るために話し合いをしようか。」

この国の『裏』を知るために。

「……以上で報告を終えます。」

その言葉を言い切った瞬間、床に叩きつけたれた音が部屋に響く。

「たった一人の子供相手に何故気絶させられるんだ。カスガ。」

声の主は怒気を孕んだ声を吐き捨てる。

部屋によりいつその緊張が張り詰めた。

「……おい。」

冷徹な声。その毛で『彼』は言い渡した。

「『あれ』が終わらないうちに『裏切り者』を殺して来い。」

その言葉を最後に音は一つも響かなかった。

不運な境遇に見舞われている彼女

それを知り、解決しようとする彼

一人の『裏切り者』を殺す命令を下した男

ひとつの歯車が軋みをあげた

一人の自己紹介（後書き）

おつかれさまでした。

なにやら嫌な空気になってきました。

まあ、話はこれからになります。

早く書きたいです。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

変化してゆく生活・・・前編（前書き）

いらっしゃいませ。

今回はすごく遅れてしまいました。申し訳ございません。
今回も分けます。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

変化してゆく生活……前編

「コラ、何ビクビクしているんだ？早く行くぞ。」

「えっ！ちよ、ちよっと待ってよぉ！？」

さて、あれから少し時間がたったあと、俺達は市場にいた。

狙われているやつを外に出すのはダメなんじゃあないか？と思うつゝとだろつ。

ご心配は無用。誰にもばれないようにしている。

何、単純なことをしたまでだ。

『帽子を被せる。』 たったこれだけ。

リユナにある質問をして、その答えを聞いてこれを行った。

『仲間にお前の顔をみたやつはいるか？』

『うつん、いないよ。ずっとフードを目深に被っていたから。』

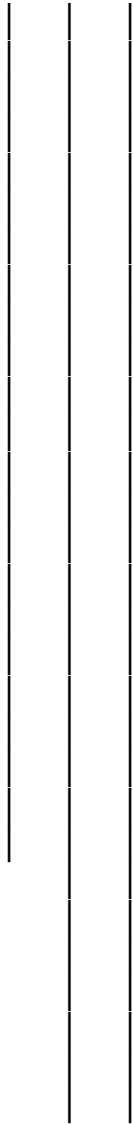
とりあえず顔での発覚は無いと考えた。

しかし、ずっとフードを被ったままということは、獣人特有の『耳』のシルエットが見られているというわけだ。

なので俺は、リユナとしては少し大きめの麦わら帽子をあげた。

それをもたらったリユナは、俺からの説明を聞いて納得したようで、笑顔で被った。

……その笑顔がすごく眩しかったのは頭の中だけに留めておこう。



ともかく、一応の『変装』を行ったりユナを連れて闘技場へ向かつ

ていた。

その場所へ向かうには朝っぱらから賑やかな市場を通ることにした。
つまり俺はこの道をあまり通ってないんだ。

何故今回はここを通るのか。これもちゃんとした理由がある。

普段俺が通っている道は人気が少ない。これだとリユナが襲われる可能性は非常に高い。

かといって人がギュウギュウ詰めなほどに人がいる道も通るわけにはいかない。

その人並みに紛れ込んで攫さらわれる可能性もあるからな。

なので、人気が多くて程良く人が交通できる道。それが市場だ。

ほかに、ここで働いている人々は俺の顔を知っている。だから

「おうシャン！！かわいい女の子を連れているじゃあねえか！！」

こんなオッサンの声が横から聞こえるのだ。まったくの傍迷惑はためいわくである。

「うるさいジジイ。おばちゃんに言いつけるぞ。」

「何か理不尽なことをいわれているぞ俺。ともかくお幸せにな！」

「……真面目に消えてくれ。」小言で呟いた。

ともかく、そんな理由でここを通っている訳だ。

「……エヘヘ」

横からそんな声が小さく聞こえたので、そちらの方へ向く。

そこには頬を赤くそめて恥ずかしそうに微笑むリュナの姿があった。

……流石の俺でもそうになっている理由は分かっている。あいつのそばにいた俺だからな。

またその光景がとても目に毒だ。いい意味でだ。

「……じゃあ俺達は用事があるから、帰りに寄るぞ。」

「おう、またな！」

相変わらずこのジジイはうるさい。いい言い方だと『元気だ』。無駄にな。

「ほらリュナ。さっさと行くぞ。」

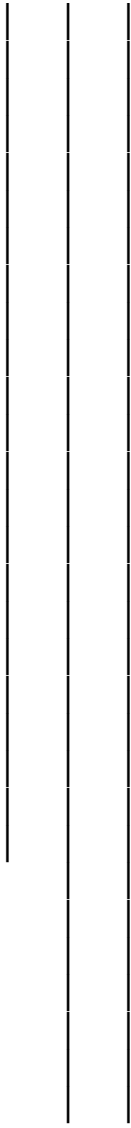
そう言い額に手刀を軽く当てる。何時^{いつ}まで陶醉^{とうすい}しているんだこいつは。

とにかくこちらを向いたことを確認して先へ急いだ。

「あいたつ！え、ちょっと待ってよぉ。」

そんな声が後ろから聞こえてくる。

本日2回目の言葉を聞きながら俺は小さくため息をついた。



何事もなく（そうでもないか）リュナと共に闘技場へと着いた。

どうやら初見のようで、「ほえ〜」と何とも間抜けな顔を晒^{さら}してい

た。

すると、闘技場の控え室から一人の兵士が出てきた。

「あ、シャン君。こんにちは。どうしたの？その子。」

どうやら若い兵士のようだ。俺を『君』付けで呼ぶのはその人達くらいだからな。

「こんにちは。見学したいと言ってきたので連れてきました。」

この言葉は嘘ではない。実際にそう言われたのだ。

俺が練習するところなんて見ても面白くないというのに。分からぬ。

「じゃあ俺は着替えてきますね。いつものように集合しててください。」

そう指示し、入れ替わるように控え室へ入ろうとした。

「おっと忘れるところだった。リュナ、客席のところで座っていて。」

そう言い、今度こそ部屋へ入った。

場内へ入るとちゃんと揃っていた。子供相手に整列って異様な風景だ。

「みなさん、こんにちは。早速ですが模擬戦を行います。

ではその模擬戦の規則を言います。

試合形式は一对一の決闘式、武器は刃がついていなければ何でもアリです。

頭・腹部・手の中から2回あてることができればその者が勝利するとします。

そのため防具を着用で行ってください。

時間は無制限。トーナメント式で勝ち進むようになります。

今からくじ引きを行うので、同じ数字の相手と戦ってもらいます。

もちろん俺も参加するので覚悟してください。

では、俺の前で1列にならんでください。」

そう言つて数字が書かれている木片が多く入っている箱を用意した。

中身を少し混ぜ終わるとちゃんと一列に並んでいた。

「並びましたね。では先頭から一人ずつ一個の木片を取ってってください。」

その指示に従つて、長蛇の列が短くなっていった。

最後の一人が引き終わり、軽く箱を振ると音がする。

中を探ると『23』と書かれている小さい木片があった。

「みなさん引きましたね。では1から順に言いますのでその数字の時に手をあげて下さい。」

手を揚げた人はその相手と組んで座つて下さい。」

1、2、3と言い続けるうちに立っている人がポツポツと減っていく。

「じゃあ次、23番。」そう言つと一つの手があがった。

その手の持ち主は、控え室の前であつた若い兵士だった。

「じゃああなたは俺の隣まで来て下さい。次は24番。」

そう言い、25番まで言い続けた。

変化してゆく生活・・・前編（後書き）

おつかれさまでした。

一週間以上も待たせてしまい、本当に申し訳ございません。

活動報告にも書いておきましたが、多忙な日々が続いていました。上記の理由のため、なかなか案が考える時間がありませんでした。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけはやく修正します。

ありがとうございました。

3 / 19 数字がおかしかったので修正しました。

変化してゆく生活・・・後編（前書き）

いらっやいませ。

今までの期間は何だったのかというほど早くできてしまいました。
内容に自信はありませんが。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

変化してゆく生活……後編

場内は木剣同士がぶつかり合う乾いた音が響いていた。

その原因である光景を、俺と俺の相手は観客席で観戦していた。

「シャン君、僕たちは強くなっているのかな？」

隣で何やら弱弱しい様子で確認するように言ってきた。

「突然何を言い出しているのですか？もちろん強くなっていますよ。自覚が無いのですか？」

当然の答えを返す。ただし、強く言うのではなく語りかけるようにする。

その言葉に肩が一度震え、また同じ口調で言い始めた。

「も、もちろん自分でも思っているよ。あの頃の僕と今の僕が戦うとしたら、今の僕が勝つことはわかっているんだよ。」

ただ、君には勝てない。一介の子供に勝てないというのは、大人としての『誇り』が砕かれることの一つなんだ。もちろん僕も大人の中の一人だ。子供は僕たちが守る、このことは僕たち大人の『義務』の中の一つだ。」

自分に言い聞かせているかのように、しかし顔は俺に向き言い続ける。

「けど結果はどうだろうか。君には一撃でやられ、『誇り』は崩れていった。かといって残りの『誇り』を壊してでも君には勝てない。他の人たちもそのようにしている様に見える。けど結局は一人も勝てない。」

顔が次第に青白くなっていき、口調は確認から懇願へ変わっていった。目の前の光景で絶望するかのような表情で。

「ねえ、君はどうしてそんなに強いのか？僕一人で考えても、他の人たちに相談しても答えが見つからない。いや、答えどころかそこに導かれる道筋ですらも見つけることすらできなかった。」

僕だけじゃない、この場にいる大人は、君が居る場所には立つことはおろかしがみ付くことすらできない。そのことを僕たちはもちろん知っている。」

突然俺の両肩を手で掴まれた。しかしその手はひどく冷たかった。

「そんな僕たちを、君は何故そんなにしてくれるのか？僕たちが弱いから？僕たちの『誇り』を徹底的に壊すため？ねえ、どうなの？」

言いたかったことを言い終えていても、彼の目は俺を離さなかった。

しかし俺はその言葉に何の感心も懷かなかった。

目の前にいる兵士は何を嘆いているのだろうか。何に絶望しているのか。

彼に答えを伝える。語りかける様ではなく、当然というような様子で。

「あなた方をこのようにしている理由ですが、そんな悲愴な考えでしていると思っていたのですか？一介の子供がそんな事を思いつくことができますか？

簡単なことです。ただ純粹に、『強くなつてほしい』だけです。ただそれだけです。」

「嘘だ！！だったら何で君はそんなに強いんだ！！現役の兵士をいとも簡単に倒すことは、子供にとってはあり得ないことだ！！！」

俺の答えに不満が爆発したのか、怒鳴りちらかす。怒鳴り^{どな}ちらかす。周りの者たちも

様子を窺^{うかが}つかのように視線を向ける。

その怒鳴りを意図もせず、俺は冷静に言う。

「では逆に質問します。あなたは何故この国の軍に入ったのですか？」

その言葉に彼は怒りを隠さず、答えを響かせる。

「そんなことは分かっているだろ！！僕はこの国を守りたくて軍に入ったんだ！僕が生まれた国はとても大切だからだ！そんなことがどうしたって言うんだ！！！」

すでに怒り心頭^{しんとう}に発^{はつ}しており、俺の肩を強く握り始める。

それに対して、俺は『その発言』に怒りを覚えた。

「あなたがこの国に入った理由を『そんなこと』で済ませますか。あなたが持っている『誇り』の中の一つであるものが。」

俺の言葉に彼は手の力をゆつくりと、自分の発言で自分の『誇り』を傷つけたことを感じて緩め始めた。

そして、俺は彼に冷静にさせるように諭^{さと}していった。

「自らが生まれた国を守りたくて軍に入った。この国に生まれた子供達を守るために入った。それらの考えは他の方々とほぼ同じでしょう。」

しかし、軍にはいつて早速守ることは出来ますか？いや出来なくはないですが、出来る可能性は低いでしょう。ではそれらの事を出来るためには何が必要でしょうか？」

そこまで言い切り、彼から答えを求める。突然の振りに最初は戸惑っていたが、やがて答えを言う。

「……『力』……か、な。」

「その通り、『力』です。しかし、一言^{ひとこと}で『力』といっても多くの解釈があります。武の『力』、知の『力』など多々《たた》あります。」

かといって『力』に答えはあるのか。あえて言うなら、否です。理由は、すべての『力』はすべて正解に当てはまることができるからです。

ならばすべて正解である、すべての『力』をつけるというか。これも否です。人には得手^{えて}不得手^{ふえて}があります。不得手を鍛えるよりは、得手を伸ばすほうが得るものが大きいです。」

俺はそこで息をつき、言葉を展開する。

「では、あなた方の得手とは何か。もちろん軍なので『武』です。ですがあなた方の『武』は小さく脆いです。だから僕はあなた方を鍛えています。たったこれだけです。」

これが、僕があなた方へこのようなことをしている理由です。ご理解 いただ 頂けましたか？」

最後に微笑みながら、俺は思っていたことを答えた。

兵士たちの職業の本質は『武』。しかし、さっき言った通りに彼らの『武』は穴だらけであった。

俺はそのことを見抜き、またそのことに危懼きくした。このままではいけない、戦争が起きたらこの国は崩壊するだろう、と。

自分の身もこの国から生まれた。だから俺はこの軍を鍛えることにしたのだ。この軍を強くするため。この国を守るため。

目の前の彼は俺の答えに呆けていた。周りの人たちもそんな表情だった。

すると、野次の中の一人が確認するように言ってきた。

「…… たったそれだけですか？本当に……」

「ええ、たったそれだけです。まああえていうなら、あなた方を使つてこの国を守ろうとしている、俺の『私欲』のためですがね。ははは」

俺は苦笑交じりにそう答えた。

その発言で周りの人たちはよりいっそう茫然としたようだった。

「あはは、はは、はは」

場内で聞こえるのは俺の乾いた笑い声のみ。だった。

……パチパチパチパチパチ

俺の笑い声よりも乾いた音が野次の中から聞こえてきた。

その音が発生している方へ向くと、一人の者が手を叩いていた。

「……リユナ。」

俺はその者の名を呟いた。

彼女は微笑みを絶やさず、俺に拍手を向けていた。

すると別方向からも同じ音が聞こえてきた。

同じように向くと、俺の相手である若い兵士であった。

3つ、4つと乾いた音が段々と増え始め、最後は大音響となった。

その大音に俺は茫然^{はうつぱ}としてしまった。先程の彼らと同じような表情で。

「さっきは失礼なことを聞いてしまつて、ごめんなさい。」

若い兵士が俺へ謝罪していた。

「いやいや謝るのはこっちですよ。何の説明もせずに鍛錬させていましたから。」

俺もそう言いながら彼へ頭を下げた。

俺が恥ずかしい発言をしたあと、何も滞りなく模擬戦は続いた。

ただ変化したことは、彼らの士気が上がったことくらいだ。その方が鍛錬し甲斐^{がい}がある。

……何だよ俺の恥ずかしい発言で士気が上がるって。もうこのことは黒歴史決定だな。

「けど僕たちは君の意図を気づくことができなかったから、僕たちに非があるよ。」

彼の発言に少なくなった野次は頷^{うなず}きをする。

そう言われてしまうと、返す言葉が見つからなくなってしまった。

「僕たちは君の言葉で気づけた。だからこれからはもっと厳しくしてくれないか。」

彼は、彼らは笑っていた。これから自分の身が苦しくなることを知っていても猶^{なお}、笑っていた。

そうなってくると、返す言葉は一つしかない。

「……分かりました。じゃあこれから鍛錬の水準を上げていきますね。覚悟してください。」

そう、笑顔で答えた。

「はい、お願いします。あ、自己紹介していなかったね。」

僕の名前はカム。カム・トラニスだ。よろしくね。」

そういえば俺は彼のことを知らなかった。ここで鍛錬する人が多すぎるため、未だに全員の名を覚えていないのだ。

「じゃあ俺も再度自己紹介しますね。」

シャン・サムウィルと言います。宜しくお願いします。」

そう言つてカムに手を伸ばした。

彼はその手に少し驚き、俺がしたい行為を納得して手を伸ばした。

互いの手を握る。握手をすると、俺達二人は何故か笑ってしまった。声を上げて笑ってしまったため、また周りの人たちに注目されてしまったけど。

「……………まいました。」

そう言い木剣を捨て降参の意を表すカム。

対して俺は彼の首に木剣を突き付けていた。

「勝者、シャン・サムウィル!!」

審判の声が上がると、観客席からも歓声が聞こえてくる。

「ほらな、やっぱりシャンが勝った。となると俺の勝ちだな。」

「くそ〜!!カムがもつと強かったらな〜!!」

「カムも俺達もシャンには勝てないけどな。さて、勝った金で一杯とするか。」

……てめえら、試合の賭博してんじゃねえよ。あとでO H A N A S H I しなきゃならないようだな。

「いや〜相変わらずシャン君は強いね。手も足もでないよ。」

カムは捨てた木剣を拾いながら、苦笑いに言った。

「そんなことはないですよ。証拠に俺の攻撃をいくつかかわしたじやあないですか。」

「いやいや、あれはマグレだよ。偶然の産物。」

そういうカムだったが、実際にはなかなか強かった。

さっき言った通り俺の攻撃をいくつかかわし、さらに彼の攻撃の一つ一つは他の人たちと比べると重かった。

トータルで考えると、この軍の中では強い部類に入ると思うほどだ。

「そういえば、もう一つの質問に答えてないね。」

「もう一つの質問？何でしたっけ？」

はて、あの時に他の質問ってあったっけ？

「覚えてないの？君が何でそんなに強いのかってこと。」

「ああ、そういえばありましたね。それは」

答えようとした時、闘技場の扉が開く音が響いた。

そこへ目を向けると、二人の人影が見えた。

その人影が言葉を発した。

「ほう、何やら楽しそうなことをしておるのう。」

「そのようだな。では我らも混ぜてもらうことにしようか。」

片や声・口調ともに老いた男性、片や一つ一つの言葉に重みを感じさせるような男性の声。

その声を聞き、カムに笑顔を向けて言った。

「子供の頃から鍛えているからです。」

今も子供だけだね。

[illegible]

彼は「仲間」を得、「信賴」を築いた

その代わり、
『仲間』に『武』を与えていた

すると、二人の猛者が彼の前に現れた

彼はその二人を見て、『笑み』を浮かべた

その『笑み』の意味とは、一体……

変化してゆく生活・・・後編（後書き）

おつかれさまでした。

なんだかクサイ話になってしまったように思ってきました。

一日でこの内容って、自分の頭はどうかなくなってしまったのかな。

ともかく、前回の更新遅れを挽回するように4時間で考えました。考えながら書きました。

前回、前々回は申し訳ありませんでした。

本文は出来ていたのですが、何分パソコンに触れる機会がありませんでした。

かといって触れたときに、時間がなかったのです。

なので前書きと後書きが殴り書きのように短かったです。

これからはそのような事態にならないように頑張ります。

さて、またもや新キャラ登場で御座います。

カム・トラニスです。男です。若いです。

この子は何かと強いですね。シャンほどではないけど。

というか、シャン最強じゃあないか。ー（キーワード追加）

まあ、最強じゃなかったら進まないところもありますけどね。

次に現れる二人の影。

ぶっちゃけ新キャラですね。片方は半ですが。

そのことも踏まえて、ご期待下さい。

ここでちょっとだけアンケートをとります。

登場人物の外見や性格、国や大陸の情勢などを書こうかと思っています。けどその内容が半端なく多くなりそうです。

また、ネタばれの事も書いていこうかと。話が進む毎に追加します
が。

返答は感想へお申し付けください。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

文字を打っているの間違いが多いことがある。

この後書きだけでも十八回は間違えたと思う。この文で6回。

ありがとうございました。

二人の偉人（前書き）

いらっしやいませ。

間が空いてしまいました
とりあえず頑張りましたが。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

二人の偉人

突然扉を開けて現れる、二つの人影。

場内にいる者全員が思わずその影に注視する。

「ほう、何やら楽しそうなことをしておるのう。」

片や声・口調共に老いた雰囲気^{かも}を醸し出す男の声。

「そのようだな。では我らも混ぜてもらうことにしようか。」

片や一つ一つの言葉に重みを感じさせるような男の声。

相反するかのような声だが、一つだけ共通点がある。

それは、『興味』だ。共に『何か楽しめるもの』を見つけたような、無邪気なものが含まれている。

もちろんそのことに気づく者は、この場には数人であった。

彼ら以外の者たちは同時に思う。

（あいつらは一体誰だ。）、と。そして疑いの眼差しを向ける。

その眼差しをものともせず、二つの人影は堂々と中へ入っていく。

そして二人が中心へ近づぐことに、周りの者たちはその二人の正体に気づく。

そしてまたも同時に思う。

（何故『あの二人』がこの場へ来るのだ？）、と。

さて、周りの兵士たちが気づき始めたのでそろそろ『あの二人』について紹介しよう。

まずは老いた口調と声を発した者から。

その言葉通りに顔には両手では数え切れないほどの皺しわが彫しられていた。

そして頭は髪が少なく――いや、皆無と言い表した方が相応しいだろう。

その代わり、頭部とは反対の口元には長く白い髭ひげが垂たれていた。

水色の服を羽織はおりっており、ゆったりとした服装であつた。

そして重力に負けているかのように腰を曲げ、左手には身の丈ほどの杖を突いていた。

そつ、外見も『老人』なのだ。

その『老人』に反して背筋を伸ばしている者が隣にいた。

先程の言葉の重さを放った者とは思えない程の、柔和な笑顔であつた。

いくつか皺があるはものの、その表情のせいなのか年齢のせいなのかは分からない。

清楚な金色の髪を持ち、肩に掛かるかどうかの長さであった。

髭もちゃんと剃っているのか見当たらず、頭部だけで『清潔』といえるほど。

青を基調とした王族の服装を纏っており、腰には剣を携えていた。

まさに『王族』この一言に尽きる。

そんな二人が客席場の一番前まで着いたところには、周りの兵士達は動揺した。

その理由を、一人の兵士が呟いた言葉にあつた。

「……ナヴァジス・クランデイス『現』国王と、シャヌルダ・クランデイス『元』国王が何故ここへ……」

そう、『現』国王と『元』国王の来場だった。

兵士が驚愕と疑問の表情を浮かべている中、一人の兵士が二人の王のもとへ向かい、跪いた。

「御機嫌ようです、ナヴァジス・克蘭デイス国王とシャヌルダ・克蘭デイス元国王。」

突然失礼を承知で尋ねますが、お二方は何故このような場へいらつしゃったのでしょうか？」

その兵士は、この場の兵士の中での長。いわゆる兵長である。

もちろん彼も心の中では驚愕と疑問が入り混じっていた。

そう考えることも無理はない。何故なら、この二人は『軍隊』に介入していないからである。

現国王は防衛、元国王は財政に携わっている。しかしその二つは『軍隊』と間接的につながっている。

しかし、その疑問もこの国のシステムによって解決してしまう。

前にも言うていたように、一つの部隊に一人の大臣が携わる。

つまり、その部隊の責任は各大臣の責任となる。それをなくすために自分の部隊に集中しなければならない。

この二人も例外ではない。特に防衛と財政はこの国の運命を左右するものである。なおさら取り組まなければならないはずである。

しかし現に二人はここにいる。その疑問に到達出来た者はこの場に
いるほぼ全員であつた。

そしてその答えは、

「なあに、ただの『暇つぶし』じゃよ。何かと余裕が出来たのでな。

「

「うむ、父上の言うとおりである。何とか余裕ができたので時間を
持て余していたのだ。」

何とも呆氣^{あつけ}からんとしたものであった。

予想外のものだったので思わず呆けてしまった。

その中、件の二人は周りの様子なぞ物ともせず、若い国王は一言い
った。

「今このようなことをするよう命令した者は誰だ。」

その発言後の1分に満たない間に、一人の少年が二人の王のもとへ歩み寄ってくる。

ある程度顔立ちは整っており、街中を歩けば十人中八人が七人が振り向くほど。

年相応の釣り目とそれを強調するような凛々しい眉。鼻立ちもよく、肌も生気を感じさせるような色を示している。

髪は短くもなく、かといって長くもないほど。しかし後ろから付いてくるかのように背中から右、左へと見え隠れしているものも彼の髪なのだろう。

背丈は他の同年代の子供より少し高いか同じようなもの。

総合的にまとめると、『イケメンな少年』となるだろう。

しかし普通の子供と違うところがある。

それは『色』

髪は黒。瞳も黒。肌の色は元の世界で言う『日本人の肌』なのだ。

では何故異質なのか。それは周りの『常識』からであった。

髪は普通、茶は金の他に青や赤、はたまた白という者もいる。しかし黒という者は一部の地域以外では滅多にいないのだ。

瞳の色もそれに同じである。肌の色も、元の世界でいう『白人』や『黒人』がなのである。

まあ種族によって違いがあるが、基本的にはそのようになっていく。

さて少し話が変わるが、彼の両親はどうなのか。

これらは同じ茶髪、同じ茶の瞳、同じ色白なのである。特異点はありませんのである。

では何故彼のような子供が生まれるのか。

答えは単純、『遺伝子』である。詳しくは割愛させていただく。

彼にとってはこの容姿が『普通』なのだが、周りからは『異様』と感じられている。

もちろんそれによって苛めが発生したが、彼自前で解決した。このことも割愛させてもらおう。

二人の王の前まで来た少年は、

「自分がこの訓練を実施させている者ですが、何かご不満でも？」

突然ケン力を振ってきた。

もちろん二人の王と少年以外の兵士たちは、少年に対しての驚愕と王に対しての恐怖にあたふたとしてしまう。

王の前でそんなことを言ったのか。

王の反応がどのようなものなのか。

つながっていることは、両者に畏怖しているのである。

しかし当の王達は、

「何、不満などないわ。逆に称賛してやろうかと思うただけじゃい。」

ケラケラと笑いを響かせていた。

「真^{まこと}に父上と同感ですな。して、貴様の名を知りたいのだがよろしいかな？」

先程の言葉に頷きつつ、少年に質問していた。

「褒めて頂いてありがとうございます。しかしまだまだこの訓練は未完成なのであしからず。」

自分の名はシャン・サムウィルと申します。一介の住民です。」

まるで目の前の二人に興味がないようにシレッと言い捨て、今戦っている二人の兵士に目を向ける。

またもや兵士たちは少年に驚愕を示す。今度は王も含めて。

戦闘中の兵士二人もたまったものではない。これでは戦うことに尚更集中することができなくなってしまうと落胆した。

「ほう、これで未だに出来ておらんとは、いやはや最近の子供はすごくなつたものよのお。」

「真にそうすな。それとも目の前の少年が天才なのか。後者のほうが嬉しいのですが。」

しかし二人の王は少年の答えに甲斐もせず、ただ自分が思ったことを口にしたのみであった。

すると、『元』王が少年に尋ねた。

「ではこの軍の訓練に携わっているシャン君とやらに聞こうかの。」

この中で最も強い者は誰じゃ？」

確かに兵士の訓練を指示している彼に聞けば、最も訓練に励み己の力を高めている者を知ることが出来る。

その問いに一拍置き、少年は答える。

「ちょうどこの場内にいますよ。当ててみてください。」

ここにきてのこの発言。流石の兵長も声を荒げる。

「おいシャン！！王の目の前だぞ。発言を慎め！！」

申し訳ございません。何分この者はここについてから日が浅いものですので、お許しください。」

王に許しをもらうように頭を再度垂れる。

「よいよい、わしらはもう慣れておるからの。気にすることではない。」

ホッホッホと軽く笑う『元』王。

「父上の言うとおりだ。国中を回るためにはこのようなことは耐えなければならぬからな。」

そう言いながら周りの兵士たちを眺めていた。

どうやら露にも思わなかったようだ。

「は、ありがたき言葉。」

そう言う兵長も内心は冷や汗を垂れ流し続けている。いや、内心だけでなく背中にも流していた。

二人の王はそこで一旦言葉を切り、周りの兵士たちのなかでの猛者を探していた。

数分経つと、

「ふむ、あの若い者はどうかの。なかなかだと思うが。」

『元』王が一人の青年に目をつける。そう、カム・トラニスであった。

「……なるほど、確かに周りと比べると少し頭を出している程度であるが、少しはできるようだな。」

その息子も同じ青年を冷静に分析する。

指名されたカムは肩を一瞬震わせた。

どうやら同じ意見らしい。そして、代表して『元』王は再度少年に問う。

「シャン君や。あの青年がそうなのかな？」

その問いに、シャンは『笑った』

「確かにこの『軍』の中では猛者の部類に入るでしょう。

さりとて、『この中』で最も強いとは言い切れません。」

そう答えた。二人の王へ妖しく笑いながら。

「む、そうなのか。いやはやおいおい。では誰かの？」

実はというと、二人とも『ある答え』を思った。しかしそれはあり得るとは考えきれないものであった。なのでその可能性を残しつつそう言った。

（どうやら『元』王は待つことが少し苦手のようだ。ならば仕方ない。）

シャンはそう思い、**答えを發す。**

「では仰せのままに答えましょう。」

『この中』で最も強い者は、自分だろうと思います。」

はたして、その『答え』は見事に的中した。いや、してしまったのだ。

大の大人が幼い子供より劣っていることは誰もが思わない。

しかし目の前の少年は見事にそれを体現したのだ。

その答えに間が置かれた。

└─┐
└─┐
⋮
└─┐
└─┐

その一文字の言葉を切つ掛けに、

「ふおっ ふおっ ふおっ ふおっ ふおっ ふおっ ふおっ ふおっ ！ ！ ！」

「はっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ ! ! !」

王の笑い声が前よりも響いたのだった。

「ふおっふおっふお、まさか目の前のシャン君がこの中の最強だとは思わなんだわ。」

そう言い切っているも、シャヌルダは未だに笑いが治まっていなかった。

「しかし、大人に勝る^{まさ}子がいるとは類を見ないな。くっくくくつ。」

親子そろって笑いのツボが同じなのか、周りのことなど気にせず笑

っていた。

「まあ確かにそのようなことは聞かないでしょう。しかし実際に本人が目の前にいますからね。」

そう言いつつ、シャンも笑みを含めながら言う。

「さて、先程までの自分の発言は申し訳ないと思っています。許してもらえますか？」

「何、さつきも兵長に言っただろう。あんな安い挑発なんぞ、屁でも無いわ。」

ふおっふおっふおっとな笑いを繋げてシャンの目を見る。

「たしかにシャン君からは強い雰囲気を感じるのぉ。のぉ、ナヴァジス。」

「はい。一度手合わせをしたいところです。しかし時間が時間なのでそれは叶いそうもないですが。」

振られて答えたナヴァジスは、窓から見える赤く染まった空の色を見ながら答えた。

「む、もうそんな時間かね。それは残念じゃのぉ。」

息子の言葉に心身ともに落胆した様子になった。

「ではシャン君、兵士の皆さん。私たちはここで失礼するが、頑張って訓練に励んでください。」

ナヴァジスはそう言って、父のシャヌルダの背を押しながらその場を後にし始めた。

「はい。ありがとうございました。」

シャンは何に礼をしたのか分からずとも、腰を曲げて頭を垂れた。

その後に周りの兵士たちに説教をされたのだが、これは別の話になるだろう。

その数分後には訓練は終了し、各自帰った。

シャンとリュナは心身ともに疲れを持って。

「……様、ご報告があります。」

一人の部下が上司にそう言った。

「何だ、言ってみろ。」

その上司は少し苛立ちを含んだ声で促した。

「裏切り者であるリユナ・ティフィラルを発見しました。」

そう報告した。それに対して

「で、殺したのか？」

冷徹に答えだけを求めた。

「いえ、その発見した状況が状況なのでできませんでした。」

この言葉が言い切った瞬間に、風を切る音が聞こえた。

それは、剣先が部下の首元に突き付けられたさいに出した音。

「……役立たずが。本気で殺すぞ」

そう言い剣を部下から離れた。そして右手で指を鳴らした。

鳴り終わった頃には他の部下の姿が集まっていた。

「このクズのおかげで少し『予定』が狂った。

だから、早めに『計画』を進める。」

そう言って、『彼』は笑った。

「お前らに命令だ。」

『計画』を開始すると同時に『裏切り者』をついでに殺してい

」

言い下した。

[illegible]

一人の少年

一人の獣人

一人の若者

二人の国王

とある人物

これで『役者』は揃った

さあ 賭けをしよう

どの『歯車』が回り続けるかを

二人の偉人（後書き）

おつかれさまでした。

お待たせしました。ずっと考えていましたので頭痛がしています。大事にはいたらないと思いますが。

さて、やっとここまで来ました。これでこの章の登場人物は全員出てきました。

ここからどのように話が進んでいくのか。楽しみです。

あ、過度な期待はしないほうがいいです。

話は変わりますが、自分の作品を読んでいると、自分はあまり擬音語を使わないことが分かりました。

何故でしょうか。我ながらに知りたいです。

キャラ説明のことについて

各章の最後に付けることにしました。

いまだに終わりを迎えてませんが、頑張ります。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

やつの祝福は過去を決る、痛いほどに（前書き）

いらっしやいませ。

なんだか主人公が転生したような雰囲気ではなかったので無理矢理
いれました。

まあ、予定通りなんですけどね。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

やつの祝福は過去を決る、痛いほどに

夕食も食べ終わり風呂も入って、後は就寝のみとなった。

ちなみに部屋割りには、母さんとリユナが同室で俺だけ一人部屋となっている。

母さん曰く、^{いわ}「男女同じ部屋だと『間違い』が起こるかもしれないでしょう!」と。

いや、さすがに子供を性的に見ることは無いから。無い。うん。

とにかく俺一人となっている今、やることはすでに終わったので寝台に寝転がる。

そつえば、俺ってば今日は睡眠をとっていないな、と。

なら今夜は早めに寝るか、と思い俺は視界を暗くするため^{まぶた}瞼を閉じた。

もちろん見える景色は真っ暗。

なはずでしょ。

「やあ、こんばんわ。」

目の前にあの『神様』がいた。

あれ、デジャヴ？

「確かに前回と同じようなことを言った覚えがあるね。」

そう言い、やつはおかしいように微笑む。

さて、周りの景色は本来は黒一色なはずが緑が萌える森林へとなっていた。

あ。といって可愛いとかの『萌える』じゃあないぞ。草木が芽ぐむことの『萌える』だぞ。

「それはともかく、今回は何の用だ？」

こちらら全然寝てないんだぞ。さっさと寝させてくれ。」

「まあそうあせるな。」

それと、君が早く寝てくれないからこういう処置をとったんだぞ。君のせいだ。」

ぐ、確かにこいつは俺が寝ている時にしか出てこない。

「だけどなあ」

「ともかく、今回もあまり時間が無いんだ。手早くするためにさっさとやるよ。」

俺の言葉を中断するかのようにやつは言葉を続ける。ちったあ言い訳をさせてくれ。

「さて、君は前に私が言ったことを覚えているかな？」

「さあ、いつのことを言っているかははっきりしてくれたら思い出せるかもな。」

そうか、とやつは休止符を打ち

「……『そうだ。君が生き残ったら『プレゼント』をあげよう。

神様から直にもらえる『プレゼント』。楽しみだろう。

中身は『秘密』だな。

じゃあ、がんばって生きてこい。』

昨夜の『あの時』に言ったことだが、思い出せたかい？」

そのようなことを言っていたような気がした。

「ああ、うる覚えだがそうだったな。」

そう答えるとやつはまた微笑み。

「そうかそうか覚えていてくれたか。それはよかった。

では、約束どおりに『プレゼント』をあげよう。別の言い方で『神の祝福を与える』とも。」

そう言い切ると、森の奥へと進んでいった。

「おいこらどこ行ってんだ？」

「付いて来てくれたら嬉しいな。特に君にとって。」

何か訳の分からないことを言い返しても、スイスイと奥へと歩いていった。

「ああもう早く寝たいんだがなあ。」

睡魔に襲われたいがために俺はやつの後ろを追った。

さてと、今俺の目の前に広がる景色を報告していこうと思う。

まず、周りはいたつて普通――（？）に広がる木々。

前から思っていたのだが、この空間はずっと晴れている。何故だろうか。まあ雨で濡れるよりはましだが。

次に俺が座っている椅子――と言うよりソファなのだが、

なんと緑と黄色を基調としたソファであった。やつに何が起こったのだ。

あと机――所謂いわゆるテーブルもそんな色合いをしていた。

「お前は風のときもそうだったが、俺が注文したことを次回で再現するのは何故だ？」

「君の要望にこたえたからだが、何か不満でもあるのかい？」

「いや、何も不満を持つじゃないよ。神の望むままに自由にしていてくれ。」

ぶっきらぼうに答えながら、俺はその進化したテーブルの上にある物を見た。

見て、そして、絶句した。

「……おい、何でこんなものがそこにある。」

「ん？ああそれはね、元の世界の君の部屋で見つけたんだよ。何かと面白いことを書かれていたからね。」

テーブルの上にあるのは、一冊のただのノート。

しかし、俺にとってはもう二度とページを開きたくない代物しろものである。

「私も一度中身を拝見させてもらったけど、なかなかだったよ。」

そう言いながら、思い出したかのように笑う。

逆に俺は中身に書かれていることを思い出して、その場にしゃがみこんでしまった。悶絶で。

そう、そのノートに書かれていることは、

元の世界で中学2年生のときに書いたノート。

いわゆる所謂『厨二病ノート』である。

さて、皆さんが過去に一度くらいは経験したことがある『厨二病』。

もちろん俺も当然のように感染してしまった。

そのころには、同じような仲間がいたのでそいつらと一緒にいろんなことをやったことを覚えている。

もちろん、あのハーレム野郎も中には入っていた。

そのときに俺たちは各一人ひとりに『能力』を持つ、という設定を編み出した。

ある者は『炎を生み出す能力』、またある者は『水を操る能力』という設定を作った。

さて、じゃあ俺はどんな能力だったのか。

それは、『金属を生み出す能力』だった。

そのときの俺は、銀色や黒色などの無彩色系統の色が好きだった。

だから銀色といえば『金属』だろ、という単純な発想で決めた。

さて、みんなが考えた能力だが弱点が無いということにはしなかった。

つまり、『故意に弱点をつくる』ということを経験としてやっていった。

例えば、炎の能力者は水に弱いや、水の能力者は雷に弱い、というような感じた。

そして俺。金属の能力者は『火・水・雷に弱い』という弱点を付けた。

何故俺だけ弱点が多いのか。それは俺のハンデであるからだ。

弱点が多い代わりに体術（もどき）を使えるということにした。

まあそんな付加能力がついても、もちろんのようにボロボロに負けたが。

でだ、今後も負けないように研究したことをその『ノート』に纏め
たのだ。

もついろんなことを書いている。思い出したくないほどに。本当に。

「さて、本題に戻ろうか。さっき言ったとおりに、君に私からの『プレゼント』を与える。

……いつまで項^{うなだ}垂れているんだい？早く立ってくれないかな」

「……まあお前が何でそのノートを持っているかは後で聞くとして分かった、で？お前のその『プレゼント』とやらは何だ？」

少し納得がいけないことがあるが、後で問い詰めよう。

俺が続きを促すとやつは軽く頷き、真剣な表情に変えた。

「その問いに答えるまえに状況を把握してもらおう。

『この先に国にとって、君にとっての重要な事件が起きる。

あえて何時、とは言わないが君も準備をしておくといい。』

前に言ったことを覚えているだろうか。いや、答えなくていい。

君がこの後に目が覚めるときに、その『重要な事件』が起きる。

しかし、我々が予想している程度よりも深刻なことになりそうなんだ。」

「そんなに大変なことが起きるのか？」

たとえば、どんな？」

俺が気になったことを問うと、やつは表情を暗くして、

「……君が出会った人が死んでしまう。」

そう呟いた。

「……嘘だろ。」

俺もそれしか言えなかった。

「ともかく、君にはそれを阻止してもらうために、『祝福』を与える。」

やつはそう強く言うと、説明口調で言い始めた。

「君に与えるのは大きく3つだ。

一つ目は身体能力の向上。速さや力を現段階の数倍にさせる。早めに慣らしておくように。

二つ目は魔力の無限化。君の魔力を底なしにさせる。使い方は君次第だ。

そして最後に、『物を創造できる能力』を与える。

本当はその『ノート』の能力だけにしようと思ったのだが、君がなかなか寝ないから他の能力も含めておいた。ただ、作れるのは『金属』で出来てしまう。そのところ、注意してくれ。」

そこで軽く息をつき、やつは俺に微笑んだ。

「こんなことをしてあげているのも、君だけなんだよ。感謝してくれなきゃ困るからね。」

君はいわゆる『最強』、『チート』といわれる能力を持つ。他の

人たちが羨むような能力さ。

その能力で、君がどんな『道』を作るか、私は今からでも楽しみだ。」

そう言いながら、やつの手から白い光が溢れ出す。

「……何でそんなに俺に付きまとう？」

少しの恐怖を感じながら、やつを睨みながら最後の問いを言う。

その言葉に笑いながら、答えた。

「付きまとう、なんて悪い言い方だなあ。ただ、『君が君』だからだよ。」

それで納得してくれるかい？ご想像は自由にさせてあげるから。」

「……いいよ、そういうことにしてやる。」

俺が笑うと、やつも笑みを深くする。

白い光が満ちた手を俺に向け、

「また会えるといいな、『神様』」

「ああ、必ず会えるよ、『シャン』」

目の前の景色が白く染まったとき、俺の意識はゆっくりと落ちていった。

気が付いたときには景色が真っ黒になっていた。

そんなことを思いながら瞼をひらくと、見慣れた天井が映った。

それを確認すると、上体を起こして周りも確認する。

さつきと変わらない、薄暗く染まった俺の部屋。

「ったく、次にあんな登場したら一言いつてからにしてくれ。」

相手がいないのにも係わらず愚痴をこぼしながら、窓を開ける。

そこから見えるのは、空に大きく輝いている月とそれを強調するかのようように小さく輝く星たち。

視線を下にむけると、点々と灯火ともしびが見える住宅街。

それらを見下ろすかのように、大きい城が灯りを一つもなく構えている。

それらが音も無く、ただ風が通り過ぎる音や木の葉の音しか聞こえない。

………？

何かが引つかかった気が起きる。

何で今日に限って城の灯りが一つも無いんだ？

そこから考えると、次々と疑問が湧いてくる。

そういえば住宅街もいつもは賑やかな声が聞こえるはずなのに、何で今は物音一つしないんだ？

住宅街の灯りを数えてみると、両手で数えられるほどしかない。

しかし今の時間は約午後8時辺りだ。そんなに暗くならない時間帯のはずだ。

今日は祭りごとなんて無い普通の日のはずだ。

一つ一つ疑問が起こるたびに、不安が大きく多く湧き始めた。

俺の心情は疑心暗鬼ぎしんあんきと成り果て、自室を焦らずに歩いて出ていく。

そして玄関へと着き、出ようと「シャン？」

「え？」

名前を呼ばれて、後ろを向く。

「どうしたの、シャン？」

「ああ、リユナ。なんでもないよ。」

ただ、外の空気を吸いたくなっただけなんだ。」

リユナは何か不安を持っているような表情で尋ねてきた。

その不安を取り除くように、やさしく答えを言う。半分本当の答えを。

その答えに安心を得ることが出来たのか、少し笑顔になりながら

「そっか、暗いから気をつけてね。」

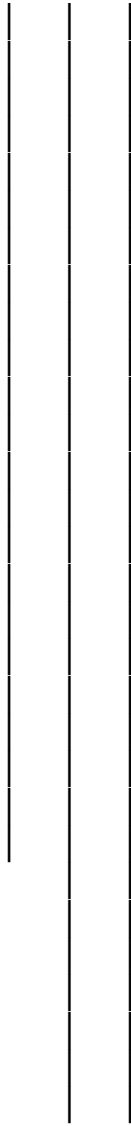
「ああ、大丈夫だよ。母さんにも言っておいてくれないか。」

「うん、わかった。」

俺からの頼みを遂行するかのようになり、リユナはその場を離れていっ

た。

それを目で確認して、俺は扉を開いて闇の中へと入った。



外を出て一言。

やっぱり、と思った。

周りの闇は月と星の明かりのみによって照らされていた。

いつもなら各家ごとに暖かい光が漏れていたはずであった。

しかし今夜はその光が無い。

おかしい。怪しい。

ただただ疑問ばかりが浮かび、答えが出ない。俺はそんな状況に陥^{おちい}った。

ふと、ある臭いが風に乗って俺の鼻を通り過ぎた。

その臭いに疑問がまた沸いた。

この臭い、どこかで嗅いだことがある。

何だ？どこで、いつ、何をしていた時にだ？

それも何回も臭った覚えがあるぞ。

すると、『やつ』の言葉を思い出した。

《この先に国にとって、君にとっての重要な事件が起きる。》

『重要な事件』、『この国・自分にとっての』、『覚えがある臭い』
その言葉を組み合わせると、一つの『最悪な』答えが浮かび上がった。

そしてその答えを証明するかのように、また『臭い』が漂った。

その答えは、

「……何で『血の臭い』が……？」

||
||
||
||
||

『本当の物語』はこれから

今までののは「序章」に過ぎない

さあ、これから楽しい「劇」が始まる

踊れ
歌え
苦しめ
泣け
笑え
死ね

やつの祝福は過去を決る、痛いほどに（後書き）

おつかれさまでした。

主人公の痛い過去が見られました。

もちろん自分もありましたよ。ノートには書いていませんが。いやー楽しかった。

さて、主人公にチートな能力が備わりました。（キーワード追加）
それらがどう生かされていくか、今後に明らかにしていきたいと思っています。

ただ一言。マジでチートです。

ここから不穏な空気がでてきました。

何かと自分も楽しみです。どのように動かそうか迷いますね。
意外な人が出てくるのもいいですね。

ヒントとして、名前が出ている人は全員出す予定です。
あしからず。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

謎に包まれた人物がいっぱいいますね。早く書きたいです。

ありがとうございました。

血と涙と亡骸と（前書き）

いらっしやいませ。

早く思いつことができたのでパパッと書きました。

なんだかあやふやな所があるかもしれませんが、自分の力量が無い
せいです。

すみません。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

血と涙と亡骸と

走る、走る。

風を切る。

そのたびに血の臭いは強くなってゆく。

しかし街路には赤い液体らしきものは見当たらない。

（これはどういうことだ？何で城に近づく毎に臭いがつよくなっていくんのだ？）

周りの家々には灯りが点いていない。時間帯で考えれば滅多にないことだ。

ありえない。何故だ。

我が家から城までは歩きで約10分かかる。

しかし今、俺は走っているのにも関わらず城まで走るのに時間が長く感じていた。

心の中に渦巻くものは疑問と、恐怖。

誰でも、誰でも良いから、灯りを点けてくれ。

切実に願いながら角を曲がった。

すると一つだけ柔らかい光が漏れている家があった。

それを見た瞬間、ああ助かったと思った。

俺のささやかな願いが通じた。

俺は迷い無く一直線にその家の下へと向かった。

コンコン

その家に着いた俺はしばらく息を整えてから、神妙な気持ちで扉を叩いた。

答えは、無音。

また風が通り過ぎ、血の臭いがまた感じさせられた。

「あのー、どなたかいらっしやいますか？」

扉に向かって尋ねてみた。

答えは、またも無音。

おかしいと思い、

「はいりますよー。いいですかー？」

奥にも聞こえるくらいに声を響かせて扉を開けようとする。

いきなり話は変わるが、もちろんこの世界にも『鍵』というものが存在する。

ただ違うことは、木の棒を扉と壁に『ー』のように掛ける。

そうすることで引いても押しても開かなくなるという仕組みだ。

ただ欠点としては、家内に誰も居なく入ろうとすると二度とではな
いが入れなくなる。

しかしその欠点をなくす方法がある。

それは、『魔法』

その木の棒に魔力を注いでおき、その魔力を持つものが扉に触れる

と自動的に木の棒が外れる。

そういう仕組みを考えたのが、2代目王 シャヌルダ・克蘭ディ
ス国王なのだ。

あんな爺おじいでも頭は良いのだ。

閑話休題

俺はそれを思い出して入る気持ちを躊躇った。

しかし体はもう扉に触れており、慣性によって手に力が入ってしまった。

そうなるど普通は扉に手ごたえを感じで止まるはずだ。

はずだ。

火の灯火が目の前で広がっていった。

普通に、普通に何事も無く扉が開いた。

そしてまたもや疑問が浮かんだ。

何で『鍵』をせずにいるんだ？

その答えを見つけようと室内を見渡す。

答えは、見つかった。

そして愕然とした。

血の溜まりに倒れているかのように『もの』が三つ置かれていた。

「…………え？」

俺はそれしか言えなかった。

『最悪の予想』がここで早くも見せ付けられるとは思いもしなかった。

叫びたい、しかしここで叫んだら何か『最悪な事』が続いてしまうかもしれない。

それはただの勘。しかしその勘が心を冷静にさせてくれた。

早くなっている鼓動を感じながら、改めて『三つのもの』を確認する。

初見で分かったことは、血でできた水溜りがあるということ。

そしてそれに沈んでいるかのように倒れているものは、『人間』

男性特有の筋肉質な体、女性特有のまるびを帯びた柔らかそうな体。

そして、子供特有の小さな体。

それら三つが身を寄せ合って『死んでいた』

男性は胸に十文字、女性には腹部と背中に縦の深い傷、子供は首の前後に傷跡がある。

どれもこれも赤い明暗がはっきりとわかるほど斬られていた。

そしてどの顔にも殴られた後が痛いほどに分かり、目らしきところから無色の液体が流れた跡が分かる。

この傷跡によって惨劇が安易に伺うことができてしまった。

それを確認すると室内で荒らされていないかと、辺りを見渡した。

椅子とテーブルが倒れ、夕食が何か分からないほどグチャグチャに混ぜられた食べ物。

木でできた食器も床で無残に落ちていた。

そして特に目立つもの、それは壁に走った『血痕』

斜めに、縦に、横にと、四方八方と、どの壁も血が壁を走っていた。

床はともかく、天井にもいくつかとんでいた。

……血の臭いがとても濃かった。

本当は今すぐにでも吐きたかった。けどここで、この惨劇の場で吐いていいのだろうか。

否、今日の前で死んでいる家族に面目が立たなくなってしまう。

俺は彼らに向かって手を合わせ、願った。

外に出た瞬間、血の臭いは薄く感じた。

それと同時にその安心からか、今まで我慢していた吐き気が膨張し始めた。

だめだ！ここで吐くな！！

そう念じていても一向に収まらない。

ついに我慢の限界なのか、喉から熱い感覚は出始めた。

俺はすぐさま近くの路地裏へ向かい、吐いた。

今の俺の声では到底思えないほど低くぐもった唸り。

同時にビチャビチャと液体が地面へ零れるかのような音。

胃の中のものをすべて出しても、まだ出したりない。

ついにはその液体まで出始めた。

喉が痛い。焼けるように沁^しみる。

何とも酸っぱい味を覚える暇なく、次々と出てくる。この体でそれだけ持っているのかと思うほど。

だんだんと吐く量が少なくなり、程なくしてようやく止まってくれた。

しかし喉の痛みは未だに引かず噎^むせてしまった。

その身体的苦しみで自分の周りの状況を確認することができた。

しかしその精神的な安定がまたもや崩れるとは思わなかった。

路地裏にも血の臭いが充満していた。ただでさえ狭い道だというのに息苦しくなってしまうた。

そのことに気付き、俯いていた顔を暗闇の奥へと上げた。

壁へ身を任せるように座っている者、冷たい地面に体を横たえている者。

それらが数メートルしか見えないはずなのに多くあった。

その者たちにある、共通点。

『立っている者が1人もいない』

俺はゆっくりと、とある人の形をしているものに近づいた。

そして顔の頬を触れると、硬く感じた。冷たく感じた。

その衝撃に耐えていると、その者の服装が目に入った。

何処かで見たことがある防具。 何度も見たことがある防具。

そして、今日も見ることがある防具が、そこにあった。

『血に濡れている』状態で。

まさかと『最悪』の想像をついてしまい、それを破壊するために他の者たちを確認した。

結果は、破壊出来なかった。

全員が全員、全てが全て、俺が教えていた兵士たちだった。

それが分かってしまった瞬間、俺はまた叫びたくなった。

何故お前らがここにいる？

何故お前らはここで死んでいる？

何故お前らはここで殺されなければならなかったんだ？

そして最後の疑問。

一体誰がお前らを殺したんだ？

またもや疑問で満杯となった頭。同時に精神は混乱へと陥おちいった。

1人1人の顔を確認する暇がない。何人死んでしまったのか聞く相手もない。

俺の混乱は骨の髄ずいまで深く入り込んできた。

さらに、無意識に俺の体は後ろへと倒れていった。

分からない。分からない。全てが分からなくなってゆく。

……【「だけどあなたには『元場所』が変わった。」】

……【「《だからあなたはとても可^{かわいそう}哀想な『存在』。》」】

……【「《けど、あなたはとても面白い『存在』。》」】

……【「《けど、あなたはとても珍しい『存在』。》」】

……【「《だから、少し手伝ってあげる。》」】

……【「《あなたが楽しく過ごせるように。》」】

……【「《あなたが面白く過ごせるように。》」】

……【「《あなたという『存在』が強くなるように。》」】

……【「《あなたという『存在』があり続けるように。》」】

……【「《私たちからあなたに『力』を与える。》」】

……【「《だから、あなたは必ず生き続けてね。》」】

……【「《だから、あなたは必ず無くならないでね。》」】

……【「《それじゃあ、また会おうね。『稀なる存在』さん》」】

[illegible]

弱い光、

弱く輝いてる、月の光が視界にぼんやりと映りだした。

何だ、あいつ、居なかったじゃないか。

それに、なんだか変な『夢』を見た気がする。

だめだ、思い出せない。

そこで『夢』の模索を中止し、深呼吸をする。

俺の肺に入ってきたのは、濃い鉄の臭い。

ああそっか、俺は路地裏で気絶していたんだっただな。

そう思い、上体をゆつくりと起こす。

そこから見たのは、数時間前には俺に笑顔を向けていた兵士たちがいた。

しかしその状態は、ただの亡骸へと変貌してしまっていた。

『一度死んだ者は二度と生き返らない』、これはどちらの世界でも同じようだな。

そんなことを思いながらも、俺はまったく動く気が起きなかった。

俺はこれからどうしようか。

逃げる？無理無理。ただでさえこいつらは一気に死んでいるのに、逃げ切れるわけがない。

俺は脳内の自問自答に首を振る。

では、戦う？これも却下。相手はいくつついるのか、相手の実力が分からない状態ではこちらの負け。

さらにこちらには味方が1人もいない。単騎突入は愚の骨頂^{うのこてい}。

ではどうするか。何も思い浮かばない。

そう自己解決して、起こした上体をまた地面につけた。

戦うのも無理。逃げるのも無理。

かといってここに居続けると、兵士を殺したやつらが戻ってくるかもしれない。

四面楚歌。この世界では誰も知らない言葉が頭のなかで浮かび上がった。

こんな知識を知る人間も、今日で死ぬかもしれないな。

そう自傷した。

そう思っていると、やつの声が懐かしく感じた。

たとえばこんなのか。

『君はこれから『死』の淵に立たされることとなる。』

息がとまった。

『その淵はとても狭く、脆い。』

あのととき、やつが言った言葉。

『なので、たった一つの小さい石の重さが加わると『死』へと落とされてしまう。つまり、君の行動次第で落ちてしまうわけだ。』

一度零れた『水』は、隣の『水』とともに流れてゆく。

『だが、君はまだ生きたい。その淵から脱出したい。ならどうするのか。後ろに下がるのも良し。その淵から飛び、向こう側の淵へと向かうのも良い。』

湧いてくる。あの時に言っていたことが溢れてくる。

『どう判断し『生きて』いくのかは君次第だ。我々がどうこう言うことではない。』

そうだった。俺はやつの言葉を聞いて、

『君の目の前に広がる世界を否定するな。その行為は同時に『死』をもたらすこととなる。』

死を回避しようと、

『君には『力』がある。その『力』をどう駆使し、誰のために使うかは考えて行け。』

力を手に入れて、

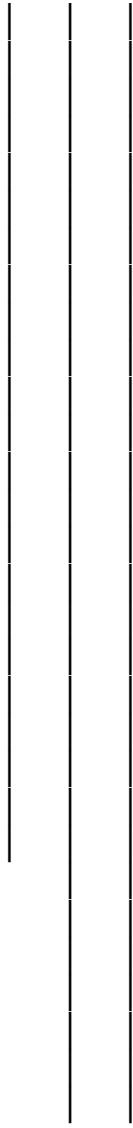
『万物に『正解』は無い。何万、何億もの答えがある。その中の答えが、君だ。』

答え無き答えを求めようとして、

『万物を知りたいなら、万物を受け入れろ。それが最善、最短の道だ。』

全てを受け入れる。

そう俺は『決断』したはずだ。



扉が勢いよく開く音が家内に響いた。

「母さん、リュナ、居るか？」

扉の音によるのか、はたまた俺の声が聞こえたのか、件の二人は寢室の扉から顔だけ出した。

「どうしたのシャン？いきなり扉を開けて。」

「おかえり、シャン。」

母さんは心配そうな顔で、リュナは眠たそうな顔で俺を迎えた。

「ただいま。大丈夫、やりやなきやいけないことを思い出したただけだから。」

そう言いながら、二階にある自室へ階段を登りはじめた。

その行動に何か引っかけたのか、また母さんは俺に訊ねてくる。

「本当に大丈夫？何かあったの？」

「何でもないよ。ただ明日までにやらなきやいけないことだから。」

気にしないで。俺一人でできることだからね。」

間髪入れずに答え、階段を登って自室へ入った。

そう、明日までにやらなきやいけないんだ。

俺が今まで出会ってきた人たちを助けるために。

身支度を整え、必要最低限なものを肩掛けのバックへと詰める。

そして準備が終わり、これからやることをもう一度頭の中で確認する。

吸って、吐いて、吸って、吐いて。

精神的・身体的状態も整うと、俺は窓に片足を掛ける。

頬を撫でる風には、相変わらず『嫌な臭い』が混じっていた。

しかし、そんなことを考えている暇は無い。

「母さん、リュナ、俺は下手をしたらここに帰ってこないかもしれない。」

だから事前に言っておくよ。ごめんなさい。

けど、今二人はここに居ないから意味がなくなるけどね。」

1人部屋に向かって呟きながらもう片方の足も窓枠へつける。

そして顔を空……月へ向けて『宣言』する。

「俺は決めたよ。決断したよ。」

生きるって。生き続けるって。

それを『お前ら』は見ていてくれ。手助けしてくれ。

俺は抗^{あらが}う。

『死』に抗う。『運命』に抗う。『世界』に抗う。

俺の『未来』を、全て抵抗する。」

そう言い切り、もう一度部屋……母さんとリユナが居るであろう方向へ振り向く。

「こんな俺でごめんな。」

守ってやれないかもしれない。

「ごめんな。本当にごめんな。」

そして、

「じゃあ、いつてきます。」

部屋には誰の姿も無くなった。

[illegible]

『劇』のはじまりはじまり

これから彼はどのように進むのか

お客さんも増えた

では、『踊れ』

血と涙と亡骸と（後書き）

おつかれさまでした。

なんだか大変なことが起こりましたね。

まあこれのようなものが続くかもしれませんが。
信じるか信じないかはあなた次第で。

ちょっと残酷な描写が入りましたね。

一応R15を入れておきます。（キーワード追加）

一応更新ペースは4～5日と決めましたが、

気分によつては一日ごとに更新することもあります。今回みたいに。
半不定期。なんじゃこりゃ。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。

できるだけ早く修正します。

意味が分からない・何て読むのか分からない文字や文があったら、

……できるだけ自分で調べてください。

意味も分かるし、覚えることができるので、一石二鳥ですよ。（汗）

ありがとうございました。

『殺』という概念 『異』という存在・・・前編（前書き）

いらっしやいませ。

今回もまた前後編で投稿させていただきます。
理由は話が長すぎたため。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

『殺』という概念 『異』という存在……前編

石畳の上を走る音が、^{ひこけ}人氣が無く静かな街路に響いていた。

そんなことを気にせず、俺は高くそびえる影……国城へ向かっていた。

まるで光という存在を持っていない城は、それはそれは異様な光景であった。

しかしそれを照らしているのは月光のみ。その光が加わることでまた畏怖を感じる。

その情景を例えるのなら……幽霊城かはたまた廃城といえ、的を射ているだろう。

俺がそれに近づけば近づくほど、その城は高く聳^{そび}えて俺の存在が塵のように感じさせられる。

このペースだと、あと数分もすれば城門に着くことができるだろうな。少し早く感じるが。

そんなことを考えながら薄く照らされた道を走った。

すると、目の前の道の上で動く影を見つけた。

そして俺は思った。

ああ、城門に着くのはもう少しかかるなあ、と。

だって、その影が俺を待っているかのように『立って』いるから。

二つの黒い影。それらは大人の男性ほどの身長を持っていた。

それを確認できるようになったのは、その影との距離が家一つ分の距離となった時だ。

その時の俺は、頭の中で一つの引っ掛かりを感じていた。

その影には何か見覚えがあった。

どこで見たのだろうか。

そう、確かその時もこのような状況だった。

（月の光のみの照明、影と評することができる黒いマント、そして、
）

二つの影が動く。

（抜刀したその剣に見覚えがある。そして俺はその剣を握ったことがある。）

そこから導き出される答えは

「…………お前ら、あの時のやつらの仲間か…………」

その呟きの答えは…………やはり、攻撃だった。

1人の少年に向かって二人同時に駆け出す。

少年から見たら両方とも斜めから攻撃をするように走る。

相手は武器はおろか、防具すら身につけていない。

これは好機。絶好の獲物だ。

そう思いながら少年に走り、剣を構える。

――しかし、その少年が相手でなければ『絶好の獲物』だった
だろうが――

半分くらいまで距離を詰めると、突如少年も走りだした。

二人にとっては『半分』予想外。もう『半分』は想定内。

唯^{ただ}でさえ『獲物』は生き物。本能による反抗は当たり前。

俺達はそれを無力化し、ただ『消す』だけ。

そして間合いの範囲に少年の姿を目で捉えたと、男は自らの剣を振るう。

それから生み出されるであろうものは、肉が斬れる触感と、耳を劈^{つみかく}くかのように響く悲鳴。

それを待ちかねたか気持ちで目を瞑^{つむ}り、少年を横薙ぎに斬った。

実際に感じたものは――――剣が風を切る音と、耳に響いた音。

自らの剣で殺せなかったのは悔しいが、もう片方のやつが殺したのだらうと推測する。

しかし、その音に違和感を感じた。

そう、快樂を楽しむことができる悲鳴ではなく――――何か『硬いもの』が強引に砕かれたような音が。

そのことに気付くと同時にまた聞こえる音。

それは、『金属』でできたものが石畳に落ちた時に刺すように響く音だった。

おかしい。何かがおかしい。最初の音は何だ？さっきの音は何で聞こえた？

その答えがある、相方の男の方へ顔を向け、まぶた 瞼を開いた。

そこから見えるのは……月明かりによって照らされた『逆転』の光景。

少年が立ち、男が遠くで地に伏す。その様な『色』が目に入って認識させられた。

そして状況を判断させられると、今度は警鐘がうるさいほどに響いた。

耳からではない。脳に『音』として鳴り響いている。

こいつは何だ？こいつは何者だ？こいつが見ているものは何だ？

彼が混乱している中、少年は一つの行動に出た。

それは――剣を拾うという動作。

まるで目の前に敵がいなかったかのように少年は膝を曲げて左手で剣を拾い、元の姿勢に戻るべく膝を伸ばした。

そしてもう一人の敵を視界に捉えて、『歩き始めた』

一歩、また一歩。50数cmずつ近づく。

男はそれをただ見ていることしかできないでいた。何故なら混乱と『何か』が入り混じっていたから。

彼はその感情を理解できないでいた。

これは一体何だ？何故動けない？何故声が出ない？息はしているのか？

その答えは、少年が彼の間合いの範囲に入っても出てこなかった。
とにかく、その『答え』を求めるのは後にしよう。

そう彼は思い、少年から『離れた』

彼が取ったこの行動。本人は全く気付かず、『無意識』にそう行っ
た。

しかし、少年の歩みは止まらないうでいた。ひとつ、またひとつ近寄
る。

今はこの『少年』を殺さなければならない。

そう判断して、彼は近づいて少年を斬り付ける。

帰ってきたもの――『硬い』反応だった。まるで金属同士がぶ
つかり合ったかのような『硬さ』

剣で受け止められた。大の大人が少年に、だ。

またもや予想外の光景に一瞬固まってしまったが、気付くと同時に
剣に重さを加え始める。

普通ならばその重さに耐えきれなくなって、少年のような子であれ
ばその場で尻もちをつくはず。

しかし、そのその少年が『普通』であればの話だが。

少しずつ加わる重圧。しかしそれをものともせず立っている少年。

表情は月光による影で分らないが、苦しい表情だと『彼は思いこんだ。』

ただでさえ全体重を少年へ傾けているのだから苦しいのは当然だろう、と彼は思った。

そろそろ決めてやろうか。そう決断し、少年を飛ばすように剣に力を入れた。

そこから生み出される結果は……彼が力負けした。

何故、と思った。その証拠に、少年はその状態で止まっており、その姿が離れていくように見えた。

思わず左足で体を支え、少年を再度視界に捉える。

やはり少年は左手に剣を持って立っていた。

ただ、一つ違いがあった。たった一箇所の違い。

それは、『左腕の位置』だ。

彼の剣を防いだ状態から、まるで『真横へ振りぬいた』かのような状態へ。

何故、そんなことを考えると同時に胸部に鋭い痛みが走った。

その痛みへ目を向けると、胸から血が出ていた。いや、『噴き出ていた』

何故、また問いを浮かんだ。何時俺は斬られた、と。

しかし血が出過ぎたのか、頭が上手く回らなくなってきたようだ。

少年はそんなことは知らず、右足がひとつ近づいた。

それを見た彼の瞳は、目の前の『何かの感情』とこれからの欲望で染まっていた。

こいつは何だ。こいつは何をした。こいつは何者だ。

俺はまだ死にたくない。俺はまだ生きたい。

少年は左腕をゆっくりと上げていった。少年の瞳には彼の姿が映っていた。

いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ

腕が上がるたびに何度も思う。心の中で叫ぶ。少年の瞳の中で嘆く。

そして少年の腕が下りると同時に彼へ向かって振り落とされる剣。

分かったぞ、この『感情』

左肩から斜めに走る激痛。

この『感情』は『あの人』の前で感じていたものだ。

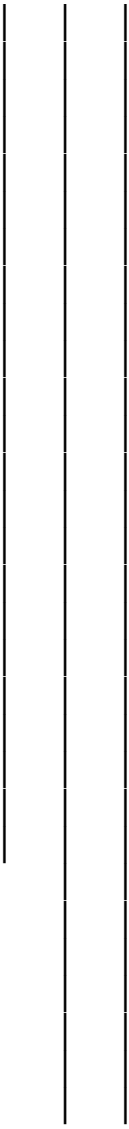
青白い光がだんだんと黒く染められる世界を見ている。

それは最近感じたものだ。

体が石畳へ倒れ、ひんやりとした地面が顔で感じた。

これは、『恐怖』だ。

そして彼は『絶望した獲物』と成り果て、散った。



人を初めて『斬った』。

けど、『罪悪感』は感じなかった。

その前に多くの『死』を見てきた。

それに比べればまだましだ。

絶望することに『飽きた』、ひどい言い方だとそうなる。

人を斬ることに『絶望』と『罪悪感』が無くなったら、あとは何が残る？

後は何も残らない。全く、無い。

ただ俺が感じている感情は、『驚愕』だ。

初めは軽く走って敵に近づいたのだが、そこから驚いてしまった。

そのスピードが『本気で走っている』速さと同じくらいなのだ。

右から来た男が剣を横に振るのを、その速さを維持したまま跳んで避けた。

するとそれを狙っていたのか、左側の男が縦に剣を構えていた。

そのままの状態でいると、俺は斬られただろう。

けど、俺は動いた。空中にも関わらずに動いた。

それは単純なこと。左足を男の首元を狙って『蹴る』様にした。

簡単にいえば、『飛び蹴り』のようなもの。

そしてそのまま俺の左足は男の首に触れて力を加え、『そのまま衝撃を喰らって飛んでいく』はずだろう。

しかし現実には甘かった。いや、『おかしくなった』が正しい。

俺が感じたもの。それは、『何かが碎ける音』と『何かが碎けた感触』だった。

音の原因はどこからか。それは俺の目の前で発生した。

どうやら首の骨が『碎けて』しまったようだ。

さらに『碎けた』ことによって、その攻撃で発生した衝撃の『防壁』が無くなってあまり飛んで行かなかった。

そして結果としては、俺は体制を整えて着地し男は数メートル飛んで倒れた。

それと、すぐ近くでの『金属によって起こるけたたましい音』が響いた。

俺の足元にあるのは、一振りの剣。

それを拾い、この現状を確認した。

どうやら俺の体は、『やつ』の加護とやらで強くなっているらしい。

敵に近づくときの『脚の速さ』、敵を蹴ったときの『脚力の大きさ』

この体では到底出ないだろう、俺は何か得体の知れないものになっ

たのか。

俺の心境は矛盾が起こっていた。

『驚愕』を感じながら『冷静』に判断する。

そんなことを感じながら剣を拾った。

そして右を見ると、もう一人の『敵』がいた。

どうやら俺が立っていることに驚いているようだ。そんな表情を見て、心の中で少し笑った。

そのまま男に近づいていく。まだ相手はさっきと同じ体制だ。

しかし俺はその光景に何も思わず、ただ一步一步歩み近づくだけ。

そして俺の間合いに男が入ると、突如男の剣が振り下ろされた。

やっと動いたか。そんな小さな感想を思い浮かべながら、俺は左手に持っている剣で受け止めた。

……思ったよりも力が弱い。まるで木の板を支えているかのように軽い。

欠伸^{あくび}が出そうだ、と思っていると、男は業^{いっぴ}を煮やしたのか剣に重さが突如増えた。

その力に俺も同等以上の力で押し返した。するとどうだろうか。

男は予想外の反作用によって後ろに傾いた。驚愕の表情で。

しかしすぐに片方の足でバランスを取った。

ただ、油断は大きく見えていた。

その隙を突いて、横に一筋の斬り込み。狙いは心臓部分。

それは上手くいき、深く斬れた感触が手に響いた。

その証拠に、男の胸部から血が吹き出していた。

それを視認し、また一歩近づいた。

男の目。それは『恐怖』と『欲望』という濁った色が混ざっていた。

なんとも腐った色。人間の闇となった色。

もう見たくない。そんな色はこの世にはいない。

そんな願望で、男を左肩から斜めに斬った。

返り血は浴びたくなかった。だから浴びなかった。

剣を空中で一振りし、斬った際に付いた血を払った。

（武器は手に入れたが、このままっという訳にもいかないな。）

今手にしているのは、先ほど男を斬った際に使った剣と、もう一人が持っていた剣。

二つの剣を持ったはいいが、このまま持ち運ぶのも目立つだろう。

（なら、鞘さやを拝借していくか。返す相手は死んだが。）

思いつけば即行動。二つの死体となったものから二つの鞘を抜き取り、俺の腰へと着ける。

左右へ剣を戻し、思う。

（うわー、中二の頃の夢が叶ったあ。嬉しくないなあ。）

後悔真っ盛りであった。

（それはともかく、早く城へ行かないと。）

心を落ち着かせて当初の目的を思い出して、走り出した。

相変わらず城は暗く聳^{そび}え立っていた。

『殺』という概念 『異』という存在……前編（後書き）

おつかれさまでした。

一つ目が覚醒しました。

なんだか大変なことになってきてこちらも少しつらいです。
どう文にすればいいのか混乱してしまうので。

とにかく、武器ゲット。

後編はまだ未完成なのですが、近日投稿する予定です。

そんなに気がつまった話ではないと思います。

つまり、前編と後編で分量が違うということ。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

実は、現在二次創作の物語を書いています。

友人からの頼みなのですが、話が話で分らないです。

『恋姫無双』ってなんですか？教えてください。サイトを見ても分からないことばかり。

導入部分は出来たのですが、そこからどう進めるのか悩んでいます。

ちなみに、その物語はまだ投稿していません。

この物語がひと段落したら投稿しろ、と言われました。

しかしこの物語が落ち着くのはまだまだ先の予定です。

大変ですね。他人事みたいですが、大変です。

ありがとうございました。

『殺』という概念 『異』という存在・・・後編（前書き）

いらっしやいませ。

7000文字突破。

何故か手ではなく足が痺れました。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

『殺』という概念 『異』という存在……後編

やっと城門の前へ着いた。

しかしというか、やはり様子がおかしい。

城門の前には門番の兵士がいるはずだ。

だがこの夜では姿が見えない。影も形も、無い。

（やっぱり何か大変なことが起こっているんだな。）

そう思いながら、硬く閉ざされている木の扉に力を入れた。

……当たり前だが、びくともしなかった。ただ木が撓^{しな}る音が聞こえた
だけだった。

扉がだめなら壁はと思ったが、扉以上の高さで立っているため到底
飛び越えることができなさそうだ。

万事休す、ここで手詰まりとなるとは思わなかった。

肩を下ろし再度扉の前まで行き、扉を背もたれとして座った。

上を見上げると月と星。視界を下ろすと怖いほど静かな町。

右を見ると奥が暗い闇となっている道。

もちろん左も見ると、闇の中に動く影が見えるだけだ。

……？

『動く影』？

まさかまた『あいつら』か！？

いきなりの展開にすぐさま立ちあがり、剣の柄へ手を伸ばす。

すると、

「おお~~~~い！！誰かいますかあ~~~~！！？」

人の安否を確認するかのような言葉が大きく聞こえた。

「……へ？」

予想外の出来事に変な声が出てしまった。

「いたら返事してくださあ~~~~い!!!」

……お?お~~~~い!!!!!!」

どうやら俺の存在が見えたようだ。

俺もぼんやりとだが、姿が見えた。

しかも、その声に『聞き覚えがある』気がする。

「はあはあはあ、よ、よかった。誰も返事してくれないから怖かったんですよ。」

その人物が目の前までくると顔を伏せながら息を切らせていた。

その声は若く、姿も若者の体つきであった。

「いやあよかったよかった。何でこんなことになっているんですかね?」

そう言いながら顔を上げると、やはり見知った人物だった。

「……あれ?シャン君?何で?」

「……カムさん、あなたこそ何故ここに?」

カム・トランスだった。まったくもって予想外である。

--	--	--

カムがここまで来れた理由は下記の通りだ。

鍛練が終わり家に帰って、すぐ寝た。

←

起きると外はもう暗くなっていた。

←
けど町中が静かで様子がおかしいと気付く。

←
外に出てみると人が1人もいなかった。

←
誰かいないか呼びかけながら城に向かって行った。

←
城門の前で俺と合流↑今ココ

だそうだ。

その行動に俺は、

「帰ってからすぐ寝ないでください。せめて体操でもしておいてください。」

「え？そこに注目したの？」

ん？おかしなことを言ったのか？

「それはともかく、カムさんは誰にも見つけることが出来なかったのですか？」

「うん、人っ子1人いなかったよ。」

さすがに人の家まで入るわけにもいかなかったから、入らなかつたけど。

「けどよかった。シャン君がいると安心するや。」

「なに気持ち悪いことを言っているのですか。」

そう言う俺も少し安心していた。

ここまでで『生きた人間』は1人も見なかったから。

死んで動かないものより、生気を感じる方がいいだろう。

「あの、ここまでできておかしいことは起きませんでしたか？」

「え？おかしいことって、今のような状態のことかな？」

そりゃあ人が少ないことがおかしいけど……

なにか分かったの？」

「……いや、俺も同じような境遇ですね。

分かったことはまだ少なく、確定できるものがありませんから。」

「そっか……それならしかたないね。」

俺の答えを聞いて落胆した様子だ。子供に落胆する大人って、だめだろ普通。

とにかくカムも様子がおかしいために城へ向かったようだ。

しかし門が閉まっっていて何もできないでいた。

「カムさん、この門って開けることができますか？」

「僕のような軍に所属している者は開ける権利が無いんだ。だから難しいかな。」

この門を管理する門番は『防衛』から出ている。

前回に言った通り、この門は『防衛』が管轄しているため『軍』の者がすることは皆無である。

つまり、この場にいる者は誰も動かせないということだ。

「そうですか……少し考えさせてください。」

返事を待たずにもう一度扉の前で座り、頭を巡らす。

人が誰も彼も殺されている街。

俺に襲いかかってきた『あいつら』の集団。

誰もいない城門。

唯一生きていたカム。

ひとつひとつのピースが繋がったり噛み合わなかったりして、

『ある可能性』が浮かび上がった。

しかし現段階では証拠となるものが何一つない。

だから『可能性』、それもいやな『可能性』

最近の俺の思考はネガティブになっているのか？そう思うほどだ。

「はあ。寝ていないからかな。」

その原因らしきものを呟いたが、それも空気となって見えなくなる。

「シャン君。ねえシャン君。」

隣でカムが俺を呼んでいた。何か不安そうな声で。

「……はい、何ですか？どうかしましたか？」

呼ばれて答えると、俺も気付いた。

……人が走る音がする。それも『大勢』聞こえている。

「カムさん、これは……」

「うん、何か聞こえてくるね。」

まさか生き残っていた人かな？」

俺が疑問の表情をしている反面、カムは何か嬉しそうに辺りを見渡していた。

「カムさん、あなたは左を見ていてください。」

俺は右側を見えていますから、何か変化があったら報告してください。
い。」

「うん、分かった。」

返事をしながらも、早く姿を確認したいという気持ちが溢れていた。
我慢してくれ。

カムの反応にあきれてもしかたないので、俺は右側へ視界を向けた。
そこにはやはり暗く染まった家と道があり、空に星が鏤ちりばめられていた。

やはりあの音は気のせいなのか？いやしかし今でも音は小さいが聞こえてくる。

耳を澄ませていると、僅かにだが足音が多くなっていることが分かる。

……これはどういうことだ？

街の人たちはみな死んでいた。これは俺が見てきたから本当のことだ。

ではこの『人数』は何だ？それほどいるのなら俺は気付くはずだ。

そんな疑問が浮かび、今一度闇へとなっている道の奥へ目を凝らした。

そこから見えてきたものは、『大量の影』であった。

「ね、ねえシャン君。あんなに人がいたっけ？」

俺と同じような考えがカムの頭には浮かんだようだ。

「……いえ、これほどの人たちは見ていません。」

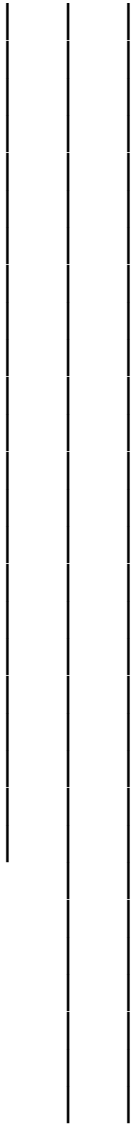
これだけは言える。

「え！？じゃ、じゃあこの人たちは誰なの？」

少しずつ見えてきた『影』は、『見覚えがある影』

「おそろく……いえ、確実に『敵』でしょう。」

やはり、黒い外套がこちらに向かって走っていた。



「やっぱりお前らか。何でこんなところに居ると知っているかは聞かないでおうか。」

で、何しに来たんだ？また俺を殺しにきたのか？」

「えっ！！！！シャン君を殺す！？どついうこと！！！」

そういえばカムに言っていなかったような気がする。まあいいか。

「そのことは後で話します。我慢してください。」

カムに向かって申し訳なさそうに言う。

そして『黒い集団』へ向き直り、

「……で？お前らはいまからどつするんだ？」

俺の質問に一切声を発さず、しかし剣を抜く際の音が次々と鳴り響いてきた。

「そうか……やっぱりそれなのか……」

カムさん、剣を持っていますか？なければ貸しますよ。」

カムの腰には剣が無いことに気がつき、右腰につけていた剣をカムの足元へ滑らせる。

俺の言葉に驚いたのかはたまた俺から剣が渡されたことになのか足元に来た剣を見つめていた。

そして俺は右手で剣を抜きながら

「カムさん、これは模擬戦ではなく『実戦』です。

生きるか死ぬかを決めていきます。あなたにはできるだけ生きてください。

まだ、あなたは若いですからね。」

俺がこんなことを言っている間に敵の1人がこちらに向かってきた。

「だからこれ以上1人にさせないでください。

俺の泣きごとは初めて聞くでしょう？だって初めて言ったのですから。」

敵の剣に反射している月光が視界の端にちらちらと光っていた。

どうやら剣を振りかぶっているようだ。

「だから、生き残るために」

左斜めに斬り下ろした。感触はある。深く、深く。

「戦いましょう。」

最後の試験です。俺とこの国を救いましょう。」

戦いの序章は、血の噴出であった。

「カムさん、早く剣を取らないと斬られてしまいますよ。」

敵から目をそらさず、未だに動いていないカムに叱咤した。

その言葉にようやく起動したのか、足元にある剣を右手で拾い構えた。

しかし剣先が動いている……いや、震えている。

俺はこれ以上何も言わない。戦いの場所は悲鳴と奇声が飛び交うのだから。

だから、俺は『俺自身』で行かせてもらう。

~~~~~

「……さて、さっきは左手でいけたがやっぱり『利き腕』じゃあないほうは力加減が難しいな。」

……今回は右腕で行こうかな。予備として左手にも剣を持っておこうか。」

小さく誰にも聞こえないように呟きながら、先ほど斬られた男の剣を取る。

剣の柄やデザインを見ると、やはり『同じやつ』であった。

「……不甲斐無い。<sup>ふがいな</sup>まったく不甲斐無いなあ。

お前らの仲間が俺によって倒されているにも関わらず、立ち向かうとは。

それを承知でやっているのか、はたまた馬鹿正直に『命令』されたことをこなしているのか。」

そう言いきると、左手にある剣を空中で回し始める。

ヒュンヒュン、パシ。

ヒュンヒュン、パシ。

風を切る音、手に掴まれる音。

どれも一定の音、一定のタイミングで鳴らしていた。

俺の目の前にいるやつも、その隣のやつも、そしてカムも。

俺以外の者全員が、空中へ舞っている剣を見つめていた。

それをどのような気持ちで見ているのだろうか。

月明かりに照らされて踊っている剣に見とれているのか、

俺の不可解な行動に何をすればいいのか分からないのか、

この状態からどのような攻撃が繰り出されているのか、

陶醉か、混乱か、警戒か。

ひとりひとりそんな表情をしていた。

それを見て、『笑みが浮かんだ』

「……クツ、そんな可笑しい顔を向けないでくれないか？

そんな顔で見つめられると、笑ってしまうだろ？」

そんなことを言いながらも左手を止めることは無い。

何故なら、そちらに注目してもらうほうがこちらとしては『ありがたいこと』だからだ。

右手にある剣の感触を確かめる。どこにでもあるようなもの。だがこれでいい。

左手で回されている剣を見る。反射してみえる月光は濁っているように見える。だがどうでもいい。

どうせ捨てるのだ。『一時だけ』

左手で剣を掴み、また上へ投げた。

目の前にいる影に向かって、

「さてと、そろそろ本番といくか。

お前、『避けるよ』？」

言った瞬間、俺は『回った』

景色が左へ流れるかのように動いている。

それと同時に右手にある剣を横へ振りかぶるように構えた。

そして元の景色が戻ろうとしていると同時に、

右に激しく『斬った』

そこから起こったものは、『甲高く劈く金属音』

その『原因』は未だに鳴り響きながらも、『ある方向』へ回りながら飛んでゆく。

そして、

『ドスッ』

ひとつの影の中心へ奥深く刺さった。

それと同時に俺は駆け出す。

「あゝあ、だから『避けるよ』って言っただろうが。

けど、『剣を打つ』ってのは意外と力があるものなんだな。手が痺れるほど衝撃が来たな。

まあいいさ。これからの経験になるからな。それじゃあ、」

右隣にいる者を右斜めに袈裟斬りに払い、左の者に刺されている剣を左手で抜く。

どちらの剣にも血がついている。しかし払わない。

何故なら、ここは戦場だから。そんな余裕はない。

「俺は今から、お前らが殺してきた人の人数分に殺す。

もちろんそれ以上も殺す。何故なら普通以上の殺し方をしたから。

だからお前らを殺す。罰する。体裁を行う。神罰を行う。

だから、覚悟しろ。」

俺はただただ、『処刑者』となっただけだ。

また一人、罰を受けた。

また一人、もう一人。

同時に二人もあった。

縦に、横に、斜めに、上から、下から、前から、後ろから殺した。

斬った、刺した、鋏<sup>はさ</sup>んだ、蹴った、殴った。

どれだけ殺した？分からない。

どれだけ処罰した？分からない。

自問自答している間にもまた一人やった。

後悔しているか？していない。

罪悪感はあるか？まったくない。

苦しいか？全然苦しくない。

では、気持ちいいか？

いや、気持ち悪い。反吐が出るほど。

何故だ？

斬っても斬っても人が減らないから。

一人斬られても一人増える。

二人斬られても二人増える。

無限に湧き出てくる敵。

このことに気分が悪くなり、怒りを覚え始めた。

横目でカムを見ると、一人一人斬っているようだ。

まだ慣れない様子で、たどたどしく人を斬っていた。

それを見て、俺は何も言わず何もしない。

ただ来る敵を罰するのみ考える。

しかし現状は多勢に無勢。まさに文字通りな状態になっていた。

敵は無限に近い人数。それに対してこちらは二人。

これで勝つというのは、まさに『夢物語』である。

では、その『夢物語』をどのように実現させるか。

……一応、ひとつの方法がある。

しかし、これは大きな賭けとなる。

だが賭けないで負けるより、賭けて負ける方がまだマシだ。

俺は『その方法』を実行することを決断し、カムのもとへと駆けた。

もちろん『影の壁』は多く立っていた。

なら、その『壁』を利用すればいい。

そう思い、目の前の『一つ目の壁』を縦に斬った。

返り血を浴びるが今となってはどうでもいい。

死体となり膝を着いた『壁』の肩へ脚を掛け、『上空へ跳んだ』

そこから見えるのは、わらわらと動いている黒い影と、唯一黒以外の服装であるカムの姿が見えた。

ここからカムまでの間には三人ほどの影がいた。

高さは大丈夫。問題は横の移動距離だ。

冷静にそう判断し、体を横へと傾けながら『回転した』

手に持っているのは血に染まった剣。

それを下の影へ斬り込んだ。

斬る方向の作用を作り、斬るために起こる反作用を利用して横の速度を速める。

これが俺が出来る移動方法だ。

このようなことが出来るのも、『やつ』のおかげだからだ。

一人斬るたびに速さが増し、移動距離が大きくなる。

そして三人目を斬り、カムの元へとたどり着いた。

「カムさん、突然ですが質問してもいいですか？」

「え！？シャン君、何時の間にいたの？」

質問？別にいいけど……」

あくまで冷静に言う。相手を落ち着かせるために。

「カムさんは『魔法』が使えますか？」

こんな質問をした。これは『一つ目の賭け』。その答えは、

「へ？魔法？ま、まあ一応使えるけど。」

ま、まさかその魔法で敵を倒せって言うんじゃないよね？」

「半分正解です。」

俺に『炎の魔法』を教えてくださいませんか？」

これが俺の『二つ目の賭け』だ。

これが出来なければ、『三つ目の賭け』が出来なくなる。

「ま、魔法を教える！？」

む、無理だよ！！魔法っていうのは数分……いや、最短でも数時間で出来るものだよ！！！！

それを一分も満たないうちにやるってのは、不可能なんだよ！？」

「そこをなんとか。」

それができないと『賭け』が出来ませんから。お願いします。」

「何が『賭け』なの！？それは絶対に出来ないことだよ！！」

ただでさえ教えることも時間が掛かるものなんだから！！！」

「……そうですか。」

これで『三つ目の賭け』が失った。

これでは……『最後の危険な賭け』しか残ってしまったではないか。

敵は俺達二人を取り囲むように動いている。

これはまさに四面楚歌……今日で二回も思い浮かぶとは思わなかった。

なら、それを打破するために『賭ける』しかないか。

「カムさん、俺のそばにいてください。」

『死にたいのであれば』敵を斬ってもいいですが。」

「え？……それはどういう意味……？」

そう呟きながらも、俺の雰囲気の違いに気がついたのか素直に言うとおりにした。

これで準備は整った。あとは『想像する』だけだ。

目を瞑る。<sup>つむ</sup>

イメージは『炎』

それは赤く、鉄を溶かすほどの熱さ。

それは円の形に燃えており、その円は大きく。

そう、『今俺たちを囲んでいる敵の円の大きさ』までに広がってゆく。

あとは、それを『出す』

すると体の中から『何か』が暑くなり始めた。

その『熱が籠った何か』が辺りに撒き散らかす感覚がした。

その時、

轟音が国中に響き渡った。

一瞬耳を塞ぎふさたくなるような大音量。

しかし俺はそうしない。何故なら『轟音の原因』を出したからだ。

瞼まぶたを開くと――目の前は真っ赤に染まっていた。

それは火。それは炎。それは『罰』

赤々と燃え、天に届くほどの高さで踊っている炎。

それは周りを見渡しても同じことだった。

そしてそこから起こることは、

『炎の歓声と影の絶叫』

響く。響き渡る。

体中。街中。国中。世界中。

影が口を開いている。影が叫んでいる。影が踊っている。

どれもこれも、苦しく。

それを行わせているものは、『罰』という名の炎。

炎が燃えている。炎が叫んでいる。炎が踊っている。

それはまるで激しいワルツのように。激しく、苦しくもがくように。

その光景を、俺たちはただ見守るしかなかった。

俺の気持ちは『達成感』を感じていた。

俺が『想像』をやめるとゆっくりと、しかし風が吹いているかのよう  
に炎が小さくなってゆく。

そして完全に火が消えると、代わりにでてきたものは『黒いもの』  
と煙だった。

すべて黒く炭になったかのように、焼死体特有の悪臭が漂ってきた。  
しかし俺はそれを気にせず、両手に持っている剣に付いている血を  
払った。

そして赤い液体が無いことを確認すると、両腕を交差して鞘に戻し  
た。

息を吐き、一言。

「どうやら、『賭け』に勝ったようだな。」

その言葉を吐き捨て、城門がある方向へ振り向いた。

そこに居たのは、口をポカーンと開けている驚愕のカム。

「……カムさん、カムさん。大丈夫ですか？」

「……うえっ！！！！！」

え？え？て、敵はどうなったの？

ていうかシャン君！？そんな魔法、どこで知ったの！？」

いきなりの呼びかけに魂が戻ってきたのか、辺りを見渡したあと俺に向き肩を掴みだした。

「か、カムさん。落ち着いて下さい。手に力が入りすぎです。

……とりあえず敵は倒しました。

それと、これは俺がなんとなく出した魔法です。なんとなく考えたものです。」

カムの興奮を落ち着かせて説明した。しかし俺の答えでまたさらに驚いたようだ。

俺の体の中から出てきた『何か』、それはたぶん『魔力』なのだろう。

ただ想像しただけでこの威力。規格外にもほどがあるだろう。

しかし今回は緊急事態。さらに初めて使ったのだからしかたないだろう。



||  
||  
||  
||

この世のものとは思えないほどの『力』

この世のものとは思えないほどの『魔力』

これら二つの存在は、唯ひとりである彼のみ持つ

さあ、この『意味』はどういうことか

考えるだけで笑えることだろう

さて、先ほど『踊った』ことだろう

続いて、『歌って』楽しもうか

『殺』という概念 『異』という存在……後編（後書き）

おつかれさまでした。

予告通り、近日中に出すことができました。  
よかったよかった。

二つ目も覚醒しました。させました。

まあ強引なのですが、こうでもしないと話が進まませんでした。しかたない。

3つ目はいつにしようか考え中です。  
候補はあるのですがね。楽しみです。

またもやの前後編。

そして後編での長文。

まさかここまで長くなるとは思いませんでした。

これまでの平均が約3600文字。

短いものは1500台、長いもので5000台でした。

しかし今回は6を超えての7000台。

もうここまで書けたから、少しくらい休んでもいいですよね……？  
現実はそのなに甘くありませんが。

さて、バトルシーンでシャンが現実ではありえない行動を起こしました。

何なんですか『敵を斬りながら空中をとぶ』って。

一応原理らしきものは書きましたが、物理的に無理に近いでしょうね。

まあそこは『身体能力が数倍上がった』という理由で。  
お願いします。本当に。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたら、らご報告ください。  
できるだけ早く修正します。

シヤンの武器は何にしようか悩んでいます。

ありがとうございました。

城の中はダンジョンみたいに複雑ではない（前書き）

いらっしやいませ。

今更なのですが、なかなか話が進みません。  
長く長くやってしまうのは、俺の性<sup>さが</sup>でしょうね。

では、どうぞ。

4 / 6 一部修正しました。

区切りを加えました。 4 / 30

城の中はダンジョンみたいに複雑ではない

外から見た城には一つの光が無かった。

つまり灯りとなる蠟燭ろうそくの灯火が点いていないということだ。

なので、

「……うわ、暗い。真っ暗じゃん。」

こんなことになるのは当たり前だ。自覚はしていたが。

「やっぱり蠟燭の火が点いていないからかな。」

けど、普通は点いているはずなんだけどなあ……？」

カムが右隣で呟いていた。

さて今俺たちが居る場所は、城に入っすぐの通路である。

元の世界のゲームにある『RPG』では、魔界の城で光は点いていないのに通路では明るいという設定があった。

それはプレイヤーが進みやすくさせるためにそうしたのだろう。

だがこの世界ではそれはありえない、ということになる。

なので自分で『灯り』を作らなければならないのだ。

（さてと、ここで光をたよりにしながら進むのだけど……魔法しかないか？

ならさっきのやり方でやってみるか。）

先ほどの戦いで使った方法で火を出してみることにした。

「カムさん、少し時間をください。」

確認は取ったが返答は聞かない。何故ならもう行<sup>おこな</sup>っているから。

右手を闇へ向けて、目を瞑<sup>つむ</sup>る。

『想像』するのは一つの赤い火玉。

どこその幽霊がいるかのような、手のひらに乗るくらいの大きさ。

それを『出してみる』

体内の魔力が出て行く感覚がまたした。

同時に手のひらから熱いものが感じた。

それを確認して目を開けると、『想像』通りの赤い火玉があった。

「……シャン君、君は本当に魔法を初めて使うのかい？」

疑いを多く含んだ声のカムから出てきた。

それもそうだろう。一回目があれほどの火力で、二回目で制御でき

ているのである。

これは天才と言うべきか、化け物と言うべきか。

俺としては『化け物』と言うのが当てはまると思っているが。

「ええ、確かに初めてですね。

図書館で『魔法』のことについても詳しく書かれている本がありませんでしたから。

なので、咄嗟<sup>とっさ</sup>に魔法の出し方を考えて、やってみただけです。

まさか実際に出来るとは思いませんでしたけどね。」

カムの方向へ顔を向けずに、出した火玉を自分の目の前へ浮かべた。

彼は一体どんな表情をしているのだろうか。

たぶん、『畏怖』であろう。目の前の光景にまだ信じていないのだから。

心の中で苦笑しながら、黒き陰から青白い陽へ写し出された通路を歩き始めた。

進んでいくと通路が二つに分かれた場所へ着いた。

俺はカムへ振り向いて、

「カムさん、ここからどうしますか？」

二人で一つの道を行くか、分かれて行くか。」

選択肢は二つ。

二人一緒に一つの道へ行って探索するか。

一人一つの道を辿って別々に探索するか。

それを迫られたカムは難しい表情を表した。

「……効率的には後のほうがいいけど、危険では大きいよね。

けど、前のほうだと危険度は低いけど左右の道を確認しなきゃいけないから時間がかかる。

……うん、どうしようか。シャン君が決めてくれない？」

なんともダメな大人の答えかたであつた。

俺はその答えに心の中でため息をつき、仕方なく言った。

「……そうですね。どうしましうかね。

やはり時間的にも厳しいですから二手に分かれましょうか。

カムさんは魔法を使えるようですし、灯りの問題はないでしょう？」

そう確認をとると、カムから頷きが返ってきた。

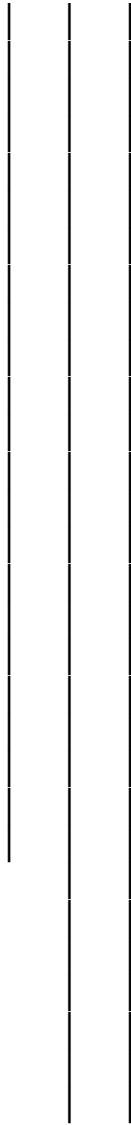
「では俺は右へ行くので、カムさんは左をお願いします。」

その言葉でも頷きが出て、共に歩き始めた。

「生きてまた会おう、シャン君。」

「ええ、当たり前です。カムさん。」

互いの姿を見ずに俺たち二人は逆の方向へ進んだ。



俺が選んだ道には多くの扉があった。

それらを開けると、空室か血だらけに染まった部屋であった。

この様子から、『影』はここまで手を広げていたことになる。

「あいつら、何故ここまでしなければならんだ……？」

そして、何が狙いなんだ？」

閑静な空気を壊さないように小声で呟き、右側のまたひとつの扉へ手をかける。

『……………』

小さな音。

それはそれは下手したら気付かないほどに小さい。普通の人であればまったく気にしなかっただろうほど。

だが今の俺では聴力が上がっているために聞こえた。

この中に何かいる。もう少し耳をすませてみる。

『……………つ、……………ハア、ハア』

喉を鳴らす音と、苦しく息をきっている呼吸音。

間違いなく誰がいる。それも、生きている。

中の者が『影』で無いことを願いながら、火玉を消して俺は思いつきりに且つ静かに扉を開けた。

やはりというか、その部屋は暗かった。

寝台・化粧台やらの家具が全て黒く染まっており、何処から何処までが影になっているのかわからないほどに立っていた。

そして唯一、僅かながらにも動いている影が立っていることが見えた。

「ハア、ハア。

お前たちは何故、ここまでして、殺すのだ……？」

それは弱っていることが分かっているながらも敵意をむき出している男の声。

その声に俺は聞き覚えがあった。

たしかあの時は、『一つ一つの言葉に重みを感じさせるような男の声』であつたはず。

ならば、この声の持ち主は

「……そのことについては、俺も分かりません。

あなたは知っていますか？この城の中だけでなく、街中も死体で溢れかえっていることを。」

「……薄々《うすうす》は分かっていた。どの家にも明かりがついていないのだからな。

それに、まさかそんなに若い者まで人を殺めるとはな。

さらに君の声には聞き覚えがあるのだが、気のせいかね？」

まるで『ここで君に殺されていることが分かっている』とでも言うような雰囲気です。返って来た。

しかし、俺はそうしない。

「俺もあなたの声に覚えがありますよ。それも、今日のあの時と同じような声で。」

……そろそろこんな茶番を終わらせましょうか。」

「……私も同じ意見だ。」

今の私は抵抗する力も無い。トドメをさせ、若者。」

そう言いきると同時に手元に持っていたのだろうか、剣が床に落とされた音が聞こえた。

なんだか変な方向へ向いているような気がする。その方向を転換するために俺は話しかける。

「……俺が言いたいのは、これも含めての茶番を終わらせようと言っているのですが。」

それに、ここで死なれたら俺も困るので殺しませんよ。」

「なるほど、私を人質にするというのか。」

それは勝手にしてくれ。今の私は無抵抗で受け入れよう。」

まだ理解してくれていない。この人は面倒くさいなあ。

「……そろそろ気付いてくれませんか？泣きたくなりますよ。」

俺は今の状況を打破するためにあなたの協力が必要なのです。

だから俺は殺しもしないし人質にもしない。分かってくれますか？」

固めた口調で話すことが面倒になったので、砕けたように言った。

「……では君は『あいつら』の仲間ではないのか……？」

君は一体、何者なのだ？」

どうやら彼の思っていた者ではないことが分かりだし、疑惑の声がかかった。

その問いに俺はちゃんと答える。

「俺はあなたと出会いましたよ。『軍の闘技場』で。」

この言葉で彼は思い出しかのように声を少し大きく発した。

「まさか……シャン君、なのか？」

「……名答です。さあ、武器を持って立ちあがって下さい。」

……『ナヴァジス・克蘭デイス現国王』。』

火玉を灯すと、怪我を負っている国王が呆然の表情で俺を見ていた。

~~~~~

「……なるほど、そのような状況になっているのか。」

とりあえずナヴァジスさん（そう呼べって言われた）にここまで来たときの説明をした。

俺の能力とか、俺が魔法初挑戦とか、デカイ炎の魔法を出したとかは嘘について話していない。

今俺たちは同じ部屋におり、椅子に腰かけているナヴァジスさんの傷が癒えるのを立って待っていた。

幸いナヴァジスさんの魔力は残っているらしく、治療魔法を施すことができていた。

「だが『あいつら』の目的は分からないままか……。

本当に『あいつら』は何者なのだ？」

答える者がここに居ないかのように空へ呟くが、その答えは俺が知っている。

「……『あいつら』の姿ですが、俺は一度だけ見たことがあります。

俺が言ったことに信じられないかのように、勢いよく俺に顔を向けてきた。

「君は見たことがあると言うのか！？『あいつら』は一体何者なのだ！？」

肩を掴まれたので俺も必然的にナヴァジスさんへ向かなければならなくなつた。

「落ち着いてください、傷に響きますよ。」

……俺が『あいつら』を見たのはつい最近、昨日のことです。」

そんな前置きをして、昨日起こったことを話した。

これも、『やつ』の登場とかリユナのこととかも隠して言った。

「……やはり『あの者』の策略か。」

苦虫を潰したかのような表情を表へ浮かべながら、怨むかのようなにがむし声を出した。

その言葉の中にひとつ気になった単語が聞こえた。

「ナヴァジスさん、その『あの者』ってというのは何ですか？」

俺が聞いてみると、傷を治しているにも関わらずまだ不愉快な顔をしながら答えた。

「……あの者というのは、『クレスラン・ティファイラル』のことだ。」

大臣の中でも冷酷非道と言われているほどに残虐なことを平気な顔で行うものだ。

しかし、知能は大臣の中でも随一であるのだ。なのでやめさせようにもできないのだ。」

最後にため息をついて、それ以上は説明しなかった。

ナヴァジスさんの言葉の中には、俺が見て感じたものが含まれていた。

ならば、あの眼鏡の男はその『クレスラン・ティファイラル』なのだろう。

そして、リュナの父親であることも。

俺が奥歯を噛み砕かんばかりに力を加えていると、続いて声がかかった。

「……君が言った『あの者』の手下がこの街や城を血だらけにしているというのなら、

なおさら何をやろうとしているのか私には分からん。」

再度ため息をついて、大きな傷が治ったのか小さな傷を確認し始めた。

「……俺もわかりません。」

大臣の人を殺すのならある程度は分かりますが、国民までも殺すとなると理解ができません。」

同意見な言葉を呟きやきながら、両腰に携帯している剣を抜いた。

両方とも先ほどの戦闘で刃こぼれが目立っていて、あと数回斬ると折れてしましそうにボロボロであった。

このような状態なら、捨てる方がマシであろう。

そう判断し、両手にある剣を寝台の上へ横たえた。

「ん？ シャン君、剣をそこに置いてどうしたのだ？」

どうやら俺の行動が怪しかったのか、ナヴァジスさんが訊ねてきた。^{たず}

「いえ、俺がここまで使ってきた剣がもうダメになっていたのだからここに置こうかと。」

その答えに不安が出てきたのか、また聞いてきた。

「その剣を置くとしたら、これからはどうやって敵を倒すというのだ？」

当然の疑問。それに俺は淡々《たんたん》と答える。

「その敵から武器を奪って、それで戦いますよ。」

まあ奪うまで素手でやらなきゃいけませんわが。」

予想内の答えだったのか、彼はなにやら呟き始めた。

「……やはりそのようにいくか。できれば私から剣を与えたいがしかし………」

……たしかこの部屋の何処かに隠していたはず。」

なにか思いついたのか化粧台のほうへ歩きはじめ、何やら動かし始めた。

そんなナヴァジスさんの奇怪な行動に首を傾け、腰に着けている鞘も置いた。

「……たしかここに。お、あったあった。

おいシャン君、代わりと言っては何だがこれを使ってみてはどうかね？」

お目当てのものが見つかったのか、俺に声をかけて手にあるものを見せつけてきた。

ナヴァジスさんが持っているものは、鞘に納められていた一振りの剣であった。

それを左手で受け取り、ナックルガードがついている柄を握って抜いてみた。

刃はやや細めで刃渡りは80cmほどあり、刀身には一筋の彫り込みが施されていた。

重量は思ったより軽く、2・3回素振りをして問題なかった。

これは確か、『ブロードソード』と言われるものではないか？

ゲームで比較的初めの方で手に入れることができる剣だ。

ちなみに、俺がここまで使ってきた剣は『グラディウス』と言われ

るものだ。

これは短剣に分類されるのだが、今回の剣の刃渡りは約70cmある。

つまり、『ブロードソード』とはあまり変わらないというのが俺の感想だ。

「その剣は護身用の武器でね、各部屋にひとつずつ隠されているのだ。」

何やら自慢気に話しかけてくるが、俺はそれを無視して鞘へ戻した。

「ナヴァジスさん、このような剣をいただいてありがとうございます。」

怪我のほうは治りましたか？ダメならまだ待ちますが。」

自慢話を続けられるのは面倒なので捲し立てながら遮った。

「ん、まあある程度は大丈夫だ。なんとかいけるだろう。」

何やら残念な様子を醸し出しながら席を立った。

「ではそろそろ決着をつけなければいけませんね。」

「もちろん。あの者の策略どおりにさせはせん。」

互いに互いを鼓舞しながら扉へと向かい、その場を後にした。

明日を迎えるように戦う

しかし、それを成すにはまだ時間が掛かる

そのことを、彼らは知らない

誰が『苦しむ』ことさえ分からず

城の中はダンジョンみたいに複雑ではない（後書き）

おつかれさまでした。

ナヴァジスさんの登場です。これで道案内は大丈夫ですね。まあほかにもやってもらうことはありますが、それは後ほど。大変だ。

これを書いている中で気付きましたが、6話からまだ一日しか経っていません。

長い。これは流石に長すぎる。

24時間がこんなに長いといろんなことができてしまいますね。ちなみにこの話で午後10時です。

武器を変えました。しかしまだ変えます。

グラディウスからブロードソードへと。

下記に武器の説明をしますので、読み飛ばしてもいいですよ。

『グラディウス』

この剣は西洋の両刃の短剣であり、切るより突くほうに使われていました。

しかしこの世界では切るほうも使えるように鋭くされています。

なので攻撃方法が二つできるようになりました。

『ブロードソード』

この剣は片手用にしては少し長い両刃の剣です。

手を保護するナックルガードが柄に着いているものが多いですね。

この世界でもそれを採用しています。

この剣は主要武器としてあまり使われていなく、19世紀まで騎兵

の補助武器として使われていました。

そしてこの世界でも同じような扱い方で護身用になっています。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

これから大変だなあ。主に現実で。

ありがとうございました。

新たな影（前書き）

いらっしやいませ。

案がなかなか思いつかず、また時間もなかったので遅れてしまいました。

なので中身はあまり期待はしないほうがいいと思います。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

新たな影

暗く染まった通路の中にひとつだけ温かい灯火が浮かんでる。

その灯火を頼りに俺とナヴァジスさんは次々と前へ進んでいく。

辺りは暗闇を表現しているかのように静寂であり、どれだけ耳を澄ませても何一つ音がしなかった。

「……シャン君、これはどうなっているのだ……？」

「……俺に聞かないでください。分からないんですから。」

俺たちは共通の疑問が頭の中に浮かんでいた。

ナヴァジスさんには説明していないが、ここまで来て俺が出した音しか聞こえていない。

つまり、『敵が出てこない』ということだ。

ナヴァジスさんとしては『自分があの部屋に籠って』から。

俺としては『自分が城に入って』から。

階段を登っても登っても『影』は一人の出でこない。

このことは安心をすると同時に、警戒度が高まるのは当たり前。周辺を見渡しながらの移動。

しかしこれはある意味チャンスである。

「……敵が出てきませんが、今のうちに進めるだけに進んでおきましょう。」

「……うむ、そうだな。次を右に曲がると私の部屋へ着く。」

ナヴァジスさんの案内があつて俺たちはここまで進んでいる。本人によると、自分の部屋は7階にあるそうだ。つまり、7階まで来れて敵が一切出てきてないことを示す。

そしてその階ごとに進むたびに、俺は得体の知れない恐怖と不安を感じていた。

上には『何か』がいる。上で『何か』が行われている。

考えたくは無いが何故か強く思ってしまう。

そして今、7階へとたどり着いた時には『それら』は無くなった。

代わりに出てきたものは、『悲しい諦め』。

ここに来た。ここまで来た。逃げ場はもう無い。行くか、死ぬか。

その思いで、ついにナヴァジスさんの部屋の前へとたどり着いた。

「この部屋に敵がいなかったら、ここで休憩を入れよう。ずっと警戒で居続けると身が持たないからな。」

優しく俺に言って、自室の扉へ近づいた。

それを、俺は見ていた。いや、見ながら『聞いて』いた。

僅かに聞こえる呼吸音。液体が滴る音。わす したた

そんな音が耳に聞こえていた。ナヴァジスさんが気付かないほどの小さな音。

取っ手に手が乗せられる。

それらの音が分からなかった。何故中からそんな音が聞こえてくるのか。

中で一体何が起きているのか。

その考えが頭の中で浮かび上がったときには、遅かった。

扉が開かれ、部屋の『様子』が視界に広がった。

一人の『影』が、一人の『人物』を、刺していた。

被害者は

「……父上……」

『シャルダ元国王』だった。

そして、容疑者は

「……何で、お前が……」

一人の影。

否 兵士

「……いっしょ……？」

カム・トランス

部屋中を沈黙で占められているなか、声を発したのは

「あつ、シャン君。『遅かったね』」

カムが何気なく言った言葉。その言葉の中で引っかかりを覚える単語が含まれていた。

それを考える前に現状に理解ができなかった。立った状態で心臓部分に剣を生やしている元国王。その後ろで俺に返り血を浴びた顔を向けるカム。その顔には笑顔が張り付いており、一層理解しがたいことになっていた。

何故お前はここに居る？お前は俺とは反対方向の道へ行つたはずだ。ここに居ることはおかしい。そもそもお前はこの部屋を知らないはずだ。『軍』は基本的に城内へは入らない。特に王室には立ち入り禁止のはず。入れるとしたら、『軍』の責任者である大臣か兵長かなのでお前がここを知っていることはありえないはず。

何故お前は元国王に剣を刺している？お前はこの国に忠誠を誓っているはずだ。元国王を殺していることはおかしい。しかも元国王が闘技場へきたのはあのときが初めてのはずだ。何の目的で殺した？

それらを問い質そうと口を開きかけたその時、

「シャン君、せめて返事くらいしてよ。ここまで生きた甲斐かいが無くなるじゃないか。」

俺の様子に不満を持ったように言いながら、剣に刺している『人物』

を俺たちの前へ放り捨てた。

剣から抜ける音と同時にこちらへと飛んでくる元国王の後を追うように、傷口から出ている血が放物線を描いていた。

その光景を俺たち二人はただ見ていることしか出来なかった。意外な人物の登場。予想外の死者。予測不可能な言動。ただただそれらを視界に映して声と音を聞くことしか術は無かった。

そして音を立てて俺たちの前へ出された『亡骸』。顔には生気が無くなり、水色の服装から赤い色がゆっくりと四方八方へ広がってゆく。

それを冷静に見ている俺を他所に、ナヴァジスさんは『亡骸』の上体を起こして声を掛けていた。

「父上？大丈夫ですか？聞こえているなら返事をしてください！」

最初はいつも通りの雰囲気からゆっくりと声を荒げていった。

その声に固まっていた体が動かせるようになった俺は、元国王の下へ行き首筋の脈を探した。

そして分かったことは、『脈はすでに無くなっていた』。亡骸へとなっているため当たり前のことである。

「……ナヴァジスさん、もう声を掛けないでください。返事はもう二度と返ってきませんから。」

彼にとっての絶望的な言葉、俺はそれをただ冷たく言った。この亡

骸と同じような温度で。

そして俺の言葉に理解したのか、父上『であつた』亡骸をやさしく横たえた。突如の別れを惜しむかのようにゆっくりと。

「ねえシャンくん。そっちの用事はもう終わった？」

空気を壊した言葉。向けられたのは俺。しかし苛立ちはまったく湧かなかった。何故だろうか？自分にも分からない。

すると、その言葉に答えるかのようにナヴァジスさんが立ち上がってカムの方へ向いた。

「……私の、父上を殺したのは……貴様が……？」

その声は冷たく、しかし答え次第で感情が爆発してしまうかもしれない雰囲気ただよが漂っていた。

はたして、その答えは

「僕がここにいたのですから、答えは自然と出てくるはずです。なら、分かりますよね？」

僕が、シャヌルダ元国王を殺した。たったそれだけ。」

「……そうか。貴様が殺したのか……。」

突如、轟音とともにカムの姿は紅炎こうえんによって見えなくなった。

「うあああああああ！！！！！！！！」

その炎の中からカムの悲鳴が響いてきた。

放ったのは俺の隣にいるナヴァジスさん。掌^{てのひら}を彼の方へ向けて魔法を放った。

表情と瞳は怒りと憎しみで煮え滾^{たぎ}っていた。生まれつきに持ってい

へきが る碧眼である緑青と、目前で激しく燃え上がる炎の紅。傍らにいて少ししか見えないはずなのに、二つの色と二つの『色』という4色が窺うことが出来た。そして、傍らにいる俺でさえ恐怖を感じている。

そして目前で敵討ちを成し遂げた本人は、未だに納得できない表情でいた。

しかし、今日の前で轟轟と燃え盛る炎と轟轟と叫び続けているカム。ここでの回避は不可能と言えるだろう。

「があああああああああ！！！！！！！！」

……………もう喉がガラガラになりそうだよ。『もういいかな？』
その問いは誰に聞いているのか、おそらく俺たちに言っているのだろう。だが、その問いは先ほどまでの悲鳴ではなく、『演技に飽きた』かのような言い草であった。

答える時間は無かった。否、もらえなかった。何故なら、彼を包んでいたはずの炎が二つに断たれたからだ。横に、真つ二つに。

断たれた炎は斬撃によってか、瞬間に消え去り彼の姿を現した。

その彼の表情は『笑み』。口の両端を限界以上に引き上げていた。まさに狂気によって染められた笑みを表しながら剣を握っている。そしてその姿には焼けた跡はおろか、煤がひとつも見当たらなかった。

まるで、『もとから炎を受けてない』ように立っていた。

「あゝ熱かった。無駄に汗が出そうだった。」

視線は俺に向けながら呟いていた。しかし声量は部屋に響くくらい
の大きさで。

「まあ、『さっきのジジイとは比べ物にはならない』けどね。」

また、笑みを深くした。

「……貴様あああああ！！！！！」

隣にいたナヴァジスさんが叫び始め、剣を抜いてカムへ向かって走り出した。

走りながら炎球の牽制。しかしそれらは的確にカムへ向かって飛んでいた。その数は十数個、どれもこれも激しく燃え上げながら火の粉を飛ばしていた。

それに対し、カムは右手に持っている剣で『消した』。まるで邪魔ものである蠅はえを落とすかのように払いながら。

しかし数が多いためかカムは炎球を落とすことに専念しているかのように見えた。その間にもナヴァジスは距離を詰めてゆき、剣を縦に振り落とした。

結果としては――防ふせがれた。カムの周りを見ると、炎球は全て無くなっておりナヴァジス一人だけであつた。

ナヴァジスは怒りにまかせて幾度も剣を薙いだ。しかし相手であるカムは笑みを崩さぬまま受け止めたり、受け流したり、避けたりしていた。言っておくが、ナヴァジスの剣筋は全てカムへ向かっていた。本来なら全てカムに傷を与えているはずの攻撃である。しかも、どれも致命傷になるような場所を狙って。しかしながらカムはそれらを全て避ける。しかも極めつきに薙いでいる剣を全て目で追っているのだ。

そのことをナヴァジスは気付いていない。相手にまったく傷をつけられないことに苛立ちを顔に表していた。一介の兵士なら既に致命傷を負っているはずの攻撃をしている。しかし目の前の者は兵士のはずなのに易々と防いでる。目の前に起きている矛盾が理解できない理由で舌打ちが出ていた。

その舌打ちがきっかけで、立場が逆転した。

音が聞こえたと同時にカムは前へ踏み切った。彼がナヴァジスの懐へ入ると、剣同士を勢いよく打ちあわせた。その衝撃に苦悶の表情を浮かべたナヴァジスを知らないでか、動けなくなった彼の体を左手で『投げた』。まるで背負い投げのように軽々と。

二回目の衝撃、背中からきたことに理解不能の表情と息が吐き出された。先ほど自分は何をされたのか分からないでいた。しかし目の前にいる敵の姿を捉えたと同時にまた憎悪の感情が湧き出てきた。今一度右手にある剣を握りしめて立ち上がるうとしていた。

しかしカムはそれをさせなかった。ナヴァジスの首へ剣先を向けて行動を封じた。そのときの表情もまた狂気の笑みだった。得物を捉えた、得物の命は自分の掌の上に転がっている、と。

そして、彼は問う。

「ナヴァジス現国王は、まだ生きたいですか？」と。

その答えは早く返ってきた。

「当たり前のことを。貴様を殺すまでだ。」

答えが面白くなかったのか笑みを消して、

「そうですか。では『さようなら』。」

呆気^{あっけな}無く首へ剣を入れた。肉が斬れる音と同時に。

全ては狂氣によつて殺された

その行為が自身の『苦しみ』を増やすのみの行為だとしても

それを知つてでも、『影』は『苦しみ』続ける

『泣く』ことすらできない狂氣に染まりながら

新たな影（後書き）

おつかれさまでした。

一話に二人も死んでしまうことはすごく悩みました。こんなに易々と死なせていいものか、と。特にシャヌルダは2回目で死んでしまいました。けどこの章が終わったらずい少活動（？）があるかもしれません。詳細は下記にあります。

裏切り者、カム・トラニス。これも悩みました。けど裏切り者もありじゃね？と友人からアドヴァイスをいただきましたので採用しました。この子もまだ話がありますので。

この章も終盤へ近づいてまいりました。予定では3話ですが、予想外に文量が多くなって前後編となってしまうかもしれません。またお話が終わっても番外編を作ろうと思っています。この番外編は主人公以外の視点――リユナやシャヌルダから見た話です。敵味方関係なく書こうかなと思っていますので。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

そろそろ人物紹介のページを作らないといけませんね。

ありがとうございました。

殺戮者（前書き）

いらっしゃいませ。

一週間空けてしまい申し訳ございません。
戦闘描写がなかなか書けないでいました。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

殺戮者

目の前に広がる惨劇。それは、血に染まり伏している二人の王と、瞳を狂気という赤黒い色に染めて立っている元兵士。

誰がこの状況を考え着くことが出来たのだろうか。カムがこの場に居ることから狂った。俺も、カムも、二人の王も。この場にいる者全員がまるで歯車が軋み歪み始めたかのように。

そして、今立っている者は俺とカムのみ。自らの血を出しているものは二人の王のみ。

何故王が死んでいる？何故お前が殺した？

そして、お前は一体誰だ？

「……さて、邪魔者も居なくなったことだし、やっとシャン君と話せるね。」

笑顔をこちらへ向け、人を殺していないかのような言い草を放った。

「ねえシャン君、何で君は『君』なのかな？」

突如問われた言葉。この場にふさわしくない言葉が俺に向かった。

「……質問の意図が分からないので、答える言葉がありませんが……」

声に恐怖を含まないように静かに答える。その言葉を聞いたカムは

また笑いながら、

「あはははっ、そうだったね。いきなりこんなことを言われても困るよね。」

だけど、僕が聞きたいことはそれ以外にはないんだ。何で君は『君』であり、僕は『僕』なのかってことを。何で君は僕より年下なのに強いのか。何で僕は君より年上なのに弱いのか。

ずっと考えていて、君にも聞いたのだけど、答えは『僕たちと一緒に強くなるため』。理解は出来たけど納得はできなかった。

だから僕はまた考えた。君が『得手を伸ばす』という方針は間違っていない。だけど君には勝てない。それならば、『君が得意ではないもの』を鍛えればいいのではないかってね。だから僕はこんなことをしているんだ。」

そこまで言つと、一度息をついた。その様子を俺はまだ見ているしかできなかった。

確かに個人による思想の差は分かっているうえで話したことだし。しかし、『俺が不得手であるもの』を伸ばすことは理解に乏しい。

「何故、カムさんはそこまでやる必要があるのですか？」

俺が問うと、彼は当然のように

「……ただ純粹に、『君に負けたくない』からだよ。前にも言ったよね？『大人としての誇りが碎かれる』って。だから僕だけでも『君に勝てるもの』をしようと思ったんだ。その結果がこれ。」

『協力者』がいて、僕は『影』となって、人を多く殺してきた。僕は君に『人を殺した数』で勝ったんだ。

だけど君はとんでもないものを持っていた。一瞬にして人を灰へと、炭へと変えた力。それを見た僕は諦めかけたんだ。だけどまだ『時間』はある。

だから僕は殺した。『現王』と『元王』を。殺した人の地位の高さで僕は勝っている。これ以上の人はこの国にはいない。だから僕はともうれしかった。」

話しているうちに彼の笑みが深くなってゆき、ついには瞳から『理性』がなくなったかのように見え始めた。

「この勝負、僕の勝ちと確定したんだ。だから、あとは邪魔者を消せばいいだけ。

あの『協力者』と、君だ。」

言い切る瞬間、殺気を感じたと同時に向かってきた。

俺はすぐさま腰につけていた剣を抜いて構えた。

そして剣同士がかち合い、対峙した瞬間に『違和感』を感じた。

「カムさん、あなた……」

「さすがシャン君だね。」

そうだよ。今までは手加減していたんだ。君をあの時には殺すわけにもいかなかったからね。だから今から、本気で『殺す気』でいくから、抵抗してね。」

言い切ると同時に左手で腹部を下から抉^{えぐ}るように殴りかかってきた。それを横目で見ながら左へ避けて流した。反撃とばかりに右足で殴ってきた腕を蹴り、しかし勢いは止めずに彼の腹部へと叩きこんだ。

そうなる、当然カムの体は後方へ行き間合いが開く。しかし表情は未だに笑みを崩さないでいた。

「いや、やっぱりすごいね！少し本気を出したのに呆気無く受け止められて、2撃目の攻撃も避けられたし、しかも蹴りをもらうとは思わなかったよ！！」

なんとも、なんとも楽しそう且つ嬉しそうに笑顔を振りまきながら言っている。攻撃を食らったはずの腹部と左手に一切手をつけずに、先ほどと同様の姿で立っていた。

「だけどこれだけじゃあないよね？まだまだあるよね？期待してもいいよね？どこまでできるか望みを高くしてもいいよね？どこまで僕の攻撃を防ぐことができるのかな？どこまで僕を攻めることができるのかな？どこまで君を追い詰めることができるのかな？どこまで僕を追い詰めることができるのかな？」

知りたい。全部知りたい。だけど全部、やってみないとわからないことばかりだよ？だったら全てやってみようよ！僕は君にどこまで出来るのかやってみたいんだ！君は僕にどこまで攻められるか感じたいんだ！

だからこれからは手加減は入らない。その代わりに僕も手加減をしない。僕と君の限界がどこにあるのか知りたい、感じたい。

じゃあ、『殺すよ』。

『彼の者を焼け、ファイア fire・ボール ball』！！！！』

言い切ると同時にいくつかの火球がこちらへと向かってきた。

俺はひとつひとつの火の玉の位置を見ながら右手の剣で防いでゆく。同時に左手へ魔力を寄せ集めるように力を入れた。

一つ、二つと火球が向かう方向をずらすことしかできない俺に対し、カムはその光景を面白い喜劇を見ているかのような様子で見ていた。

「本当にすごいねシャン君は。本来なら高速で飛ぶ火の玉を捉えるのは難しいのに、まさかひとつひとつを見ながら受け流すとはね。君は本当に何者なんだろうね？まあどうでもいいけどさ。」

じゃあ次は、『半分』本気を出すよ。」

火球による攻撃が収まり、代わりにカム自身が剣を振るってきた。

不意を食らいながらもその剣の攻撃を受け止める。そして左手に集めていた魔力の『形』を創造した。

それは鋭利な刃を持つもの。どこまでも鋭く、そして『冷たい』。

気体から液体、そして固体へと状態変化してゆき、一つできると二つも出来た、そして形を成してゆき、カムへ放った。

しかしカムは俺の剣から離れると同時にその氷の小剣を『消した』。音もせず、まるで元から無かったかのように消えていった。

「……その剣は、魔法を消すのか……？」

呟く言葉に彼は笑みを深くして得物の剣へ目を向けた。

「ご名答だよ、シャン君。この剣は魔法を無効化する力を持つんだ。だから二人の王の魔法もこれで防いでいたって訳だよ。」

そしてこの剣はね、僕が『任務』をしている中で奪ったものなんだ。本来の持ち主はすぐ弱くてさ、まったく相手にもならなかったよ。だけどこれを手に入れたからどうでもいいんだけどね。だってその人は『僕が殺した』のだからね。僕がこの剣を取った時に何か言いたそうな顔だったけど、もうじき死ぬのだから言わせなかったけどね。」

思い出し笑いをしているカムを見ながらも、構えは一切とかなかった。

「ああごめんごめん。こんな話を聞いても面白くないよね。あのときの顔は面白かったよ。絶望した顔は笑ってしまうほど酷ひどかったよ。君にも見せたかったほどにね。」

顔がこちらへと戻った瞬間に攻撃が再開された。

縦に、横に、斜めへと剣を走らせ、またある時はフェイントをして別の場所から攻撃してくる。

これらの攻撃方法はあの闘技場では一度も見たことがない。だとすると、手加減をしていたことは頷ける。だが、俺はそれらを受け止め、受け流し、避けていった。

「こんな攻められ方は初めてのはずなのになんで防ぐことができてるの?」

未だ攻撃の手を休めずに、カムは呑氣のんきに聞いてきた。

「手加減をしていたのはあなただけでない、ということです。」

剣を左へはじき返すと、攻防を一転させる。攻を俺へ、防を彼へ。

縦・横・斜め・右・左・上・下・直線・曲線・フェイントと、カム以上の攻撃方法を行う。

そうなると思の表情も一転し、笑みから苦しみの顔へと変化していった。

「まさか、シャン君も手加減をしていたとは、ね。うおっと！

こりゃあ大変だ。これじゃあ負けちゃうなあっと！！」

確かに、俺の斬撃は彼に傷を作りだし、腕やら胸やらと切り傷が出来ていった。

それらを確認したのか、カムは一度俺と距離を置いた。

「ハア、ハア、少しずつ喰らってきちゃったなあ。

これなら本気じゃなくて、『限界』を出せそうだね。」

「……それは、どういう事ですか……？」

俺の問いに笑みを浮かべながら、

「どうということもない、ただそのままの意味だよ。」

僕が出すことができる『限界』を、君になら出せると思ったただけだよ。今までの相手じゃあ本気は出しても『限界』は一切出さずに殺してきたからさ、すぐく退屈していたんだよ。だけど今日、この場で君を相手に出すことができる。これは僕にとっては嬉しいことだよ。君にとってはどう思ふのかな？

時間を作っちゃったね。じゃあそろそろいくよ？」

笑顔が消え、一言呟いた。

「『many・fire・ball!!!』」
 ミニ ファイア ボール

その瞬間、目前には火球によって出来た『壁』が飛んできた。

「っ、ふざけるなよ!!」

対抗して俺も炎の壁を創造した。あちらは隙間があるが、こっちは一つもない一つの壁を立てた。

「油断は、禁物だよ。」

その炎の壁の中心から切り込みが入り、剣を振り切っていたカムが飛び出してきた。

想定した状況だったのでくさま剣を構えてカムの剣を受け止めた。そのままいくつかの連撃が互いに行われ、また距離を取った。

しかしカムは離れながらも火球を放ってきた。それらを受け流し、

あるいは避けたりした。

戦況は今まで通り。だがここからが違った。

火球による牽制は未だに続いており、放ちながらもこちらへ駆け出していた。

止まない火の玉に齷齪あくせくしながらもカムの行動に警戒していた俺は、放ってきた一つの火球を受け流しながら回転し、飛んでくるベクトルを逆方向へと変えてカムの元へと向かわせた。

そのカウンターは避けられ、右手に持っている剣を振り下ろし始めた。もちろんそのままやられるわけにもいかず受け止めた。

だがその攻撃も止まず、左手から火球が懐へと飛び出してきた。近距離んきよりからの射撃は想定外だったのですぐさま後ろへと飛んだ。

しかしその火球の射線は弧を描いてこちらへと向かってきた。まるで俺を狙って飛んでいるかのよう。

二度目の予想外な状況に焦りながら、飛んでくる火球をはじいた。そこに隙が出来たことを知らずに。

火球を飛ばしながらも再度駆けてくるカム。俺はそれに気付かずにいた。

そしてカムの存在を思い出したときには遅く、剣を振りかぶっている彼を見た。

「残念。」

それでも人を危め続ける

血を受けながら、『笑い』ながら

殺戮者（後書き）

おつかれさまでした。

なんだか戦闘がへたくそになってきました。もともと文才が皆無の自分にそれ以上無くすと、底しかみあたらなくなってしまいます。泣きたいです。

一応活動報告にも書きましたが、自分もまさか一週間も空けてしまうとは思いませんでした。決して逃げていません。時間が逃げてゆくのです。言い訳ですね。ごめんなさい。

実はまたもや前後編になるはずだったのですが、キリがいい場所を見つけたので区切りました。次の話も3分の1はできています。文量は保障できませんが。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

一話一話の量は4000以上と決めている自分がいます。

ありがとうございました。

現実の認識（前書き）

いらっしやいませ。

またもや遅れてしまいました。申し訳ありません。
文量は少し多い5000文字程度です。

では、どうぞ。

区切りを加えました。

4 / 30

現実の認識

「すごいねえ。あそこの一撃で殺すはずだったんだけどなあ」

気の抜ける声。部屋に響かせるほどの声量をだしながら、カムは目の前の俺を見ていた。

「そう易々と、やられて、たまるか。」

その声に覇気は無く、苦痛を感じている雰囲気を出していた。

縦の一撃。その攻撃に反射的に左へ体を傾けた。それによって左肩に剣が入り、また火球もいくつか腹部や足へと被弾させていた。

左肩から血が溢れ、腹部や足には火傷やけどを負った。これによって左の物理的攻撃は難しくなり、足もやられたため移動に支障をきたした。

「シャン君もそろそろ無理だと感じてきているでしょう？だから早く終わらせてよ。そして僕に勝たせてよ」

また俺に見せた『狂気的笑顔』。それは勝利を確信した笑顔であった。

だが、そうは問屋を下ろすわけにもいかない。

貴方は俺の目の前で二人を殺した。それも、そんなくだらない闘争心で殺した。

浅はか。実に浅薄せんぱくで幼稚な闘争心。それに二人は犠牲となったのか。

残念ながら君ほど笑うことができなかった。いや、どこが面白いのか意味不明だから笑う自体できない。

……いいだろう。お前のその『争い』とやらに答えてやる。

容赦は出来るか不安だな。

だから、これから、お前を『影』として見て、戦う。

「……お前の限界は分かった。だが、『俺の限界』を見てないのに、そんなことが言えるのか……」

フツ、笑える話だな。何を根拠に勝とうとしているのか。

言っただろう？『手加減をしていたのはあなただけでない』と。」

カムの表情が凍った。どうやら俺の様子の変化と安い挑発によって。

「じゃあ、俺もそろそろ『本気』を出してやろうか。」

そして俺は右手にある剣を『分裂』させた。

「……ん？シャン君って剣を二つに持ってたっけ？」

包み隠さずに訊ねてきた。当然だろう。目の前で一つだった剣が『二つに分かれて』いるのだから。

姿形は瓜二つ。右手に剣。左手にも剣。同じブロードソードが手に握られている。

「何を言っている、鞘^{さや}がひとつしかないのだが？」

両方の剣へ目を向けるとほんの少しの刃こぼれを見つけ、『修復』する。

じわり、じわりと欠けた刃が無くなってゆき、ついには一つの新品同然の剣となった。

同時に左肩の傷を魔力で防ぎ、出血を止めた。動かすことに支障が起きない程度に治す。

それを終わると片方ずつ剣を振り、同じ重さであることを確認した。

「こっちの準備は完了したぞ。そっちはそのままでもいいのか？」

俺の言葉掛けに気を戻したのか、呆けた顔を向けてきた。

「う、うん。君が本気を出してもらうことはこっちが嬉しいからね。

早く見せてよ。君が人を殺す攻め方を。」

彼の笑みを視界の中に入れながら、左の剣を前へ、右の剣を後方へ構えた。

左の剣先を彼へ、右の剣先を壁へ向けて。

そして、『宣告』する。

「まずは、半分からいくか。」

初撃は飛び掛りで左手の縦斬りから。ただただ単純にそうしただけの、小手調べの攻撃。

カムはそれを得物である魔法無効化の剣で受け止める。

しかしその『単純の攻撃』に合わないほどの、重く固く激しい剣撃

の音が響いた。

予想外の衝撃に無意識で舌打ちをし、お返しとして左手で火球を創り出す。

だが、シャンはそれに目もくれずに右手の剣の腹で腕を叩いた。

そうなると今まさに火球を放とうとしていた左腕は剣で叩かれて矛先をはずされ、火球は壁へと飛び燃える。

二度目の想定外。突如変わったシャンの戦法が恐ろしく激しい。となると先ほどの言葉に偽りはないということになる。考えながら結論にいたり、カムの表情にはまた笑みが浮かぶ。

しかしその笑みもすぐさま苦痛へと変化する。

空中へと放り出していた右足をカムの体へ、左足をカムの右腕へと掛けて後方へ宙返りをした。

その衝撃もシャンの体重による圧力と飛ぶ際にかける力が合わさり、カムも思わず片足を後ろへと下げて体を支えた。

胸部の疼きで顔を俯かせていたが、前方からの殺気にすぐさま面をおもてあげた。

目の前には火球――否、『炎球』が一球のみ飛んできていた。

火球と炎球の差、それは『火の色』と『球の大きさ』。火球は橙色で握り拳ほどのもの。だが、炎球はそれに赤色が追加されて成人男性の頭部ほどの大きさを持っている。

火球は主に複数で、炎球は主に単体で攻撃をする。なら、この状況では炎球と表現するのが適当であろう。

カムはすぐさま例の剣で炎球を打ち消す。だが如何せん威力が異常であった。魔力も、威力も、そしてそれを飛ばす力も。カムにはこのときに知るのだが、この剣にはある一定の魔力は無力化ができるが、それ以上の魔力であると打ち消しづらくなってしまふのだ。

それらを本能で感じると、カムは打ち消すことを諦めて『受け流す』ことを行つた。それにより炎球は右後方へと飛んで行き、堅く閉じられている扉がある壁に引火した。

そのとき、シャンはすでにカムの目の前へと存在していた。あの炎球と代わるかのように。

斬る音。カムの前方には燃える壁。後方には燃える壁と、一人の少年。

突如の激痛。左上腕部と右脇腹に金蒼きんそうが出来ていた。誰がそれら二つを作ったのか。自分で自らの体に傷を作るのは愚か者が行うことならば作ることが出来るのは、少年のシャン一人だけしかないだろう。

その少年は振り向き、被害者を正面に捉える。

「本気を『半分』ほどしか出していないのにすでに二撃やられているとは、これからお前は耐えることができるのか？」

回答者も振り向き、笑みを作つて答える。

「君の『限界』を見るために、僕は何処までも耐えてみせるよ。」

だから、はやく『殺ろっ』よ。」

答え切ると同時に構える。シャンもそれに倣い、最初と同じ状態にする。

先手はカム。駆け出しながらも剣を前へ構えてある場所を狙う。

だがシャンはそれを分かっているうえで未だに動いていなかった。

そのかわり、言葉を呟いていた。しかしながらも、声量は相手も聞こえるほどに。

「だが、まず『限界』を求めることからおかしい。順序良くいけばいいだろうものを。」

……では、本気の『全開』といくかな。限界とは程遠い『本気』を。」

同時、カムにむかって3本の氷矢が飛ばされた。

しかし氷の矢は全て剣によって打ち消されて無となった。

だがしかし、その瞬間にカムは相手の姿を視界から逸らしてしまうということをしてかしてしまった。

その結果、牽制の攻撃を防ぎ再び視界を前へと向けると、少年の姿が消えていた。

前にはいない。しかし横から来るのだとすると見えるはず。ならば顔を今一度上げると、はたして少年は宙へ跳んでいた。しかも剣を振り下ろすという構えも付いて。

反射的に剣を構えて二度目の攻撃を防ぐ。これもまた重い。体重と

重力が重なり腕一本では止めることが出来ないようだ。それならばもう一本加えればいい。すぐさま左手を剣身に添えて押し返した。

そうすると当然少年の体はまたもや宙へいき身動きが取れない状態へと陥る。それはカムにとっての好機。これを逃すわけにはいかない、右腕を横へ薙いで少年の体を裂いた。同時に勝利を感じた。

そう、裂いた『はずだった』。シャンは右の剣を逆手に持ちかえて右足を剣の中間辺りに添えた。そして攻撃を刃の根元で受けた。そうなるとうなるのか。空中にいるため右からきた力によって体が左回転し始めた。だがその流れるような動きをシャンは身にまかせた。

その結果、体ごと左へと回転させてその勢いで左足をカムの側頭部へと衝撃を与えた。

もちろんカムはその攻撃によってひるんでしまった。まさに糠喜ぬかよろこびであった。一時的な歓喜。一時的な痛恨。そして左からの衝撃。それら三つが連続で起きてしまい一時的の混乱を来してしまった

残念ながら、時間は一度も止まらず永遠に流れ続ける。カムが見せた一瞬の間。シャンはそれを見逃すことはなく、そしてこの争いに終止符を打って出、懐へもぐりこんだ。

はたして。右の剣は左斜めに下ろし、左の剣は右斜めに上げて、二つの赤い斬り筋を交じり合わせた。

同時に飛び出す赤い液体。発源者は元兵士からであった。しかし力ムは膝を屈することなく、後方へとゆっくり歩き始めた。

「あはは、シャン君はやっぱり強いなあ。予想もしなかったことで攻めてくるのは驚いたよ。

おまけにこんな傷を食らってしまつと、君の『限界』は見る事が出来ないようだね。」

一歩、一歩。床を確認するかのように開いている扉へとゆっくりと

歩み、しかしながらシャンへ視線をそらさないでいた。もちろん右手にある剣を一切手放さずに、しかし手にあまり力が入っていないのか歩くたびに剣先が揺れていた。

「……僕がこんなことをしたのはあの時にいった理由以外に、もうひとつあるんだよ。」

それはね、『僕がどこまで抗うことができるか』を知りたかったからなんだ。」

そのことを言っているカムの表情は、傷による苦痛以外の苦しみが表れていた。

「僕はこの国に生まれ、優しい両親の下で生き、普通に育ってきた。」

だけどある時思ったんだ。『僕はこの世界にとって何なのだろうって。』

親に聞いても曖昧な答えばかりで納得ができないし、かといって他の人に聞いても『分からない』ばかりだった。

僕以外の人は分からないでいた。なら、『僕が答えを作ればいい』んだと納得した。」

まるでそのときの自分を見ているかのように苦笑をしていた。

「だから僕はこの国の軍へ入ったんだ。もちろんあの時にいったこともきっかけとしてだよ。」

……だけど実際はどうだろうか。そこにいた人たちは全員強いと

は感じなかった。実際にもそんなに強くなかった。こんなところで『答え』は作ることが出来るのかなって。この軍に入ったことが『正解』なのかなって思ったんだ。

そう思っていたときに、君が僕の前に現れたんだ。」

限りが無いかのように傷口から血が溢れ、カムの顔に生気が抜けてきた。

「最初のころは『子供が見学に来ているのか』と思ったのだけど、参加したいと聞くと驚いたよ。まだ十にも満たない子供が参加するなんて思わなかったからね。

そして実際に模擬戦をやってみると、君は僕を負かした。もちろん信じられなかったよ。これは何かの偶然だってね。だけど何度もやって、何度も負けた。そして確信したよ。『君と戦って僕が勝つことが初めの答え』だってね。

勉強して、鍛練して、他の人たちと戦って、君に勝つことだけを考えてきたんだ。そして君に負けて、何処が悪かったのか、どういう戦法で行けばいいのかを研究した。

そう、ただただ『君に勝つ力』だけを求めて軍に通っていたんだ。何度も素振りをして、何度も勉強を繰り返して、何度も君と戦った。

「

後ろ歩みが止まり、青い笑顔を作った。

「そして何度も君が勝った。僕が勤めてきた軍の得意なことで君は僕たち全員に勝っている。僕は君には勝つことができないのかと思

った。

そんなときに『ある人』が言っただ。

『君が勝てないのなら別の方法で勝てるのではないか？私は勝てる別の方法を知っている。それに賭けてみないか？』って。

『その代わりに、君には私の方法を手伝ってもらおうよ。』って言ったんだ。僕はすぐさま飛びこんだ。条件が何であろうと僕は勝ちたかった。

そして僕は勝った。君は負けた。だけどそれだけじゃあ足りなかった。だからまた君に勝負をかけた。結局はこの有様^{ありさま}。だけど嬉しかったよ。僕が『限界』出して君に傷を負わせることができたのだからね。だからこれで十分。安心して死ぬことができるよ。」

炎は燃え広がり壁から床へ、壁から天井へと燃え広がり轟々と音を立てていた。

視界には、炎によって照らされている青年の姿。

視界には、炎によって照らされている少年の姿。

「ありがとう。こんな僕と戦ってきてくれて、ありがとう。」

笑顔とともに言葉が出て、胸から剣が生やされた。

「お別れの言葉はもう済んだようですね。」

第三者の声。その声はどこからきこえているのだろうか。

「しかし、この子はあまり使えなかったようですね。まあここで足止めをしたことに褒めてあげますが。」

カムの体から剣が抜ける後、首が空中へと飛ばされていった。

体は目の前に、首は視界から飛ばされて消えた。これは一体どうい

うことか。

「だが君の役目はここまでです。君はここで死に、灰となっていてください。」

それが、この国の『歴史』となりますから。」

主である頭を失った体は無惨にも倒れ、また血を溢れさせていた。

「無惨にも殺された国民。王家の滅亡。そしてそれらを殺めた暗殺者。この国はそう締めくくられるのが一番いいのでしょうね。」

そして、それら全てが『一夜のうち』に結果として現れるのですから、とても面白いですね。」

代わりに現す姿。それは『どこかで見たことがある』姿。

そしてその声。とても冷静であり、とても冷徹である、その声にシヤンは聞き覚えがある。

はたして、その者とは

「さてこの『史劇』は、『悲劇』でしょうか？『惨劇』でしょうか？

それともあるいは、『喜劇』でしょうか？『笑劇』でしょうか？」

『死神』、そう表現するのが適当な者であった。

[illegible]

青年は最後に「笑み」を浮かべ、「死んだ」

死神は青年を殺し、問う

少年は……

このお話の終焉は、もうすぐ

「死」の国と成り果てるのは、もうすぐ

現実の認識（後書き）

おつかれさまでした。

決して案に詰めが入ったわけではありません。パソコンに触れる時間が皆無に等しかったのでなかなか投稿できませんでした。これからは一週間ずつになりそうです。

戦闘描写はいかがでしょうか？一手一足を細かく書いているためか無駄に長くなってしまうています。うまく伝わっているといいのですが。

言葉の説明を一応いれておきますね。

金倉きんそう - - - 刀・槍など金属製の武器で受けた傷。切り傷。

これは難しいので説明を入れておきますが、後々に必要のようでしたら入れていこうと思います。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

感想は無制限ですのでどしどし書いてください。見られる時間は限られています。

ありがとうございました。

終劇（前書き）

いらっしやいませ。

なんだか呆気無く話が終わりましたが、さまざまな思いが見え隠れしています。

とある事情により投稿ができない状態でした。

では、どうぞ。

終劇

「歴史は幾度と無く記されてゆき、永遠に『物事』として残る。」

一言の呟き。

「誰かが作り、誰かが起こし、誰かが壊し、誰かが死ぬ。」

まるで物語を読み聞かせているかのように呟く。

「ある者は英雄として名を残し、またある者は罪人として名を消される。」

言葉はゆっくりと近づいてくる。

「そしてまたある者は、もともと存在が無かったかのように『削除』される。」

炎の灯りが剣に反射して刺激のある光が目に入ってくる。

「さて、ここまでのことについて質問はありますか？」

突如投げかけられた言葉に、俺の答えは喉に詰まって外へは出なかった。

その答えに何を思ったのか、笑みを浮かべて右の掌てのひらへと視線を落とした。

「それらの歴史を見たものは『そんなことがあったのか』と関心を抱く。」

彼の不可解な行動と様子にザワザワと悪寒と恐怖が積ってきた。

「それらの歴史を行ってきたものにとってはどう思っのでしょうかね？」

不安の積りが限界を迎えそうになったこの時。

「では、その『気持ち』を知ることになりましたか。」

これからあなたを始末して。」

幾多^{あまた}の氷矢の矛先は俺へと向かい、冷たき襲撃を行った。

視界には満遍なく集まっている氷矢。それは避ける隙間がまったくないことを示していた。

「くそつたれが！馬鹿みたいなものを出すな！」

異常な攻撃方法に思わず悪態を吐いても、氷矢の壁は止まることを知らないでどんどん向かってくる。

俺は対抗して『炎の壁』を創り出し、先手の攻撃を無力化した。

激しく音を立てて燃え氷矢を溶かすが、その音とは『別の』風を切る音を耳に入ってきた。

この音は一体何だ？何故その音が聞こえる？

一体何処から聞こえてくる？

一瞬の思考に浸ってしまい、その『もの』がこちらに向かっていることを忘れてしまっていた。

そしてそのことに考え着くころにはもう遅かった。

鋭い激痛が腹部――両脇腹に走った。

同時に感じたのは、凍えるように冷たいものであった。

思わずしゃがみこんだ頃には、『炎の壁』が消え死神が悠然と立っていた。

「なかなか素晴らしいものを持っていますね。初手は少し本気でいったのですが、まさかまさか『ほぼ』全てを溶かしてしまうとは思いませんでした。

しかし、第二撃の方は溶かすどころか避けることすらできなかったようですね。それとも、先ほどの『火の壁』で見えなかったため外してしまったせいかな。」

未だに笑みを崩さずまるで教師かのような口ぶりで話しかけてくる。それは容姿に合っており本当に先生のような存在でいた。

だが、生徒役であろう俺はそれにかまってもいられないでいた。

そのことは俺にも起きていて、自らがだした障害物によって視界を妨げてしまい攻撃を食らってしまったのだ。

思うところにその攻撃は二本の氷矢だと思う。時間差で攻撃をして仕留めようとしたのだろう。

ならばこの程度の怪我で済んだことは僥倖うかつに恵まれたのだ。まさに、ラッキー。

だが、その幸運も潰つぶえるのであった。

「これであなたの実力が分かりました。確かに『この子』よりかは強いようですね。」

だが、残念ながら私にとっては些さ細さいなものです。私が10ならば、あなたは3のように。」

そして、宣言。否、『宣告』した。

「まだ仕事が残っていますので、手早く始末しますよ。」

目の前に、氷矢と炎球が混合した景色が広がった。

またもや目の前に広がった壁。しかし今度は赤と白が交錯じゆうかくしており、この時に思うものではないが『目に悪い』色合いであった。

それらは俺……俺の急所である心臓一点に集中していた。直線に、曲線にと飛び方はさまざまながらも狙う箇所はすべて同じであった。

俺は『死神』の意図を己おのれの勘で感じ、すぐさま左へと避けて走り出した。

一対一、『死神』が俺を狙うのならば俺は『死神』を狙う。
『死神』が俺を殺すのならば俺は『死神』を殺す。

1と言うのなら1と言う、2と言うのなら2と言うように、ただただやられている事をただただ返しているだけ。

避けたときに目前にはまたもや氷矢。だが先ほど体を急がせたためか次の行動に隙すきが出来てしまった。『慣性の法則』によって動きに障害ができてしまっていたからだ。

だがたったそれだけ。足は動けないのなら、手を使えば良い。ちょうど両手には剣があるのだ。それを使って氷矢を壊せば良い。たったそれだけのことなのだ。

慣性を利用して右手を左へと動かし剣を氷矢へと叩き付ける。返っ

てくる衝撃は重かったが弾き返されるほどではなかった。そのまま押し込み、氷矢は砕けてただの氷へと変わった。

そこで止まってしまうのはただの馬鹿。次の攻撃が来るまで待つのは愚考。ならどうするか。こちらから攻撃を行えばいい。慣性の運動も収まったことだ、これを機に反撃を行う他に何かがある？

矢のように『死神』へと駆け出す。その間にも攻撃は繰り返されるかのように休む間もなく向かってくる。氷矢や炎球、はたまた炎で出来た矢までも飛ばされていた。

だがそれらの攻撃は俺にとっては小さな障害でしかなかった。何故か？

俺は怒っているから。目の前で元仲間を殺されたから？

俺は楽しんでいるから。これほど命を賭けた戦いをしたことがなかったから？

それとも、俺は飽きているから？

早くこの『小さな』戦いを終わらせて母さんやリユナが生きているかを確認したいから？

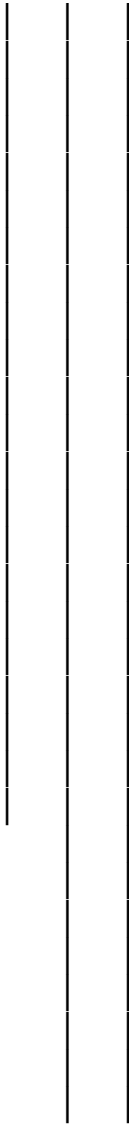
それとも……この国に『飽きた』から？

適当な答えは決まっていない。もしかすると、すべてが正解かもしれない。

ならば、『死神』を殺してから考えるとするか。

まるで俺が『俺』でないような考えが頭の中を過ぎ^よっていた。

一体誰が『俺』にしたのだろうか？



幾多にも重なった赤と白の兇器^{きんぎ}は俺にとってはそれほど恐怖心を煽るものではなかった。

何故俺はそんなことを考えるまでの余裕ができたのだろうか？自身のことなのにまるで他人のように感じている。主観的から客観的への思考の移行、普段ならまったくもって有り得ない事柄なのに現在ではそのようなことが起こっていた。

氷矢を剣で壊し、炎球を剣で受け流し、炎矢を斬り裂き消失させる。その行動に余裕があるのか走っていたはずの脚はゆっくりと歩みを行っていた。一步、また一步と進むたびに一つずつ飛ばされて来、そのまた一步進むとそれらは一つずつ消されてゆく。

俺が近づくたびに『死神』の表情は青ざめていた。周りで炎が赤く照らしているのにもかかわらず、その顔に血の気が失せてゆくのが手に取るように分かっていた。

また炎球が飛んできた。それを左の剣で受け流し、また一步。そして『死神』の顔からまた青くなる。

まるで立場が逆転したかのように。『死神』が『死神』であって『俺』が『俺』であつたはずが、『死神』が『俺』であつて『俺』が『死神』に変わったかのように。

「……ふつ、俺が『死神』か……。あまり嬉しいものではないけどな。」

気ままに呟くだけであつたが、周りから見たら異常なのだろう。3つの異なる攻撃方法で襲われているのに一つ一つの攻撃方法を丁寧に処理してゆく様はまさに滑稽こっけいなのだろう。

そして、『死神』から『俺』へと移り変わった者が叫んだ。

「……なんだ、なんだなんだっ！！！！」

一体どういうことだ！！！！こんなことになるなんて想定外だぞ！！！！

何故こんな子供に私は^お圧されているのだ！？こんな子供なぞ一切報告にはなかったぞ！！！！」

喚き散らかしながらも未だに魔法攻撃は続いている。しかし心情に揺らぎが起こったのか半分以上が俺を素通りして壁や床や天井へと当たっていた。

なんとも情けない光景が目の前にあった。初めは余裕を多く……否、余裕しかなかった笑みの表情から一転、幻滅と失意によつて憔悴した面持ちへと面変わりしていた。

「くそがつ！！！！ただの子供が私を^お圧しているのは有り得ない！！！！非現実だ！！！！こんな幻想なぞいらない！！！！」

拳句の果てには現状から目を逸らそうとまでし始めた。これがこの国の『側近』なのか？他の人に聞いても『有り得ない』といわれるものだろう。それほど、まったくもって情けなかった。

だから、現実逃避をさせないように言った。

「大人げない。それでもあんたは偉いところについているのか？いや、有り得ないね。目の前の事から逃げるなんて『子供』だよ。いや、子供『以下』だよ。」

その言葉で動きが止まった。同時に攻撃も止み、絶好の瞬間が見え

たため速攻を仕掛けた。

「……………大人げない……………逃げている……………『子供』……………子供以下……………」

近づいていくことにブツブツと呟きが聞こえはじめた。だがその距離はもう間合いにはいつていた。

剣を構えていざ斬る瞬間、彼は振り向いた。

俺はためらうことなくクロスに斬った。

彼の顔には……………『涙』が流れていた。

「……くっ、くっくっくっ……はーはっはっはっはっはー！！！！」

斬られた後、いきなり笑いだした。涙を流しながらもかまわずただただ大声で笑い始めた。

「……何がおかしい？」

「はっはっはっはー！！！！いや、とても大切なことを思い『出された』だけだよ。」

くっくっく、まさか、こんな時に思うとは想定外だよ。ここまでやってきたのは全て私の我儘わがままだったのだからな。その我儘に執着しすぎたためか『あのこと』を考えることなんて微塵もなかったのだからな。まったくもって情けない。」

その言葉を吐いている顔は、まるで憑つきモノが取れたかのように清々《さすが》《》しい表情であつた。

「一体何のことか分からないが、そんなに大切なら死ぬ前に考えることができてよかったじゃないか。」

皮肉を含めた言い方で行ってみたが、彼にとっては何事もない様子であつた。

「ええ、これらはすべてあなたのおかげです。この命が消えるまえに『あのこと』を考えさせるのはとても大切です。それは、これから書くべきであった『歴史書』より、それと比べられないほどの大切なものでした。」

その言葉は俺に向かっていつているのだが、本体は俺を素通りして歩み始めていた。

「私は過去に起こった出来事だけしか見ていなかった。だから私の妻や子供に多大なる迷惑をかけてしまった。そして今となっては、もう遅かった。妻は床に伏せ、娘も部下として扱ってしまった。もう私のことは父とは思わないだろう。」

燃え広がる炎。床、壁、天井を真っ赤に染めて勢いよく音を立てる。だが彼はそれを気に留めずに『ある場所』へと向かっていた。

「だけど、逆にそのことに安心しました。父である私がこの国の反逆者であり、この国を破滅させた張本人ですから。そんな人を『父親』と呼べますか？ いや、私なら呼べません。他人として扱って消えてゆくのですから。」

そしてその『場所』へとたどり着いた時、振り返って俺の目を見た。

「あなたにお願いがあります。」

あの扉の向こうに置いてある一冊の本を燃やしてください。もうあの本は私には unnecessary ですから。」

微笑みながらも、涙を流しながら依頼する。儚く、空しい表情であった。

俺は、その依頼を、受ける。

「……分かった。後で燃やしておく。」

あと。……お前の娘は『父親』として言っていたぞ。

『パパ』ってな。」

驚いた表情。そして嬉しそうな笑顔。瞼を閉じた際に大粒の涙がこぼれおちた。

「……そうですか。ありがとうございます。」

「……。」

最後の弦きは聞こえず、窓から空へと舞い落ちた。

彼から受けた依頼は、残念ながら遂行できなかった。

報酬が無かったため、その本をもらったからだ。

俺が得たものは、本と『死』だった。

燃え盛る部屋を出、城から出、国から出た。

その頃には、もう朝日が昇っていた。

『克蘭デイス王国を殺した私』

著者：クレスラン・ティフィラール

この事件は後に『三代の悲劇』として歴史に残った。

死者・行方不明者が幾多にも及び生存者は発見できないと見ていた。

だがしかし、『奇跡的』にも『生存者』がいた。

すぐさま介抱し、目に着くような怪我がなかったため休ませた。

その者はまだ幼く、そして美しい『少女』であつた。

その者の名は……『リュナ・ティフィラール』。

『ただ一人だけ』の奇跡の少女であつた。

[illegible]

人が『死に』、王も『死に』、国も『死に』

この劇は『悲劇』であり、『惨劇』であつた。

死に誘われるように『踊り』、

罪の名前を叫ぶように『歌い』、

己の本性を知らずに『苦しみ』、

苦痛を耐えかねるように『泣き』、

無意味な抵抗に『笑い』、

何も語らず、何も動かずに、『死ぬ』

『役者』はそれら全てを完璧に『演じ切つた』

面白く、悲しく、楽しく、憤り、

全ての感情を演じた

この『劇』は終わった

この『劇』が何を訴えたかったのかは、あなたたちが感じるべきもの

そのことは、私の口からはあえて言わないでおこう

考える間もなく答えを知るとはとても面白くない

さて、この『劇』は片づけておこう

そして、次の『劇』へとゆこうか。

そのときまで、『またいつか』

終劇（後書き）

おつかれさまでした。

この話によって第一章の本編は終わりとなります。

あとは番外編をかくつもりですが、人数分書くので長くなりそうです。

活動報告で『七日に投稿する』といっておきながらこんなに遅くなってしまう。理由はこれも活動報告のところで書いておきます。申し訳ありませんでした。

番外編についてですが、前にも書きました通り主人公以外の登場人物からの視点で進む話です。何故リユナは生き残ったのか？何故クレスランは笑いだしたのか？それらを主に書いていきます。先に言っておきます。コメディは一切ありません。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。出来るだけ早く修正します。

片手で打つのは案外難しいものですね。

ありがとうございました。

番外編の前に人物紹介（前書き）

いらっしやいませ。

各個人のお話へ向かう前にとりあえず登場人物を整理していきます。
予想外の人物も含まれているかもしれません。

では、ごゆっくり。

番外編の前に人物紹介

転生してから登場した順番で書かせてもらいます。ちなみに名前が明かされていないものは除外します。

《転生者》

名前：シャン・サムウィル

性別：男

年齢：12歳

身長：151cm代

体重：外見に沿った重さ

外見：髪はこの世界では珍しい黒であり耳に少し掛かる程度の長さであるが、後ろ髪は腰のところまで長くひとつにまとめて背中に沿うように垂れている。

顔つきは端整たんせいであり、年相応の釣り目と凛々りんりゃしい眉を持つ。

『かつこよさ』と『可愛らしさ』が8：2のような雰囲気を出している。瞳の色も黒。

体つきは同年代の少年よりも筋肉質。

性格：冷静沈着。しかし感情は豊かであるので社交性は高い。己おのれが『悪』と認識したものには徹底的にたたきのめすほどの正義感。し

かし本人曰く『ただの自己満足』だそうだ。

使用武器：双剣

得意魔術：全て

能力：1・身体能力の向上

2・魔力の無限化

3・物を創造できる力（全て金属で出来てしまう）

備考：猫を助けた代わりに死んでしまった今作の主人公。神様に異世界で転生されて難なく暮らしていた。過去に厨二病ノートを作成した黒歴史あり。

首謀者を倒したが結果として国が滅亡したため、この国から去ることとなった。

彼はこれからどのように生きていくのか……

《過去を持つ母》

名前：アルシア・サムウィル

性別：女

--	--	--

年齢：《削除されました》

身長：160cm代

体重：《削除されました》

外見：髪はこの世界にとって普通の茶髪。背中の半分まである髪を一つに結えている。所謂『ポニーテール』。

母親となったおかげか、母性と優しさに染まった顔。瞳の色も茶色。

体つきもそれに同じく、出ているところは出ている。

性格：シャンが生まれたことによって母親としての自覚を持ち、息子にはとても甘やかしている。

だが、間違ったことをしたのならば、容赦なく説教へと入る。それもこれも心配をしたから。

どうやら昔はこんな性格ではなかったようで……？

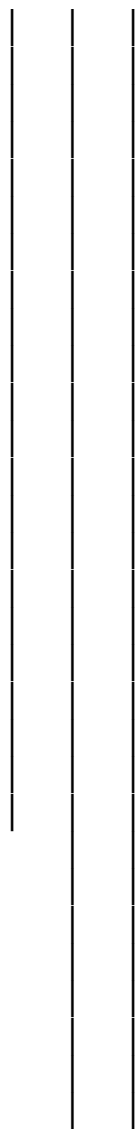
使用武器：フライパンとお玉（調理用）

得意魔術：不明

備考：シャンの母親。他の種族や魔法を使えるなど知識を多く持っている。

だが、普通の主婦ならばそれらは知らないものである。

この意味が示すものとは一体……？



《幼き獣人》

名前：リユナ・ティフィラール

性別：女

年齢：12歳

身長：145cm代

体重：外見より少し軽い

外見：髪は茶色で肩まで伸びていて、クセがまったくないストレート。獣人の証として人間が持つ耳は無く猫特有の耳が頭部にある。あと尻尾も後ろの腰にある。色は同じく茶色。

顔つきは『少女』と呼ぶにふさわしく美しい。所謂『美人』いわゆるというもの。

体つきは整っており、シャン曰く『少し背中に膨らみを……ゲフンゲフン。』だそうだ。

性格：本来は物静かで優しい性格なのだが、初見の人と接する又は自分が嫌いだと認識した人には警戒をして敬語になるほどの人見知り。自分は気付いていないのだが、意識が覚醒していない時には『女の子』のような声を出してしまう。

使用武器：特になし（というかほとんど使えない）

得意魔術：回復魔術

備考：シャンに助けられた（？）少女。父親に関しては上司としての怨みと父親としての尊敬が混じりあい混乱しているが、『親を怨んではいけない』と思い現在は尊敬の方が大きい。

『三代の悲劇』事件の唯一の生存者。彼女はこれからどのよう
うに生きていくのか……

《影となつた青年》

名前：カム・トラニス

性別：男

年齢：20歳

身長：176cm代

体重：外見に合った体重

外見：髪は短めであり耳にかかるかからないかほどの茶髪であり、
クセがなくストレート。

顔つきはまさに『青年』。実年齢より2〜3歳か若く見られ

る。

体つきはほどよく引き締まっている。

性格：普段は優しく『お兄さん』的な存在感を出している。

だが本心は臆病者であり、何事にも優勢に立たなければ気が気でならない。

そうなるためには手段も目的も厭^{いと}わない。

使用武器：両刃の剣（魔法無力化）

得意魔術：火炎魔術

備考：克蘭デイス王国軍所属の兵士。軍の中では強者の類に入っていたが、一人の少年の途中参加によってその立場が脆^{もろ}くなった。その不安を取り除くために一方的な敵対心を持つ。

彼には『協力者』がいたが、最後にはその者によって殺された。

--	--	--

《現国王》

名前：ナヴァジス・クランデイス

性別：男

年齢：40歳

身長：180cm代

外見：髪は肩にかかるほどの金髪であり、天然パーマ。

実年齢の通りに顔には皺しわがあり、常に柔和な笑顔をまとっている。

体つきは筋肉質であり、ガツシリとしている。

性格：思いやりが強く、民を幸せにするにはどうするかと考えながら街へ行つて視察するほど。

また正義感も強く『悪』に向かって戦うことは当然だと考えている。

国の事を褒められると自分の事のように喜ぶのは、まるで子供のようなものである。

使用武器：両刃の剣（王族用）

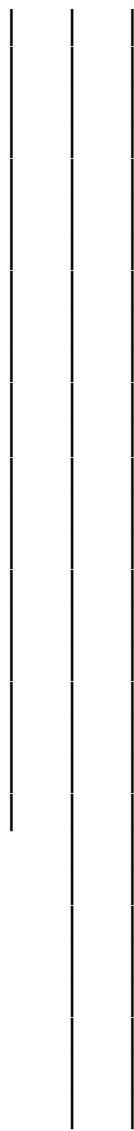
得意魔術：火炎魔術

備考：克蘭デイス王国の第三代国王。二代目である父から王位をもらい防衛を担になっている。

父が吞気者であるためか気苦労が出てため息が出るほどの苦勞人。

クレスランのことを嫌っていたのはある出来事からであって

……



《元国王》

名前：シャヌルダ・克蘭デイス

性別：男

年齢：82歳（初代が死んだ頃は7歳）

身長：160cm代（背筋を伸ばした時）

体重：ご老体のため外見よりほんの少し軽い

外見：髪は無い。老けて抜けていった。前には短く切られた白髪があった。

年齢の通りに顔には多くの皺があり、そのためか目が細く見える。口元には白く染まった髭が体の胸元にまで垂れ下がっている。年には勝てなかったのか猫背となっている。体にも皺が多く見られる。

性格：楽しそうなものがあれば喜んで参加するほどの呑気者。王位から外れたためやりたいことはとことんやっていく活動家。それらが息子に疲れをためていると知っていても暴走する。

使用武器：杖（身の丈ほどの長さをもつ）

得意魔術：氷結魔術

備考：クランデイス王国の第二代国王。現在は息子に王位を継承し自分は隠居の生活を送っている。

暇な時間があれば街を護衛なしで歩くこともある。

実はシャンの名前を聞いた時に少し引っ掛かることがあった
ようだ……

《史を求める首謀者》

名前：クレスラン・ティフィラール

性別：男

年齢：35歳

身長：186cm代

体重：外見よりそれほど重くない

外見：髪は短い茶髪で、娘と同じくストレート。獣人の証としての猫耳が頭部にある。尻尾も腰にある。色は同じく茶色。

眼鏡をかけており『知性』を醸し出す顔。同時に『残酷』をも感じさせられる。

武より知に力を入れていたためそんなに筋肉はついていない。

性格：外見通りに冷静であり冷徹。欲しいものがあれば手段を問わずに奪い取る。

何事も自分通りに動くことが常であると考えている完璧主義者。そのため自分以外はすべて『物』としてみている。

使用武器：両刃の剣（保険として持っているだけ）

得意魔術：火炎・氷結魔術

備考：クランデイス王国の側近。他の家臣が嫌っている『裏専門の仕事』を担っている。それを選んだ理由は『この国の裏も知ることができる』から。娘のことも『物』としか扱っていないため父としては最低である。

だが死ぬ前に娘のことを『者』として認識したが、最後には窓から飛び降りて命を散らした。

番外編の前に人物紹介（後書き）

おつかれさまでした。

上記の者たちのお話をこれから書いていきます。

お話はできるだけ繋がるようにしていきますが、止むを得ずに断ちきることがあります。そのことをご理解の上で読んでいただけますようお願いします。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

ありがとうございました。

〈番外編　．．．　一人の幼き獣人〉（前書き）

いらっしやいませ。

この話から番外編へと進んでいきます。

最初のお話は題名に書かれている通りの『彼女』です。

では、ごめっくりとござ。

ちなみに、10000文字以上書いてしまいましたので、すごく長いです。

〈番外編　．．．　一人の幼き獣人〉

私の名前はリユナ・ティフィラール。

両親が共に猫の獣人。つまり純血な猫の獣人ということになる。

歳はシャン君と同じ１２歳。

始めは王家にメイドとして仕えていたけど、少し経つと父が勤めている部隊へ入隊させられた。

その部隊は主に暗殺を目的とした仕事を受けていた。

私はそれに耐えられなくなって、あの日の夜に行われる仕事の後に辞退しようとした。

けど私は辞退できなかった。何故なら連れられたからだ。

たった一人の少年によって仲間の人が倒されていき、私は気絶させられた。

そして目が覚めると知らない天井が視界に入り、そして『あの少年がいた。』

その後、互いに自己紹介をし、改めて少年をみた。

初めは警戒し、隙があればその子を倒して逃げようとした。

だけど一切隙が見えなく、ただただ時間だけが流れていた。

すると少年……シャンが質問をした。

『君は、何者だ?』

その言葉がきっかけで私の攻撃が始まった。

結果をいうと……軽くあしらわれた。それどころかとどめを刺される手前までされた。

そこで私は思い出した。そして思った。

『やっぱりあの夜のことは、現実だったんだ。』と。

あの時――恥ずかしい出来事からシャンやシャンのママと友に
過ぎした。

シャン達となると全てが新鮮に感じた。短い間だったけど、見慣れ
ていたものが初めて見たかのような楽しい気持ちがいっぱいだった。

そんなこんなで今、私はその少年の母親といっしょに寝室にいた。

私はさっきまで寝台の上で寝ていたのだけど、玄関の扉を開けた音
で起きてしまった。

その音にはシャンのママもビックリしたみたいで部屋の扉を開けて覗いていた。

私もそれに倣^{なま}ってみると、シャン君が帰っていた。気のせいだと思うけど、その時の彼の顔色は悪かったような気がする。

「どうしたのシャン？いきなり扉を開けて。」

どうやらママさんには見えないらしいので『気のせいだ』と片づけた。

「おかえり、シャン。」

とりあえずそう言うておいた。さっきまで寝ていたから眠たそうな声が出てしまった。現に私の顔もそうだろう。

するとシャン君は何故か荒げていた息を整えて、

「ただいま。大丈夫、やらなきゃいけないことを思い出したただけだから。」

と私たちがかけた声を丁寧に戻してくれた。

そっか、必要なことを思い出したのだから急いで家にかえるよね。だけどそんな遠くに散歩に出かけてたの？

私がそんなことを考えている間にも、シャン君は自室がある二階へ向かう階段を登っていた。

するとママさんはまだ心配している様子で声をかけた。

「本当に大丈夫？何かあったの？」

シャン君はすぐさま、

「何でもないよ。ただ明日までにやらなきゃいけないことだから。

気にしないで。俺1人でできることだからね。」

と答えた。何か違和感を感じただけど気にしないことにした。だ
って眠いもの。

そんな私とは違って、ママさんは階段の上へと顔を向けていた。

「リユナちゃん、ちょっとお願いがあるんだけど聞いてもらえない？」

『さあこれから寝よう』というときに、突然ママさんから私へ言ってきた。

「はい、何でしょう？」

とりあえず恩人の親でもあるから敬語で話しているけれど、

「もう、リユナちゃんったら敬語はいらないって言っているでしょっ?。」

こつとも言われてしまうと、もう何もできない。ついでにいつと、このやり取りは今回だけではなく昨日からも私に話しかけることに言っている。

「は、うん、わかった。

それで、何?。」

あまり目上の人に向かっていう口調ではないから慣れるのは難しい。そんな気苦労を知ってか知らないでいるのか、ママさんはこつ言ってきた。

真剣な表情で。

「そのまえに一つ質問をしておくわね。

リユナちゃん、私たちといっしょに過ごさない?。」

つまり、ママさんが聞きたいことは『私たちの家族になってくれる?』というものだった。

突然であり予想外の質問に混乱してしまった。特に私は驚かされるのは苦手だからなおさらだった。

「え?え、え?ど、どついう、ことですか?。」

私の口から出すことが出来た言葉は、こんなにも驚いて震えていた。
「どういうことも、こういうことよ。」

失礼だけど、リユナちゃんのことまでのことをシャンから聞いたわ。大変だったのね、望んでもいない部隊へと編入されて困惑したでしょう？あなたが見たくないものを目の前で何度も見せられると気持ちが悪くなるわ。だから、あなたは私たちの家族となってもう二度とそのようなものをみせないようにするの。」

驚いた。怒りよりも先に驚いてしまった。あの血だらけの光景から目を防いでくれる人がいるなんて。私が部隊に入ってから一度もそんなことを提案してもらっていなくて、ましてや今の家族と縁を切れと言っている人は初めて見た。

だけど、今のパパやママの関係は少しおかしくなっていた。いや、少しどころではなく『大きく』だ。パパは私の事を『人』として見ていないような扱いを受けていた。実際に他の部隊の人たちも同じようなものだった。ママはそんなパパを見て倒れてしまって病気にかかってしまっていた。

私の家族は一体どこで狂ってしまったのだろうか？



その答えはもちろんある。

パパだ。私のパパが狂わせたんだ。パパが国王様の側近についてからおかしくなってしまうたんだ。あれから私はパパに構ってもらえず、パパが帰ってこない日にはママは遅くまで起きていた。それらがほぼ毎日続いてしまうと、私の中の『パパ』に罅ひびが入っていき所々で割れていった。

そして『パパ』に大きな罅が入った時は、ママが倒れてしまったときだった。

私はすぐさま医者を呼んでママを診てもらった。医者が言うには『ここまで疲労させたのはよほどのことが無い限り有り得ない』というものだった。私はとても衝撃を受けた。ママは毎日毎日夜遅くまで起きてパパを待っていたことを。そしてパパはそれを『当然』のようにしていたことを。

私はすぐさまママの看病をした。医者にはパパに知らせるようお願いした。

その数日後、その間にパパは帰ってこなかった。医者が言うにはちゃんと伝えたらしいが、軽くあしらわれたようだった。私は思った。『パパはそんなことをする人だったのか？』と。

そして一週間が過ぎようとした時、パパは帰ってきた。もちろん私は喜んだ。喜んだと同時に、『何故早く帰ってこなかった』と聞きたかった。

パパはママの様子を見て一言呟いた。

『なんだ、大したことではないのか。』と。

私は固まってしまった。止まって固まった。何故？何故、そんなことを言うの？ママはパパのお嫁さんだよね？なんでそんな冷たい目で見ているの？何でそんなに早く出ていっちゃうの？

そして、何で私を見ないの？

その日から私にとっての『パパ』は砕けた。残っているのはただの破片だけ。もうくつつけることも、直すこともできなくなってしまった。

その代わり、私の『どす黒い何か』が破片一つ一つを包み込みこんでいった。周りからは何があるのか分からないほど黒く、そしてその中身の物をじわじわと溶かすかのように無くしていく。

私はそれを受け入れた。いや、受け入れよう『とした』。

包み込まれたものは『冷たい目をママへと向ける姿』だけでなく、『私へ笑顔を向けてくれている姿』までも黒く潰されようとしていた。

その『破片』は私がとても大切に仕舞って置いていたものだった。『今のパパ』になる前に見せてくれた『あの頃のパパ』の笑顔。それはとても温かく、とても優しくかったもの。

私はそれをも包み込んでしまうところだった。私が好きだった『パパ』。今は違う『パパ』だけど、すがたかたち姿形は同じもの。違ってしまふと『別人』といえるのだろうか？

違う。私は『あの頃のパパ』を信じる。信じていると何時か戻ってくれる。ママはそう信じている。なら私も信じよう。

だけど、戻ってくれるのは何時なのか分からない。明日かもしれないし、パパが死ぬ時かもしれない。

それでも私は待つ。……だけどこの国に居続けると、私がいつ殺されるかも分からない。もちろん私は死ぬのは嫌だ。殺されるのならなまじり尚更嫌だ。

ならどうするの？ 私は私に問いかける。この国に居るのは危険。ならば他国へ行つて、パパが戻った時に帰国すればいいのか？

……そうか、シャンのママさんはその方法を出してきたのか。たった一人である私のためにこの人は動いてくれる。私でいいのだろうか？

私は提案者である者へ問い返した。

「……シャンは、そのことに賛成なの……？」

その答えは笑顔と共に

「まあ本人には聞いていないんだけど、シャンのことだから断ることはまず無いわよ。」

少し予想外な答えが返ってきた。けど少し考える。シャンは私のためにいろんなことをしてくれた。なら私といつしよに出ていくことには賛成なのだろうか？

シャンは優しい。どれくらいかと言うと、私の親のように優しい。何事にも頷いてくれて希望通りのことをさせてくれたりしてくれた。りした。

……私は信じることにした。シャンが賛成してくれる事を信じる。シャンのママさんみたいに勝手なことだけど、私は心の中で謝る。だから、私は共に出ていくために力強く頷き

「……うん、私はこの国から出ていく。」

決意し、決断した。

「これから言うことをよく聞いておいてね。一度しか言わないから。

今から荷物を整えてこの国から出ようと思うの。もちろんシャンもいっしょにね。あの子ったら今夜出ていくと言ったのに聞いていなかったのかしら？

まあとりあえず、リュナちゃんも今から必要なものだけを整えて玄関へ来てちょうだい。」

シャンのママさんはそう言い切ると寝室から出て行った。

それに対して私はその部屋でただ立ったままでいた。何故なら、私が必要なものはもう整っているからだ。

いや、言い方がおかしくなってしまうていた。正確には『必要なものがない』からだ。私がこの家に来た時には手持ちがほとんどない状態で連れていかれた。もちろん武器であつた剣は、私は全く使えないので除外となる。となると、あとに残るものは、たった一つの『ペンダント』。

そのたったひとつであるものを、周りからは見えないように服の中へ入れているものを出してみる。それは光に当てると銀色に輝いて見える円状のペンダント。表面に彫られているものは、何やら難しく書かれているものであつた。私から見れば『文字』にはまったくみえないもので、これをくれた人にとっては『たった一つの文字』だそうだ。

……これをくれたのは『パパ』だつた。旅をしていた私たち家族がこの国に住む記念として、パパが何処かの人から頼んで作ってくれたものらしい。パパが言うには『この文字はお前にとってピッタリな言葉であり、私たちの間に生まれたことを証明してくれるものだよ。』と言っていた。そのころの私にとっては何の事か分からないでいたけど、その時に『肌身離さずにつ』ことを決意したのは懐かしい記憶だつた。

その決意を私は今でも守っていた。このことで、私はパパのことを信じていると再度感じることができた。

私は身支度（といつても服の皺を軽く伸ばしたり）を整えて寝室から出、玄関の方へと向かつていった。

もちろん、ペンダントは服の中へと戻して隠した。このことは私以外誰も知らないことだから。

私が玄関へついて1分もかからないうちにママさんは登場した。

背中には背囊はいのうを背負うことは何の違和感もない。

服装が先ほどまでスカートをはいていたけど、今は動きやすそうな足首まであるパンツにはき替えているのは当然だろう。

長袖であった上着が半そでの服へと着替えていることは有り得る。

ならば、ママさんの右手で逆手に持っている『大きな剣』はどうだろうか？

「……あの、その剣は一体……？」

私が恐る恐る聞いてみると、ママさんは齒をこちらへ見せるほど笑い、

「ああこれ？これはね、昔の私がよく使っていたものよ。

久しぶりに出してみたけど、私はこんなにも大きな剣を使っていたなんて我ながらにビックリしちゃった。まあ長年使っていたせい

か手によく馴染んでいるわよ。それにそこまで重くもないから支障はまったくないから大丈夫でしょう。」

はっはっはっはと笑って、右手の大剣を軽く扱うかのように上下へと振っていた。

それに対して私はその光景と言葉に呆然としてしまった。それも当然だろう、あんなに優しそうに接してくれたシャンのママさん――アルシアさんが、他の国へと向かうために彼女の身の丈ほどある大剣を持つことは想像できない。その光景が目のあるのだ、思考が固まるのは当然でしょう。

「さあ私のことはここまでにして、リユナちゃんはそのままでいいのかしら？」

……つていつても突然この家に来たのだから持ち物なんてあまり無いのは当然よね。」

そう言つて再度笑い始めた。その笑い声で私の意識は現実へと戻つてくれた。

しかし混乱は未だに引き摺っている。これから国を出ることは確かに危険なことだけど、そこまでの戦闘態勢を整えて出ていくというのはいささか怪しい。

私のその思考が巡り巡っている間にも、アルシアさんは最後の確認ということとで背囊の中身を目で見ていた。

その確認もすぐさま終え、再度私の方へ向き

「それじゃあ準備はいいわね？リユナちゃんには顔を知られたら不味いからこの布で鼻のところまで隠しておいてちょうだい。私も『一応』しておくけど、出るまでの間『絶対に』外しちゃいけないわよ。分かった？」

一枚の布を手渡してアルシアさん自身も同じような布を顔に纏まとった。私はそれを見よう見まねで着け、異常がないか確認した。

「シャンは後で合流するとして、私たちは比較的足が遅いから早めに出ましよう。」

そうして玄関を開け、月明かりに照らされた街路へと身を動かした。

- - - 『静か』 - - -

私を感じているものの第一印象が、それ。全く音が聞こえてこない道、それはとても不気味なものだった。現に今でもそう感じている。唯一聞こえるのは、私とアルシアさんの呼吸音と布の擦れる音だけだった。逆にいうと、ほんの僅^{わず}かしか聞こえないはずの音がここまですごく聞こえることは滅多に有り得ないことだということ。それらの音が、この静寂に包まれた街路をより強く引き立てていた。

私は不安に駆られて思わず辺りを見渡した。だけど、見えるものは明かりが消えている家とほんのり照らされている道のみだった。そ

れならばと上空へと顔を上げると、儚く輝いている数多の星とそれら以上に輝いて私たちを優しく照らしてくれている大きな月だけがあった。それ以外はすべて黒く染められている空のみ。私が安心できるものが見つからなかったことによって、さらに恐怖心が増していった。

隣にいたアルシアさんも私と同じ違和感を感じている様子だった。ただど私とは対照的に辺りを隈なく見渡して、いつの間にか俯いていた私へと話しかけていた。

「どうやら他の人たちはみんな『寝てしまった』ようね。けど私たちにとっては好都合よ。今なら誰にも見られずに動けるからね。それじゃあ行こうか、リユナちゃん。」

それは優しくかけられた声。私が求めていた『安心』を含んだ声だった。ゆつくりと顔をあげてアルシアさんの方へと向けると、そこには私へ向けられていた笑顔があった。

たった、たった一つの安心だったけど、私はそれだけで気持ちが落ち着いた。そして恐怖心も我慢できるところまで存在が無くなった。

「……はい。」

やっと出すことが出来た言葉はたったそれだけであり、まるで絞り出したかのような小さなものだった。ただどその小さなものの中には多くの決心を含んでいることを私は感じた。

私の返答に満足げに頷き、揚々としかしながら周りへの警戒を怠らずに前へと進んでいった。おこた

私もその後ろ姿を追うように駆け出し、『私たち』が暮らしていた家を後にした。

まだ歩いて数分も満たない時、アルシアさんは突然歩みを止めた。

いきなりの停止だったので、私は歩いた勢いを止めることができずにアルシアさんの背中とぶつかってしまった。

「……ど、どうしたの？アルシアさん。」

その問いにはすぐさま答えが帰ってこず、アルシアさんはただただ周りへ視線を巡らしていた。その時の顔は『警戒から^{げんかい}厳戒』へと移り変わったかのようにだった。

そして答えが返ってきた。

「……リユナちゃん、冷静に聞いてね。」

どうやら私たちを狙おうとしている者がこっちに来ているみたいなの。もしかしたらもうすぐ来るかもしれない。

もし来たら私は応戦するから、リユナちゃんはすぐ逃げてちょうだい。道は私が開かせるから。

いいわね？私は後で追い付くから全速力で走って行ってね。」

とても悪いことが起きてしまっていた。敵がこちらへと向かってくる。すぐさま逃げなければいけない。

『だけどアルシアさんを置いて逃げるなんて、できない。』

私はそれを口に出そうとした。そう、『出そうとした』。

見覚えのある『影』が、前に右に左に後ろにいたからだ。それも人ずつに道を防いで。

私の言葉は喉のところまで出かかって、結局は外へと発することができるできなかった。

私はどうすることもできないでいた。武器は持っていないし、攻撃魔法なんて威力は微々たるものだ。敵を倒すことはおろか、敵に傷を与えることすらできないだろう。

すぐさま無くなっていたはずの恐怖心が噴き出した。それは止めどなく溢れて、私をその穴へと陥れようとしていた。逃げなければ、すぐさま逃げなければ。だがアルシアさんを犠牲に逃げることはできるのだろうか？いや、私にはできない。ならどうするのか？どうすることもできない。

最悪の結果が出てしまっていた。私はすぐさま思考を振り切った。

そして思考を初期の状態へと戻し視覚へと意識をむけると……アルシアさんがいた。

何を当たり前のことをと思うだろうが、目の前にはアルシアさんのみ』立っていた。

……では『影』はどこにいったのだろうか？その答えは彼女の足元にいた。全身を赤く染めて地に伏していて。

「リユナちゃん！！！！門へ続く道は開けたから、早く行きなさい！！！！」

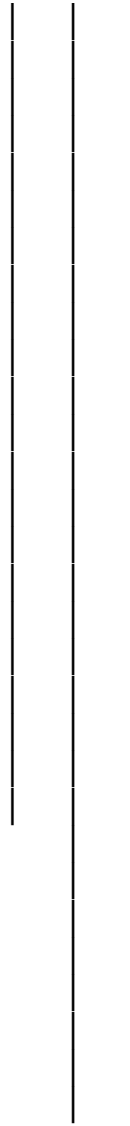
アルシアさんの叫び声が聴覚を伝って私へと響かせる。その言葉で私の足は無意識に動き駆けだしていた。前へ、血で染まった道へと駆けだした。

私は何も言わずにアルシアさんの横を通り過ぎた。それは恐怖によつて声が出なかったのか、はたまた感謝の意が絶えないからか。たとえ時が過ぎ去っていても答えは出てこないだろう。

後ろを振り向くことはできない。背中から感じる視線と、『影』の苦しむ声が響いているからだ。

アルシアさん、必ず生きて会いましょう。そのために、私は絶対に生きてみせます。

唯一の仄かな明かりを頼りに永遠ともいえる道を走って行った。



あれからどのくらい走り続けたのだろうか。何十分、何時間、もしかすると何分しかかかっていなかもしれない。だけど、確かに言えることは、もうじき『朝』を迎えるということだった。

右手の空が青白く照らされ始め、反対方向に昇っていた月は陰となる方向へと沈んでいた。それによって街の明かりも段々と明るくなり、ここでやっと朝の寒さを感じる事ができた。

その寒さは私の体温が通常よりも上がっていることも理由として挙げられる。先ほどまで走っていたから体が熱くなり、口元を覆い隠すようにしている布が邪魔で呼吸が儘ままならないでいた。呼吸が苦しいがアルシアさんに言われた通りにするためにこのままにしておいて、体力の回復とともに呼吸を整えるために速度を下げた。

そして歩くほどの速さへ戻った時に、周りの様子を見る余裕が出来始めた。これはちょうどいいと思って首を回して辺りを見渡した。

やはりというか、早朝だからなのか人気は全くなく、各家々は物音ひとつせずに佇んでいた。だが、この国の『普段』は、女の人の多くが起きており家事を行っているはずであった。では今朝はどうだろうか？音は一切しないし、人の気が全く感じられない。

一難去つてまた一難、『影』からの逃亡による恐怖心から異常な静けさからの不安が私を包み込んだ。まるでこの場に私一人しかいないかのような不安と焦燥。それは私が感じたことのなかったものだった。

私はすぐさま駆けだそうとしていた。それはこの場に残りたくないからか、私の気持ちから逃げようとしているからか。混乱している

私にとってはどちらも当てはまるものだった。

程なくして息が整った。だけど私の気持ちは未だに整理できていないでいた。これからどうするのか、アルシアさんはどうしているのか、アルシアさんを待たなければいけないなど、知るべきことやしなければいけないことが多くあった。

そのためにも一度休憩を取ろうと、近くの民家の壁へと背中を預けて座った。同時に感じたものは壁の冷たさと、身体の疲労であった。このまま座り続けると私は動けなくなるかもしれない。不思議とそんなことを考えていた。

元々体を動かすことは得意では無かったため、体力の限界はもうとつくに超えていたのだ。今の私はもう動く気力すら無かった。

まだあの『影』が近くにいてもかもしれないと『有意識』は訴えているのに、もう諦めると『無意識』がそれを聞こえなくする。それらを『私自身』はただ見ていることしかできないでいた。

その中で、私の体はとある一つの『音』を拾った。

それは地面を鳴らしている音。そう、たとえば『人が道の上で走っている』ような音だ。

呆然とそんなことを理解したとき、また『音』が聞こえた。

「……おい、だれかいなかあ……」

遠くで聞こえる『声』。その『声』は私には聞き覚えがないものだった。若者の声のなかには、不安と威厳が入り混じっているという

何とも不可解なものだった。

私はまたそのことを呆然と考えていた。今の私には声を出すことも無い、出す気力も皆無でいた。だから『誰も』声を出していない。

「誰かいませんかあ~~~~~？」

……この国は一体どうなっているんだ？何か嫌な雰囲気がある街だけど、今回はなおさら気持ち悪いように感じるな。何が起こったからこんなに静かなんだ？」

その『声』の主は段々と私に近づいていた。声ははっきりと聞こえていたが、対して私はまったく声を出していないでいた。

その声ができる方向へ顔を向けると、そこには一人の男性がいた。

そして、私と目が合った。

「お、おい！！大丈夫か！？しつかりしろ！！！」

今から君に聞きたいことがあるんだが、答えることができるか？」

すぐさま私の元へと駆け付け、まるで私の意識を落とさないように大きな声で話しかけていた。

答えを返そうとして、私は無意識にゆっくりと首を横に振った。

「そ、そうか。なら少しだけ動けることはできるか？ここで聞くのは君の体に障るから『私の陣』の中で聞こうか。」

私の陣は歩いて少しだからそこまでつらくないと思うが、我慢してくれ。」

すると、私の体は宙に浮くような浮遊感を感じ、同時に人肌の暖かさが感じた。それはとても優しい温かさだった。

それに安心したのか、私の意識はゆっくりと落ちて行って、そして黒く染まっていった。

後ほど意識が戻って、あの男性に質問攻めを喰らった。答えることが出来るものは答えて、答えることが出来ない又は知らないものは『分かりません』と答えた。

そしてある程度落ち着いたときに、逆に私から質問した。

「あの、私以外にも生き残った人はいますよね？」

その答えは苦い顔を浮かべて、

「……残念ながら、君『以外は』誰も出てこなかった。あとは全員死んでいる状態で発見された。」

その言葉に私は愕然として、自然と結び目がほどけた布が肌を伝って落ちていった。

私の鼻から感じたものは、『あの時によく臭った血』の臭いが。

そうして、今私の目の前にいる『はずだった』二人を思い出し、泣いてしまった。

アルシアさんとシャンは、一体どこへ行ってしまったのだろうか、と。

『生』へ向かったのか、『死』へと落ちてしまったのか、と。

〈番外編　．．．　一人の幼き獣人〉（後書き）

おつかれさまでした。

彼女の生存ルートを作るとは難しかったです。あれほどいた『影』からどのように逃げてゆくのかは、自らが作ったムリゲーを自分ですると同じようなものでした。

とにかく、彼女は『ママさん』が開いてくれた道を進んだというわけ。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

今回は無惨にもやられた『おじいさん』の予定です。

ありがとうございました。

〈番外編　．．．　元国王〉（前書き）

いらっしやいませ。

まさかの一ヶ月も時間がかかってしまいました。申し訳ございません。

残念ながら、内容のほうもあまり期待をしないほうがよろしいかとでは、どうぞ。

〈番外編　．．．　元国王〉

わしの名はシャヌルダ・克蘭デイスという。

初代国王である父の息子であり、また現国王である息子をもつ父でもある。

つまり、わしは二代目国王であり現在は隠居の身になっている。

しかしながら国政を手放すということではなく、身を引いた今でも政治の中核ともいえる財政に身を置いている。引いていてもその場に残るといふのは、なんともあべこべなことである。

とにかく、王権は息子に譲ったとしてもまだまだ若いため未だに目を離すことは少し危なっかしい。そんなことを言うわしも、息子からは『もう少し落ち着きを持ってはどうですか？いえ、持って下さい。』と言われるのじゃがな。

だが残念ながら、これは性格の問題じゃから直すことは不可能に近いもの。いや、無理じゃ。

しかしさすがわが息子、わしの事じゃからそのことは諦めて^{あきら}いるようだ。うむうむ、わしはそのように育てた覚えがあるからの。

最近は歳のせいなのか、わしの行動に支障が増え出してきたのじゃ。じゃからか、わしの趣味の一つである『街散歩』で歩く距離が年々短くなっていることに自覚を覚え始めた。

そこにわが息子が『どうやら老いがお迎えに来たようなので、制限

を付けさせてもらいます。」と棘とげが含まれているように受け取れる言葉を言ってきた。どうやらわしの言動にイラつきが溜まっていたようじゃ。

よかったの、スッキリできる機会が出来て。

だが、相手は『わし』じゃぞ？

偉大なる父を甘く見くびらないほうがよいぞ？

目の前には一人の少年がいる。

どこにでもいる……街路でよく走っている子供がわしの前で立っている。

だが、その少年が放つ『何か』は感じたことがないものであった。

その少年は普通の子供とは何ら変わらないものだった。しいて言えば、顔立ちが整っていて体格が筋肉質だということくらいだろうか。

じゃが、少年には似合わない『雰囲気』と『眼差し』を持っていた。いや、この少年は『少年』と言える者なのか？

わしはこのような者には幾らも会った、それはもう名を忘れるほど

に。じゃが彼らは全員成人を越した者だけであつた。その風貌をこの歳で持ち合わせているということはどういうことか。

さらに、その少年はわしらにこう言ってきた。

『自分がこの訓練を実施させている者ですが、何かご不満でも？』

周りの者たちからしたら、二人の王に喧嘩を売ったように見えるだろう。それがただの少年が行ったとしたらさらに上乘せに恐れるだろう。

じゃが、わしらには別の意図が感じられた。それも面白いことに。

口では空気を凍りつかせるような発言だが、目はこう語っていた。

『あなた方はどのようにこの世を見ているのか。』

問われたものは、その歳では到底考えられないものであつた。これでこの者は『少年』ではないと確信した。これからは心のなかで『若者』と呼んで行こう。

そして、わしはこう答えた。

「何、不満などないわ。逆に称賛してやろうかと思つただけじゃい。」

わしは笑いながら、しかし瞼は完全には閉じず細目で若者を見降ろした。

『この世というものは醜い生き物で包まれている。』

若者はわしだけ分かるほどの僅かな頷きを行い、隣のわしの息子へと目を向けた。

「真まことに父上と同感ですな。して、貴様の名を知りたいのだがよろしいかな？」

若者はわしとは違う明らかに分かるほどに頷きを返し、名を外へと晒した。

その少年の名は、『シャン・サムウイル』という。

周りの者たちからは『シャン』と呼ばれている。それは普通である。
『サムウイル』についてはまったくといって良いほど反応がなかった。それは当たり前のこと。

わし一人を除いて。

何故わしだけそのことに引つ掛かりを覚えたのか。それはある一つの『記憶』からだった。

とある一つの書類に書かれていたもの。だが、わし……だけではなくこの大陸全体にとっては轟くような『出来事』であったもの。

じやが、長年過ごしてきたせいなのか記憶があやふやとなり、今に
いたっては存在のみしか覚えていなかった。

はてさて、わしの息子はこのことを知っているのだろうか。

そして、若者が『問う』ことに気付いているのだろうか。

まあ、期待はしていないがな。

やはり、

やはり気になった資料というものは、そうそう簡単な場所へは置いていないだろう。

ため息をついて最初の目的地であった城の図書室から出て行った。

そうして、見当がつかなくなってしまったわしの体はあてもなく長く暗く染まった廊下を歩み始めた。

あの若者から別れてすぐさま城へと戻り、『あの書類』を探すために行動を開始した。

しかしわしが覚えていたものは古すぎたのか、はたまた機密性が高いものなのか、どちらも当てはまるのかなか見つからなかった。

『たかが図書館ではみつかるはずがない』と思っているだろうが、この城にある図書館には蔵書だけでなくこの国に関する資料が多く置かれている。他国から来た者が見られるものから、この城のみのも者だけが見ることができるものもある。もちろん隠すべきものは別室へと隠している。

そして今まさにわしはその部屋へ行き、隈なく探したがまったくもって姿形すらなかった。

先ほどまで行っていたことを思い出し、再度ため息をついた。

わしはどこまであの『若者の名』に執着をもっているのだろうか。

わしはどうしてあの『若者の姿』を何度も思い出してしまうのだろうか。

わしは『あの書類』を一体どこに置いてしまったのだろうか。

いろんな種類の問いが幾多にも頭の中に積み重なっていった。

しかしわしの頭はそれらの問いに満足する答えを見つけないことができないでいた。

どうして、どうしてと、わしに対する問いから、何故、何故と、わしを恨むかのようなものまで出、混沌のように混じり始めた。

わしはどうしてそれらのことを覚えていないのか。

わしは『老い』という理由でそれらを片付けるつもりなのか。

わしはどうしてそれらから逃げているのだろうか。

それらの自念は何時になっても消えないようにこびり付いてる。拭いても、磨いても、削っても落ちない汚れのように。その汚れが、わし自身の汚点のように一生離れないもののように。

その汚点から目をそらすように頭を振って、意識を視覚へと移行させた。しかし、突如の行動で血が回らなかったのか、意識の強引な切り替えによってか、一瞬のめまいを感じて歩んでいた足を止めてしまった。

無意識に片手で頭を抑えめまいを収まるように念じ、それに応じるように徐々に視界が定まってゆく。

その視界には、奥に進めば進むほどに闇へ通^{つう}ずるかのような廊下、それらを儚^{はかな}く優しくに照らしながらもあまり効力を見出していない窓から降り注ぐ月光、そしてその月明かりを補^たうかのように薄い赤で廊下を染めている壁掛^{たいまつ}かりの松明。

毎日をこの城で暮していれば必ず目にする光景。それはただただ普段の日常の一瞬。わしはその一瞬を何度も見た。何度も見てこころで過^{すご}してきた。

じゃが、その光景は『日常』に感じていたものではなかった。

視界のなかで唯一動いているものは、紅^{あか}く灯^{たい}している松明と、それによって全体へと橙^{だいだい}に染めている光であった。

視界のなかで唯一音を出しているものは、燃える原因を未だに利用

している松明と、窓閉めの僅かな隙間から漏れ出しているかのよう
に高く小さな音を出している風。

それは、『異常』とも感じ取れる時間のようにもあった。

その時間を初めて感じたのは、今このとき。

何故か。何故この時にそんなことを感じているのだろうか。また一
つ頭の中に問いが投げ込まれたが、その答えは問いと結び付かなか
ったようだった。

そうして、『異常』と感じてついに恐怖が湧きだした。

瞬間。

わしの耳朵に聞こえてきた――いや、響いてきた――これでも当てはまらないほどに痛みを伴った音が捻じ込まれた。

その衝撃音の種類は、どう表現すればいいのか。破裂、爆発とは程遠いほどに粹から飛び出している。

そう、まさに『衝撃』をこの城に放ったかのように、石の粉末が僅かに降り注ぐほどの振動が響いた。

この城はある程度の衝撃には強くしており、魔法などのものでもそれほど支障をきたさないようになっている。

そう、なっているにも関わらずに、『音』というありふれたもので城を揺らぐことができたのである。

このことは、まったくもって非常識、異常、異端である。

さらにそのような『音』が出たということは、それを出した者が必ずしもいるということ。

わしの頭の中は、先ほどの問いによつての混雑した状態からまるで『音』によつて全て消えてしまったかのように真っ白となっていた。

現に、冷静に判断できるまでに数瞬も必要になっていたのだ。

すぐさまその『音』の原因となっている外へと目を向けようとするが、如何せんこの高さで暗さだと人物像はおるか姿形までも漆黒に染め上げられて確認することができない。

失態。なんという失態なのだろうか。よりもよつてこんな時に襲撃らしきものを喰らうとは。

わしはすぐさま行動へと身を動かした。向かう先はわしの自室。隠居としての部屋を設けた中には、必要最低限の装備がありできるだけ用意していききたい。

一心に新たな目的地へと歩み始めるが、違和感がすぐさまやってきた。それは、わしの頭の中へと、心の中へと。

それはたった一つの静かな違和感。この時だからこそ気付くことができる違和感。

『どうしてこんなときに、この城に人氣がまったくいないのだろうか。』

そういえば、

そういえば、今さらながら思い出した。

わしが図書室へと足を運んだ時には書司がちらほらと見えていたが、出ていくときには姿が見当たらなかった。その時には、居なくなっていたのかもしれない。しかしたった数人しか見ていないのに、この推測は大げさすぎるだろうか。

だが、現にわしの周りには人の気が一切しない。何度も頭の中をめぐりめぐっているが、やはり答えは出てこなかった。なぜなら、知らないからだ。

歩みから早足へ、早足から駆け足へと気持ちを表しているかのよう
に足を激しく動かす。しかし、わしの体は老体のせいなのかあまり
速度は出ないなかで廊下を渡っている。

だが、そんなことは気にするものではない。否、考えてもいない。
すぐさま自室へと戻り、最低限に装備を整えてからにしようと。

そして、進む道が二又へと分かれる場所へとたどり着いた。

左は息子のものである王室。

右はわしのものである部屋。

当然先ほどの考えからすると、すぐさま右へと向かう、つもりだ。

そう、『つもり』だったのだ。

その方向から、この城の気配『に似ている』者たちがいたからだ。

つまり、決して『城の者』ではないこと。

導かれるものは、『敵』ということ。

これは、考えすぎたものなのかの？

答えは――残念ながら、『敵』であつた。

それは、三人の姿をした『影』。視線はわしへと突き刺していた。まるで、わしがここを通ることを知っていたかのように。

だが、わしの部屋というものはあまり人目につかないところにあり、あまり城の者たちには知られていないのだ。知っているとしても、

息子やわしの部下や、わしと同じ隠居の身をしている者くらいである。

ならば、この『影』は何故わしの部屋の在り処を知っているのか。

またもや疑問が積みだした。しかしこの件については本人に聞いても得るものは無いだろう。

ものは試し、『聞くのは一時の恥』と言う諺を『ある者』から聞いたことがある。

それを今から行おうと思い、すぐさま『影』へと向かった。

その答えは――やはり、剣を抜いたことであつた。

それを確認したときには『影』はわしへと駆け出し、対するわしは魔術を唱えていた。

剣と魔術、どちらが早く攻撃を行えるのか。普通の者だと『剣の方』だと答えるのが当たり前である。

だが、その常識をわしは覆した。^{くつがえ}何故なら、わしの目の前には六つの氷の矢が現れていた。

その氷矢は止まることなくまっすぐに『影たち』へと向かっていった。まるで『それだけしか知らない』かのように。

そして『影たち』は、避ける暇も無く無残に貫かれていった。貫かれたものは操られていた糸が切られたかのように生気を失い、人形のようにその場で倒れていった。

しかしその後ろにも『影』がいた。3人以外にもまだいた。3人以上後ろに立っていた。

まさか、わしだけを相手にそれだけの人数を揃えるとは、よほど大規模な集団であることが伺えた。

つまり、『影の長』は計画的にこの騒動を起こしたということが分かる。

わしはすぐさま次の魔術へと移行する。威嚇以上の攻撃を行った後は、この状況では『この方法』だけしかない。

そのわしの次の行動に気付き、阻止しようと駆け出す。それは、わしを確実に殺しに入るものであった。

先ほどまでの半分までの距離まで詰められたときには魔術はもう完成し、あとは『相手を待つ』のみであった。

そしてその殺しの剣はわしの頭上へと到達し、無慈悲にも振り落とされた。

聞こえたのは、剣が風を切る音、そしてその後聞こえる『はず』であろうわしの悲鳴。

しかし半分は正解、もう半分は『不正解』となった。

では正解はどちらなのか。もちろん相手にとっては前者が嘘でありたいもの。逆にわしは後者が不正解でありたいもの。

さて、どちらが『ほんもの本者』で、どちらが『にせもの偽物』となっているのか。

風を切る甲高い音。これは『この世の常』であり必ずといっていいほど聞こえるもの。

そして、わしの悲鳴は『何か固いものが碎け散る』ような異様で異質なものであった。

それもそうだろう。今『影』が見ているわしの姿は、色はまったく変わっていなくただ『わしの頭が碎けている』ように見えているからだ。

さらに血という赤い液体は全く出までず、代わりに無色透明な液体がチロチロと碎けた頭やその破片から出ていた。

つまり、そのわしの姿をしているものは『氷で偽ったもの』である。
それに気付いた『影』だが、残念ながら時は止まらず進み行く。

まるで『停止』の言葉など知らないように進み続けるものが『影たち』へと向かっていたから。

そしてそれも気付いたときには、冷たい無色の矢が己おのれの体を貫いたときであつた。

声を一切外へと出さずに、静かにしかし乱雑に倒れ行く。

わしはその光景を目に焼き付けることはしなかった。

何故なら、『敵』だからである。

剣が落ちる音などを背中と耳で感じながら、その道とは違う左の道へ向き、再度わしの部屋へと通ずるであろう道へと歩みだした。

その間は、わしが出す靴くつの音と呼吸音のみであつた。

不覚。

まさかの二度目の不覚。もうこれは歳のせいとまでなってしまう。

じゃが、わしはそれを許さない。何故なら、わしの心はまだまだ現役なのだから。たったそれだけである。何もおかしいところはないはず。

今わしの目の前にある扉の先には、我が息子であり現国王である王室。

どうやら『影』を倒している間に『影が居た道の先には自分の部屋』から『影が居た道の先には息子の部屋』と勘違いをしてしまったようだ。

……これは歳のせいで完全に当てはまる。

いいだろう、わしは頭が呆けていることを認めようではないか。別にこれといって不便はないのだから。

強引に開き直りながらも、息子の安否を確認するために扉の取っ手へと手を掛け開けた。

広がった光景は――やはりというか、何事もなくただ部屋の明かりが灯されていない暗く染まったものであった。

しかし肝心の息子の姿が人目では見つけることができなかった。つまり、この部屋には現在居ないということが分かる。

では、息子は一体どこへ居るのだろうか？やはりというか、この疑問も答えの欠片も見つけることができなかった。

だが、ここまできて引き揚げるわけにはいかない。もしこの部屋を後にして自室へと戻ろうとするならば、『影』の援軍がそこに居座っていて襲撃を受けるかもしれない。

そのような危機的状況は現在では出来るだけ回避したい。この城にはわし以外の生存者は限りなく少ないだろう。その生存者を探しているうちに、やはり幾らかの襲撃をくらうだろう。

ならば、わしはこの部屋へと居続けることが最善ということになる。ついでに『あの書類』がこの部屋にもあるかもしれないというささやかな希望を成し遂げることができる。

このようなことを『あの者』はたしか、『いつせきにちょう』とか言っていたかの？

ともかく、それらの小さな利益を得るために部屋の中を散策し始めた。

結果だけを言つと . . . 『あの書類』はすぐさま見つけることが出来た。

それが隠されていた場所は、机の右側の一番下にある引き出しの裏に置かれていた。

つまり、意図的に『この書類』を人目から逸^そらしていた。

では何故わしは見つけることができたのか。それは、わしとほぼ同じ隠し場所だからだ。

流石我が息子、こんなことまで似ているとは思わなんだ。ほっほっほ。

それはともかく、ようやく意中の代物を手に入れたのですぐさま読んでいく。

出来れば明かりを灯して読んでいきたいが、残念ながら『敵』に場所を特定されてしまう恐れがある。

なので、歳による老眼も合わせもってところどころ読めないところが出てしまった。

その内容は以下のとおりである。

- - - 洗暦945年 神居なき月 16日目 紅き日

名、アル ・サムウイル

其の者は長きに渡つた隣国であ、『フェルジエ王国』
との戦め、さに協定の役を執り行うという、大変偉業
な仕事を行った。

其の者は我が国克蘭デイス王国であり、また我が
国の騎士であつた。其の者は他の者たちからはとても
まれであり、尊敬の念を抱いている者もいれば、
を抱いている者も
いたらしい。

其の者が戦争を止めに入つた理由は報告され
いないが、あ
る親しいから訊くとこのような答えが返ってきた。

『彼、あんな見た目のやつでも、根は真面目』だそうだ。

あくまでこれらは聴取なので、確信性は低いとみられる。

以上、其の者についての報告をここに記し終える。

クデ ・タ - - -

最後まで読み終えてわしはすぐさま思考へと沈んでいった。

沅暦945年は確か今から14年前であるはず。しかしわしがこの書類を初めて見た日は、わしが未だ現役で国王を担っていたころのものであった。しかも、わしの僅かな記憶によるとこの書類の日にちはこんなにも最近のものではない。

ということは、誰かが偽装をして偽物をこの部屋に入れたのか、わしの勘違いなのか……

すぐさま見直そうと今一度書類へと視線をむけるが、ここで想定外のことが起こった。

それは、『意外でありこの場には似合わない人物』の登場であった。

そのものは、若い『兵士』の姿であった。

『兵士』の姿を見て、わしはこう思った。

「この者が、最後にわしと戦う者だ。」と。

結果だけを『思う』と、わしは、殺された。

〈番外編　．．．　元国王〉（後書き）

おつかれさまでした。

まず、ここまで投稿に時間を掛けてしまい申し訳ございませんでした。

活動報告にも書かせていただきましたが、利き手の負傷と多忙な生活によりパソコンに手をつける日が片手に収まるほどの数日だけでした。

また、その数日の中でも2〜3時間しか書けず、内容のほうもただただ思ったことを書き連ねるだけのものでした。

そのため、内容に不満をもつかもしれませんが、いつしか生活に安定を持ち始めたら、僅かながらにも修正を加えていきたいと思っています。

さて、おじいさんのお話となりましたが如何いかがでしょうか。

人物紹介のほうでも添えるように書きましたが、名前に引っかけかりを覚えたので調べさせました。

自分的には、書類の内容がまったくもって思いつかなかったのただテキストに書き殴りのように打ち込みました。

後々のお話にも、このことは関連を持たせるようにしています。

乞うご期待。否、期待。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

今回はまさかの未定。どうしよう……

ありがとうございました。

〈番外編　・ ・ ・　影となった青年〉（前書き）

いらっしやいませ。

一日の休暇を与えられたので思う存分書きました。
内容のほうは、ボチボチです。

ちなみに、性格が徐々に破綻してしまっていると思いますので、嫌悪を抱く方はすぐ『戻る』を押してください。

では、どうぞ。

〈番外編　．．．　影となった青年〉

僕の名前はカム・トラニス。

克蘭デイス王国で『軍』の兵士をしているものだ。

兵士といってもただただ鍛錬をし続けるものとは、あることがきつかけで無くなった。

午前午後の鍛錬を終えると街へと出、住民の仕事の手伝いなどをしている。これは『あの子』が指示したものだ。

初めてそれを受けたときは『何で僕たちがそんなことをしなければならなんだ。』と小さな愚痴をこぼしながらしていた。

しかし、僕たちが手伝ったことで僕たちに『笑顔』が多く向けられるようになった。

それを行う前は、『軍』にいた一人の兵士が暴力沙汰を起こしてしまつてそれ以来評価が下がっていた。

しかし『あの子』によって、僕たちは生まれ変わったのだ、と証明できた。

そして今でも楽しく、賑やかな生活を住民と共に過ごしていた。

そう、僕『以外』は。

あまり自己を主張しない性格をもつ僕だが、一つだけ揺るがないも

の……個性があった。

それは、『負けず嫌い』。

この立つた一言だけを聞いたら『子供っぽい』と思うことだろう。現に、両親から未だに言われ続けている。

だけど、僕にとってはとても重要なことで、とても『自分らしさ』を出すことが出来るもの。

それ故に『負けず嫌い』もとても役に立つことが多かった。

例えば、『軍』の兵士の中でも武が一番になれたこと。

例えば、『軍』の兵士の中でも知が一番になれたこと。

例えば、『軍』の兵士の中でも国民から多く評価をもらっていること。

すべて僕が自分で言い、すべて僕が得ることが出来たものだった。

だけど、それらすべては『ある少年』から命じられて得たもの。

まるで宝箱の中身を教えられて開けるようなものだった。事前に知らされてそれをもろう。まるでそのようなもの。

このことは、僕の『個性』がまったく許さなかった。

行動は僕自身が行ったものだが、それらはすべて教えてもらったものの。

このことは『得る感激』よりも、『命令された屈辱』の方が勝っていた。

それは何故か。答えは決まっている。

『僕より年下の少年が僕に命令している』からだ。

これは屈辱以上の悔しさを受けることである。よりにもよって年下の子供である、大人が、子供に。

僕はこれがとても許せなかった。とても悔しかった。そして、とても憎んだ。

例えば、少年は僕より武が高かった。

例えば、少年は僕より知が大きかった。

例えば、少年は僕より国民に愛されていた。

僕が少年の命令に従っても、少年以上のものは得ることが出来なかった。いや、僕は途中で止まってしまったのだ。

それは何故か。それはとても単純で簡単で安易なもの。

ただただ、『争う方法を変える』だけであった。

目の前に居る人は僕の『協力者』。

そう、文字のとおり僕の手助けをしてくれる人。

僕の目的は『少年に勝つ』というもの。そしてその人はそれを快く協力してくれる。

しかしその人にも『とある目的』があるらしい。

つまり、『私は貴方の目的を達成させるので、私の手伝いもしてください』ということだ。

僕はすぐさま引き受けた。

理由はもちろん、『僕の目的が叶う』から。

交渉が成立し、その人の部下に混じって行動を共にした。

そして、部下と同じ『懲罰』を受けた。

軽い失敗なら殴られる程度、重大な失敗ならその場で斬首。

それは部下が減ろうが消えようが関係ないものであった。

しかしどうだろうか、僕が見た中では部下は殺された人以外は誰一人逃げようとはしなかった。

何故。何故だろうか。彼らも僕のように何か目的があつて動いて
いるのだろうか。

けど、僕にとってはそれは些ち細こなものである。

結局、彼らは殺されるのだから。

第三者によつて。

さて、誰だろうか？

僕の目の前に広がるものは一体なんだろうか？

いや、それが発生した瞬間を見ていたので分かっているはずだ。

では何故、僕は『これ』が何であるか理解していないのだろうか。

感じるものは、僕の体に不影響なものであった。

そう、例えば紅色を誇張しすぎて目が沁^しみるような痛み。

そう、例えばもう二度と音を聞くことが出来ないのではないかというほどの大音響。

そう、例えば一瞬で肌が焦げてしまうほどの『熱い』を通り越して『痛い』と感じる温度。

それらはすべて一つのもので引き起こしたものだ。

『炎』、それは『炎』というものである。

しかし、目の前にあるものは果たして『炎』というものではおさまるものだろうか？

いや、僕にとっては『炎』とは考えられない。これだけのものは見たことも、ましてや聞いたこともない。

信じられない。こんなものは信じられない。信じたくない。

そして、さらに信じられない理由があった。

少年。

そう、**『あの少年』**がこれを引き起こしたのだ。

こんなことは有り得るだろうか。僕は信じたくない。

あんな子供のどこにそのような魔力があるのだろうか？

あんな子供がどこで知ることが無い魔法を得ることができたのだろ
うか。

ありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえない

ふざけるな。あんな子供がそんな魔法をだすことはできないはずだ。そつだ、そつだこれは空想だ。夢想だ。妄想だ。幻想だ。架空の景色なんだ。

では僕が感じているものは一体なんだろうか。これもそれらに当てはまるものだろうか？

しかし、『熱』、『音』、そして『光』が僕に痛みという情報を与えてくる。

ならばこれは現実であり、事実と当てはまる。

そうなると、僕は理想と現実を同時に感じているのだろうか。

否。答えは『ありえない』になる。

僕ら人間はそう簡単に二つ同時のものを捉えることはできない種族なのである。

どちらか一方。『現実と向きあう』か、『現実から目を逸らす』のか。

『現実的』か、『非現実的』か。目の前の景色に関するか関さないか。

『夢を見る』か、『夢を見ない』のか。

僕はこれからどちらを選んで生きてゆくのか。

[illegible]

僕がこの城へと向かった理由、それは『協力者』からの指示だった。その人曰く、「あなたには大切な仕事をしてもらいますので、城の中へと入ってください。」と。

そう、たったこれだけしか言われていないのだ。

これでは『協力者の目的』が分からないし、僕が裏切られて殺されてしまうかもしれない。

一抹の不安を持ちながらも、『少年』と二又の道で別れてすぐさま駆け出した。

目的の場所は分からない。けどただただ走って行くと考えることが少なくなる。

僕の頭の中には恐怖と不安と憤怒が入り乱れ、混じり、混沌へと化していた。

それは、『少年』が一体何者なのか。

それは、『少年』によって殺されるのではないか。

それは、『少年』が知らず知らずにもっと強くなっていたこと。

それらの混沌は『苛立ち』へと変貌し、思わず舌打ちをしてしまうほどだった。

情けない。まったくもって情けない。情けなさ過ぎる。

何故僕は、普通に生まれて普通に生きてきたのだろうか。

何故僕は、あの時に『少年』を殺さなかったのか。

何故僕は、もっと努力をしなかったのか。

それらすべては、僕の慢心から生まれたものだった。

自覚していても苛立ちというものは収まらない。ましてや、今まで
の自分に悪感をもよおしてしまうほどだった。

後で悔いる。後悔。まさに文字通り。

苛立ちと後悔を身に沁みこむのを抑えるために、一度駆けていた足を止める。

思っていたほどに距離は無く、息はすぐ整った。

しかし心の中はまったく整わなかった。

だから僕は、体で発散することにした。

どうやるのか？それはとても簡単なもの。

『さっさと命令を遂行して、思い切り暴れてやる』

近くに潜んでいた『影』を呼び出し、目標を確認することにした。

ついでに、『そいつ』を切り殺した。

発散。だたの発散として。

扉。

目の前にあるのは、大層立派に装飾されている扉がある。

これを見てみると、何だか苛立ちが再び湧き出してしまいそうだった。

だから僕はそんな邪念を振り払うかのように、手早く取っ手へと手を伸ばし、豪快に開いた。

そう、ここは王室。

『あの時に見に来ていた男』の部屋なのだ。

あんな見た目だけが厳^{いか}つい男がこんな部屋に住んでいる。

そんな現実が、また苛立ちを沸かした。

しかし今はどうだろうか。部屋には月の光以外はまったく明かりがなく、ほぼすべてが暗闇に染まっていた。

床も、壁も、本棚も、机も、天井も。

明かりが灯されていれば一体どんな風な部屋なのか検討もつかないほどだ。

それらに興味はまったく湧かないため、この部屋に何者かいるのか目だけで探し始めた。

しかし、どうやら『目標の一つ』がこの部屋にいたことが分かった。

その証拠に、『光を宿した碧眼』が僕を見ていたからだ。

思わず僕はつぶやいてしまった。

「手っ取り早い。」と。

すぐさま言葉を正して、その人に語りかける。

「こんばんわ、シャヌルダ元国王。如何お過ごしですか？」

まずは相手の緊張をほぐすために優しく。

しかし、本心は相手をさらに恐怖へと陥れるために。

「……あのような者に命令をしたのはお主か？」

問いは、警戒を含んだものだっただ。

もちろんそうだろう。僕がさらに増幅させたのだから。

「いえ、僕が『あんなもの』といっしょにしないでください。泣きたくありませんよ。」

ご冗談を、と最後に付け加えて笑った。

もちろんこれは本当のことだ。

実際、『あんなもの』がそれほど城内に侵入しているとは思わなかった。

まあ、僕には関係の無いことなただけだね。どうでもいいや。

「……それが真^{まこと}だとしても、何故お主がここに居るのが説明できない。」

未だに警戒を解かない元国王。いや、さらに増したかな？

「説明？ そんなものは簡単ですよ。『あの子』と一緒に入ったからですよ。」

「そんなものが『説明』になると思っておるのか？」

もちろん、そんなことは当たり前だ。

わざとそう言ったのだから。

もつと、『警戒をしてほしい』からね。

「ええ、こんなもので理解してもらうことが出来ないことは承知ですよ。」

僕はまた笑いながら、腰に携帯していた『武器』へと手にかける。

「だから、今から理由を作ろうと思ひましてね。」

ゆつくりと、相手の警戒をさらに極めるために。

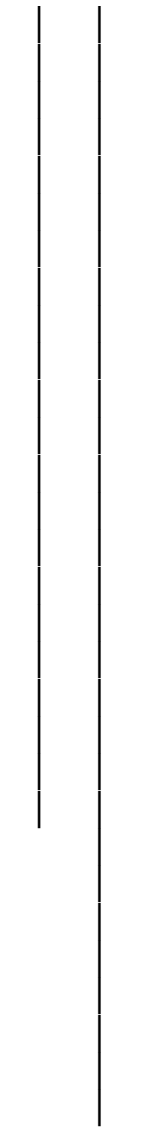
「だから手伝つてくれませんか？」

そして抜き取り、剣先をその人へと向けて。

「僕に殺されるように。」

言い切ると同時に、僕は駆け出した。

理由作りのために。



「たわけがっ！！そう簡単にはやらせんわ！！！」

反論はもちろんあった。そうでないと『楽しめない』よね。

元国王が言い切るときには、三本の氷矢が僕へと向かっていた。

もちろん僕はその矢へと向かっているために、思っているほど『少し』速く感じていた。

「分かっていますよ。」

『剣』で矢たちを壊して、再度剣先を相手へと向ける。

「なっ！！その剣は一体何じゃ！？」

自慢の魔術がこうも簡単にやられるとは思っていなかったようで、すぐさま僕が持っている剣へと疑問を向けた。

「さすがですね。さすがは『元国王』といいましょうか。」

未だに笑みが解かれていなかったようで、なにやら笑いながらの反応となってしまった。

けど今としてはそんなことは些細なもの。殺すことには無関係だ。

また、氷矢が僕へ向かってくる。しかも、数は十を超えるほどの群で。

これでは避ける隙間も、暇も無くなった。このままいけば、僕は無残に体を貫かれるだろう。

だけど、それは僕が『何もしなかったら』のお話。

もちろん僕は生きている。生きているからこそ、『抵抗』する。

3・4本を『壊し』、残りのものは魔術で溶かす。

「『メニイmany・ファイアfire・ボールball』!!!」

僕が唱えると同時に体のなかから魔力が抜け、僕の目の前で火球となつて飛び出してゆく。

その数は、残りの氷矢の数と『ほぼ』同数。もちろん相殺した。

そしてまた、僕は相手へと短い距離を駆けた。

僕の目の前にあるものは、窓と月明かりと元国王と、そして火球だった。

僕はわざとあの時に少し多めに出したのだ。その結果が、この光景だ。

元国王はすぐさま魔術を唱え始めた。

「『アイスice・ウォールwall』!!!」

それは白い壁が床から急速に現れ始め、互いに相手の姿を隠してしまった。

それを見て確認し、しかし足は止めない。

火球が当たった。しかし壁はなんともなかった。そんなことは分かっていた。

それでも走るのをやめない。ただただ、剣を構えるだけ。

剣を振りぬき、壁を『壊した』。

白い壁はあっけなく崩れ落ち、相手の顔を見ることができた。

そして僕は笑い、相手は驚愕の表情を表した。

そんなものは関係なく、剣は再度振りきった。

剣は元国王の胸を斜めに切った。

手ごたえは、とても硬い『氷』だった。

目の前の元国王が受けた傷には無色の液体が流れ、その傷から派生したように罅^{ひび}が四方八方に広がっていた。

つまり、これは偽物だということ。

油断した。さつさと始末できると思っていたけど、まさかここまで手の込んだ抵抗をしてくるとは思わなかった。

一瞬の推考をしていると、後ろから人の気配と殺気が感じられた。

僕は本能でその場から避け、すぐさま後ろへと剣を構えた。

やはり、そこには殺したと思っていた相手が立っていた。

恐る恐る僕が先ほどまでいた場所へと目を向けると、そこには氷矢が5本刺さっていた。

「あはは、僕ほどの相手にここまでしてくれるなんて、とてもうれしいですね。」

僕は正直な感想を言い放った。それには少しの厭味^{いやみ}も込めて。

「……お主が持っているその剣が一体なんなのかが分かん限り、わしは冷静且つ本格的に本気を出さねばならん。」

僕を睨みながらの回答。その答えに僕はとても満足した。とても。

僕が元国王相手にここまで良い戦いができること。このことは僕の『少年』への対抗心にとってはとても良い薬だった。

もし『少年』がこの相手と戦うとならば、今みたいな状況を作るのは困難だろう。

僕の想像はとても広がっていた。そしてまた一つ想像が浮かぶ。

『もし現国王と僕が戦うことになったら、一体どんな結果になるのだろうか？』

例えば、現国王はどのような戦略を執るのだろうか？

その時に、僕はどのように攻撃を受け流すのか？

そして、どうやって僕が勝つのだろうか？

それらで僕の好奇心が疼いた。それは誰も考えたことが無いもの、それは誰もが考えたくないもの。

『国王』という肩書きは、世間からしてみれば『貴族の中の貴族』、この国の長』ということである。

その国王に逆らう者は『処罰』されてしまうか、『抹消』されてしまうか。

他の国ではそんなことが起こったようだが、僕が住んでいる『この

国』はまったくもって聞いたことが無い。

たとえそれが裏で行われているものだとしても、『協力者』に出会うまでは考えたことが無かった。

つまり、この国はそれほど表で愛想よい振る舞いをしていたという訳だ。

そこで、ふと現状を確認してみた。

今日の前で相手をしているのは元国王。

対する僕の手には一振りの『特別な』剣が握られている。

そして先ほど、僕は一度殺人未遂を行った。

つまりこれは、国王への『反逆』なのである。

さらに、僕で初めてという記憶。

僕は歓喜した。

僕は初めて、『初めて』を得ることができたのだ。

つまり、『僕が一番』だということ。

王相手に攻撃を行った。

王相手に殺人を行おうとした。

王相手に、王を殺そうとした。

無意識に笑みを浮かべてしまった。しかし、僕はあえてそれを隠さなかった。

僕が喜んでいるところを見せるために。その笑みの意味を知らしめるために。

しかし、

「……お主はいきなり何で笑っておるのだ？」

残念ながら、意味を理解してもらえなかったようだ。

『ならば、』

元国王へと駆け出した。

「いえいえ、ただおもしろいことを思いついただけですよ。」

『その身に、』

僕は剣を構え、相手は魔術を唱え、

「あなたには理解をしてもらおうと思って。」

『この悲しみを、』

相手の杖を斬り、再度構え、

「だからあなたにも笑ってもらおうと思って。」

『刻み付ける。』

今度こそ、紅き血を身に浴びた。

「この真実を。」

さっきまで動いて息をしていた『モノ』に剣を突き刺す。

もちろん刺す場所は、人間の急所の一つである心臓部分。

そのため、傷口から止めどないように血がゆっくりと湧きだした。

こうして、僕は確信した。

元国王は、今ここで死を迎えた。

送った者は、ただの一介の兵士である僕。

この事実思わず笑みをこぼしてしまった。

けど、この場で見ているものは誰もいない。

『この遺体』を好きなだけ、どんなことをしても僕は咎められない。

嬉しい。

感想はたったそれだけ。

だけどその嬉しさは、今までの人生のなかで一番を飾るものだった。

王に反逆を起こしたのは僕。

王をこの手でとどめをさしたのは僕。

この二つの事実を起こしたのは僕。

この二つの事実を最初に起こしたのは僕。

一番。何もかもが一番になったように感じる。

僕は、笑った。

声を殺し切れているだろうかという心配などを余所に、笑った。

この静かな部屋で、僕の声は少量も響いてはいなかった。

ならば、僕はうまくできているのだろう。

でも、今はそんなことなどどうでもいい。

今は一頻り笑い飛ばしたい。

けど、今は任務中。命令されたことをただ黙々と熟さなければなら
こな
ない

ふと、その『遺体』が持っている書類に目が付いた。

この書類は一体何なのだろうか。

まるで僕の視界から隠すかのように身の内側へと持っていた。

それほど重要な内容が書かれているのだろう。

けど、『今の僕にしてはどうでもいい』。

その書類に手をかけ、奪い取る。

暗くてよく見えないが、それほど重要なことは書いていなさそうだと判断した。

ならば、処理しよう。

「『fire・ball』」
ファイア ボール

そうして、手元にあった書類は燃え始めた。

そのときに火が明かり代わりとなり、ほんの少しだけ内容が見えた。それは、たった二つの『名前』だった。

一つは、『アルクド、サムウィル』

一つは、『タムソン・克蘭デイス』

その二つの名前には、見覚えのあるものはいっていた。

けど、その名前は火によってすぐさま黒く染まり、そして塵^{ちり}となった。

瞬間、扉が開く音がした。

僕がそこへ目を向けると、二つの人物がいた。

一人は、現在の国王を勤めている『男』。

一人は、僕が憎んでいる『少年』。

二人は僕がいる方向へと目を向けていた。

しかし、視線は僕の足元にいる『もの』へと動いたいた。

それらを見た僕は、

「あつ、シャン君。『遅かったね』」

『嗤^{わら}った』。

〈番外編　．．．　影となった青年〉（後書き）

おつかれさまでした。

今回はカム君を主軸に話の視点を変えてみました。
実はと言うと、この子が一番扱いづらかったです。

どれほど負けず嫌いなのかを表現するのが難しいからです。
自分は物事には関心が無いので受身派です。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。
できるだけ早く修正します。

次回も未定。候補は二つ。どっちにしようかな。

ありがとうございました。

〈番外編　．．．　現国王〉（前書き）

いらっしやいませ。

奮起しても空しくそんなに書けませんでした。まさかの4500文字。

待っていても意味が無かったように思います。
申し訳ありません。

では、どうぞ。

まさかの名前表記間違いがあるとは……。修正しました。

〈番外編　．．．　現国王〉

私の名はナヴァジス・克蘭デイスという。

自慢することではないが、克蘭デイス王国の国王である。

二代目である父から王権を承り、私は第三代目である。

第一代である祖父の政権を知り、第二代目である父の政策を学び、第三代目となった私でそれらの影となつているところを正して行つた。

そうして今日まで、罪を犯した者の人数は僅かにだが減つた。

そのことを父に報告すると、『おお、よくやった。』と私の顔を見ずにそう言った。

……後日から一週間、飲酒を禁じたら泣いて謝ってきた。

ともかく、私がここまでできたことには父上の存在が大きかった。

私が物心着く頃はもちろんながら政権を振るっていた。

その光景と結果は、今の私でも素晴らしいと思うほどの出来であった。

王室へと納める税の量や種類、罪を犯した者への処罰や処刑、他にも隣国との交易などを全体的に力を入れていた。

そして父上の家臣たちは突如出された政策に驚くことなく、逆に納得しながらそれを行っていった。

それらを見て私は、『自分も父上のように素晴らしい国を築き上げたい』と。

その思いは成人となっても尽きることなく、父上から王権を継承した翌日から政案を出していった。

成功したものもあれば、失敗したものもあった。

そして、その代償も小さいものから巨大なものまであった。

もちろん、そのことに関しては反省はしている。

しかし、後悔はまったくない。欠片も、微塵も感じていない。

私がだしてきた提案の代償については十分に承知していた。

『代償』は必ず払わなければならないもの。それは、王位を継承したときには覚悟していた。

そして、それらの代償があったからこそ、このような国が出来た。

まだまだ改善の余地があるものは多くある。

例えば、私が管轄している防衛について、ほかにどのような防衛方法があるのだろうか、とか。

例えば、外交についてどのような交渉を持ちかけようか、とか。

そして、私が一番に悩んでいるもの、私が憎んでいる問題点。

『クレスラン・ティフィラール』という存在である。

私が初めてその者に出会ったのは、父上から王位を受け政権を振り始めて一か月経った頃だった。

その時、私は王室で慣れてきた書類処理を行っていると、家臣の一人が入ってきた。

その者曰く、「是非ここで働きたいと申す者がいます。」という。

確かにこの城で働きたいと言う者は大勢いる。その気持ちは私には分かる。

しかし、言葉には簡単に言えても実際には僅かしか採用されない。

それは何故か。『貴族だから』と言うと、大半が納得することが出来るだろう。

この城で働いている者はほぼ全員が貴族または貴族からの推薦された者である。

それも、長年親しんでいる貴族が主に多い。

これは我が国の機密を知らせないために協定を結んだ貴族でしか雇わないという理由である。

私には国民を雇おうかどうか悩んだが、国を背負っている身であるために止むを得ずできなかった。

そんな中、家臣はこのように提案をしてきたのである。

もちろん私はすぐさま拒否した。そして帰らせるよう命じた。

そうして、その日は何事もなく過ぎた。

翌日、その家臣は惨殺体として発見された。

それも、顔以外の箇所を剣で切り刻まれたような跡がほとんどだった。

この事件は城内で瞬く間に広まっていた。

幸いなことは、その遺体が見つかったのが彼の書斎であり、発見者が平民ではなかったことだ。

しかし、家臣が貴族出であったため、同じ貴族のものが戦々恐々となってしまった。

もちろん、私も内心で戦おのいてしまった。

だが、国王であるためにそれほどの恐怖で怖気づいてはいけないと鼓舞し、すぐさま原因究明を進めた。

その間に、空いた家臣の座は誰にさせるかという問題が出てきた。

周りの家臣たちにそれを尋ねてみると、大多数が『ある者の名』を口を揃えて言った。

その者の名が、『クレスラン・ティフィラール』であった。

私はすぐさまその者を城へと呼び、話をした。

第一印象は、『獣人とは思えない獣人』であつた。

『獣人』という種族は、主に驚異的な身体能力を利用して動いているものが大多数である。

しかし、クレスランはその『常識』とはまったく逆であつた。

彼は身体能力は私たちとほぼ同等であるが、知識が人間以上に持っていた。

また、魔力も私たちから見たら優秀であり、文字通り『獣人とは思えない獣人』そのものであつた。

私はすぐさまに採用し、彼は家臣として勤めるよう仕向けた。

彼は感謝の意を示し、城から出て行った。

このとき、私は重大な過ちを犯してしまっていた。

彼が王室から退室する時、『怪しく嗤っていた』のを見逃していたことを。

翌日から彼はその権利を陰で乱用し始め、それは誰にも見られずに時が経っていった。

そしてついには、私の側近にまで登りつめた。

私がそれに気付いたのは、些ちとせ細なことからであった。

いつもどおり王室でやってくる書類を片付けていると、ふと一枚の書類に目が留まった。

一目見ると何の変哲の無いただの書類であった。しかし、何故かその書類からは魔力の残滓さんしが感じられた。

これはおかしい。基本このような紙には魔術を付加するようなことはまったく無い。紙に付くのはただのインクと血印のみである。では何故魔力があるのか。

私はその魔力の特徴を調べてみると、一人の者が頭の中に出てきた。

そう、『クレスラン・ティフィラール』である。

一度彼から魔術を使っているところを見せてもらい、そのときの魔力とほぼ同じであった。

彼は何故このようなことをしたのだろうか。そもそも、この書類はクレスランが手がけたものではない。

私はすぐさま彼に疑心を持った。彼がこのようなことを行った理由を考えてみた。しかし答えになりそうなものは一切出てこなかった。

そこまで考えて、仕方なく私直属の部下に調べるよう頼んだ。

やがて帰ってきたものは……無かった。

部下でさえも。

私はすぐさまクレスランに問い詰めた。

「君は私の部下をどこにやった？」と。

その答えは顔に笑みを浮かべながら、眼鏡で彼の眼を隠すかのように俯かせ、言った。

「あなたの部下が何か知りませんが、邪魔じゃまでしたので『退け』ましたよ。」

聞いた瞬間、目の前の者を嫌いになった。いや、憎悪と化した。

すぐさま部下の仇かたきをとりたい。しかし周りからの評価が高い者を亡くすと被害が大きくなるだろう。さすがにそれは厳しいものがある。

私は殺めるのを保留として扱うことにした。だが、憎み恨むにくむのはやめない。

私がいままでに持っている『正義感』というものが、彼の憎しみを諦めるあきらことをしなかった。

この事件以来彼と私の中に深い溝が出来上がり、互いに仕事に干渉しないようになった。

そうして日が暮れ、時が過ぎ、数年経ち……

父上の気まぐれによって「軍」が所轄する闘技場の中で私は立つて

いる。

そして私と父上が肩を並べており、私たちの目の前には一人の少年が立っている。

目の前の少年からは私たちに畏怖している様子も無く、かといって尊敬している様子も無かった。そう、まるで私たち『そのもの』を見ているような雰囲気を出していた。それはまるですべてを見通している者のようであった。

私が出すように感じていると、少年は私たちへと視線を動かして言った。

「自分がこの訓練を実施させている者ですが、何かご不満でも？」

その言葉によって私たちと少年以外の、周りで見守っていた兵士たちの表情と雰囲気が一変したように感じた。中には「ひっ！」という声も聞こえた。

兵士たちがそうだったのも無理ないだろう。堂々と私たち『王』の目の前で敬う仕草もせずに言い放つからだ。その行為は罪にはならないが周りからは畏怖と侮蔑の目で見られるようなものである。

それを起こしてしまうほどのものを少年は淡々とした様子で言った。私はそれに驚愕と呆然とした表情をしてしまったのだろう。実際に私の頭の中は真っ白になってしまったのだから。

少年は父上の方へと視線を止め、答えを求めるような眼つきをしていた。そして父上は父上で堂々とそれに応えるように視線を合わせ、突然笑いながら答えた。

「何、不満などないわ。逆に称賛してやろうかと思うただけじゃい。」

父上の答えを聞いた後に、次に私のほうへと視線を向けてきた。

私も当然のように応えようと少年と目を合わせた。

そして、私は本当の問いを得ることとなった。

少年は表の問いを言うだけでなく、その眼にもってある『問い』を私へと答えを求めるかのように向けていた。

『あなたはこの国の終焉を知り得ているか。』

私にはそう感じた。そしてその問いに畏怖を感じるのも同時だった。目の前にいる少年のような年齢の者がそのようなことを考えるのは在りえないこと。

子供は無知である、それは万国共通であろう。だから私たちが教えていかなければならない。そして子供はそれを吸収していき、次の世代へと放出する。たとえ疑問があったとしてもそれは自分で解決するような答えを作り、その疑問を自分の心の内で収束させる。

たとえそれがこの国についてであっても、この国に対する敬意と尊敬によって答えが作り出されていく。それがあってからこそ、この国はここまで続いていくことができた。

しかし、目の前の少年はその敬意や尊敬がまったく感じられず、それが故に純粋な疑問が私たちへと出されたのである。その純粋さに

私は畏怖を感じた。

子供は無知である、それが故に子供はどんどん知識を得ようとする。たとえそれが自分にとって不利であっても、たとえそれがこの国にとって不利であっても、自らの疑問を解消するべく問い続ける。

その問いが、私たち王家にとっては『剣』でもあり『矢』でもあり『斧』でもあった。王家を斬り、貫き、砕くかの勢いで問い続ける。そして私たちは答えることができずにただその『暴力』に打ちひしがれるのである。

私はそのたった一つの『武器』に対抗するべき、仮の『盾』を作るべく答えを考えた。

それを悟られぬよう、表では普段どおりに答えた。

「真まことに父上と同感ですな。して、貴様の名を知りたいのだがよろしいかな？」

答えを言い切ったあと、その『盾』で身を守るべく、『答えた』。

『私が死なぬ限り、この国は終わることを知らないだろう。』

眼でそう答えると、少年は周りの者にも分かるほどの頷きをした。

私はその様子に、内心で安心と不安という真逆の感情を感じていた。

その答えは、少年にとって正解であったのか。

その答えは、少年にとって不正解であったのか。

私が感じている問いの答えは、この時には出てこなかった。

この日、この後、私が死ぬまで答えは、出てこなかった。

『私の答えは、この世界にとって不正解であった。』

〈番外編〉 . . . 現国王〉（後書き）

おつかれさまでした。

といつても、疲れるほど読む量は無いですが。

さて、ナヴァジスさんのお話は何かと思いつきませんでした。

カム君との戦いもあの話で十分出したつもりでしたし、あとは何を書けばいいのか悩んでしまいました。

候補は何個があったものの、表現できたものは上の内容の通りです。このときに、私が曖昧^{あいまい}な考えで投稿していたことが身にしみて理解しました。

このようなことはもう出さないように、精進かつ慎重にいきたいです。

誤字・脱字・文法の間違いなどがありましたらご報告ください。できるだけ早く修正します。

今回はメガネです。てか、メガネの描写が一度しかなかったような覚えが……

ありがとうございました。

私の活動報告でアンケートを取っています。お時間がありましたら答えてくださいますようお願いします。

〈番外編　．．．　史を求める首謀者【前編】〉（前書き）

いらっしやいませ。

お待たせしました。

2万文字に行きそうです。がまだ終わりが見えないので、とりあえず前後編として投稿させてもらいます。

そして、前編だけでも1万文字を超えています。

では、どうぞ。

……風を感じている。とても激しい風だ。その風は私から見て頭上から吹いているように感じる。髪が上から下へ靡き、甲高く空気を切る音が耳に絶えず響かせ、身に着けている服の端は激しく音をたてて揺れている。私が掛けている眼鏡は私と落ちることを受け止めているように流れに身を任せている。

だがその眼鏡から見える、目の前に広がる世界はどうだろうか？
本来上にある月や星らが眼下に、個々の家や森が頭上にある、そのような景色が広がっていた。私が今まで生きていた中で、一度も記憶にないものであり、一度も経験したことのないもの。だが想像はしたことがあり、夢には一度見てみたいと思ったものであった。

その幻想を、私は今実感している。だが、それでも後悔の念は絶えなかった。何故なら、もう過去のことだからだ。そんな私は、目の前に広がる光景をどのように表現しようか無意識に考えていたことに気が付いた。月の明かりは煌びやか且つ絢爛に、それによつて頭上の国は華麗且つ華美に。世界は秀麗であり、端麗であり、美麗であり、流麗であり、壮麗であり、そんな幻想だと私は思った。いや、それらだけで表現できない幻があった。

初体験である夢に浸っている私は、ふと今の自分と過去の自分を比較してみることにした。それは突拍子も無いことを考えるのは些か可笑しいことではあるが、偶には気分を変えることも面白いだろうと思った。

これまでの私は部屋に引き籠つてただただ本を読んで生きてきた。

外には出ることはなく、木製の窓から差し込む光が鬱陶しいと思っていた。内心にそれに対する苛立ちを抑えながら、また視線を本へと向ける生活だった。その本は歴史についてのみ書かれており、『娯楽』の一文目すら見当たることができないものである。過去の私はそれを楽しんでいたのだが、今の私にとっては何も感じる事が無かった。いや、その自分に気味悪さを感じていたののほうが正しいか。ただただその中に挟まれてる紙の上に書き綴られてる文字を目で追い、追いついたと思うと次の頁へと手を使って紙を捲り再度文字を追う。

過去の私はそのような些細なことであり瑣末な行動のみ行っていた。ただただ過去に起こったことをただただ今現在で調べる。過去を気にしすぎて、現在に目を向けていなかった。私はそれに後悔していた。ただただ過去のことのみ自ら囚われて、今日の前の光景には興味も関心も全く湧かなかった。何故このような素晴らしい世界を認識しなかったのだろうか？ 何故私は他の物事に目を向けなかったのだろうか？ その後悔は私自身のことも含まれ、私の過去と現在と未来、私の周りの出来事など知らないままだった。

私の家族についてもそうだ。私の妻と娘について、今までの私には考えていないでいた。そもそも視界にまで入らないでほしい、と思ってしまうている自分がいた。個人の未来より集合体の過去を優先したのだ。そして優先しすぎて、ついには人を、さらには家族でさえも『物』とでしか捉えられなくなっていた。

だが私はそれに気付くのが遅かった。そう、今更であり、遅すぎたのだ。私は『あの少年』に言われ思い出すまで気付かなかった。そして気付いたときには、周りは赤く染められた部屋にいたときだった。その赤は灯りによって、炎によって、絨毯によって、血によって。そんな状況で気付かされた。

……私は今落ちている。誰によってもなく、ただただ体の力を抜いて流れに身を任せて、結果的にはこのようなことになっている。私を感じている聴覚や触覚は正常だが、視覚で感じる景色はゆっくりと時が止まるのではないかと思ってしまうほどゆっくりに見える。これではどちらが正常で、どちらが異常なのか分からなくなってしまう。だが、今の私にはどうでもいいことだった。

苦笑気味に顔の筋肉を動かし得体の知れない虚無感を感じると、それに流れ込むようなものが出てきた。そこにあったのは、この国の街中や城内の様子、王や大臣や兵士や侍女や民、そして私の妻と娘の映像だった。すべてが笑い合い、泣き合い、悲しみ合い、そして無表情を私に見せていた。

そのときに私は思った。ああ、これが俗に言う『走馬灯』なのだ、と。たしか別名は『舞灯籠』や『影灯籠』と言うものであったか。その言葉の由来は、枠を内外二重に作り、内枠に貼った切抜き絵の影が、外枠に貼った布に回りながら映るように仕掛けた、キクヅチ大陸独特の照明器具だと聞いた。実際にそれを見たことは無いが、体験した者が言うには『まるで絵が実際に踊っているように見えて美しい』と口を揃えて言った。ならばそれに派生したであろう、頭の中で踊っているように見えるこの走馬灯は確かに美しく感じる。

私が美的感動に浸っていると、眼鏡の硝子にふと一つの映像が目の前で拡大するように広がった。その映像は私が懐かしさを感じるものであり、私の性格がここで決まり始めた記憶だった。それを、まるで私の過去を私自身で鑑賞させるかのように。だが、それも悪くないと思った。私が何時、何処で、どのようにしてこのような結果になったのか、それを知りたい。それが、今の私が求める、最初で最後の個人の過去であることを願って。

私は『クレスラン・ティフィラール』と親から名付けられた、猫の獣人の男だ。

獣人は基本、人間と比べ身体能力が高いという特性を持つ。例えば、人間が持てないような重いものを持ち上げることが出来るもの、視力や聴力が高いというものが挙げられる。そして獣人にも種類があり、鋭い嗅覚すうかくを持つ犬種や空を飛ぶことが出来る鳥種たき、そして私のような柔軟でしなやかな動きを得意とする猫種と多岐に渡っている。

だが私の体は生まれつき弱くてあまり動かすことが出来なく、たとえ動かしたとしてもすぐさま寝込むことになるほどだ。それを知った周囲の村の人々の反応はとも残酷だった。ついたあだ名が『猫もどき』だった。私が道を歩いていると、指を指して笑っていた。時には道を塞いだり、石を投げて邪魔をしてきたりした。

私はとても憎んだ。何故私の体はこんなものになったのだろうか？　そしてその憎しみは両親に向けた。私がこんな体になっているのは、すべてこいつらのせいだ。だから憎んでやる、だから怨でやる。

しかし、両親は両親で私と同じ苦痛を味わっていた。近所の住人から蔑む目で見られ、私と同じようにそこらじゅうで笑われていた。あまつさえは、欲しいものが買えないときもあった。私はそれを知り、憎悪の方向を周りへと全方位に向けた。

ある日ふと思いついた。体を動かすことができないのなら、頭を使えばいい。私は名案を思いついたかのような感激を受け、すぐさま父の書斎へと引きこもった。この私の行動には両親は理解できなかったようだ。だが、私はそれを気にせず、ありとあらゆる本を読み漁りまくった。

そして私が生まれて10年経ち、村の人々を恐慌へと陥れることができた。それは簡単な方法で起こした。ただただ、周りの人々に『あの人はこの人を憎んでいる』という嘘を流した。その種類は多く、ありとあらゆる人々が恐怖へと溺れていった。

結果として、その村は壊滅した。あの人は私を殺す気なのでは？　という不安が起こり始め、ならば先に殺しておいて楽になろうと

いう考えが私たち家族以外で起こり始めた。初めは一人二人と少なかったが、何時いつしか二桁単位ふたけたたんいまでいき、昼間からも起こった。そして、村は憎しみと不安の炎で焼き尽くされていったのは時間の問題だった。

だが、ここで一つの誤算ごさんがあつた。周りの人々の中には、何故か勘違いして私の両親も狙つていた人がいた。そして両親は刃物を胸部に刺されて死んでいった。その人は不安を解消することができの
だろうが、残念ながらまた別の人の手によって殺された。

私は悲しかった。何故なら唯一の苦痛を共に感じる存在がいなくなったから。だが、涙は出てこなかった。傍はたから見たらとても怖い光景だつたろう。自身の両親の亡骸なきがらをただただ無表情に見下ろしている子供は、とても奇怪だろう。だが、私はそういう反応しか出来なかった。そして、その理由を今の私でも分からなかった。

私の思い出はここで止まり離れ、続いての記憶が広がって来た。その記憶の私は成長しており、少年から青年へと時を経っていた。そして、私一人だけでなく一人の女性も映っていた。

生まれて20年と四つの年が経った私の目の前にいる彼女は同じ猫の獣人であつた。20歳だという彼女は、その年齢にしては少し幼い雰囲気^まを纏^{まと}つていた。しかし、顔つきや私より少し低い^いが他の女性と比べると長身であろ^う身体は『美人』という見た目を感じさせられた。幼さと美しさ、何とも矛盾^{むじゅん}のような感じがすると思うが、実際に彼女はそれを確立^{かくりつ}していた。

彼女と出会つた場所は、克蘭デイス王国の付近にある森の中であつた。私はその国に向かうために、彼女は薬草^{くすりくさ}を摘^とむために。それはそれは、ただの偶然^{ぐぜん}だつた。ばつたりと出会つて軽く話しただけである。しか、私にとっては、これだけの些細^{さいさい}な会話で彼女に興味をもつたのだ。それは彼女の見^みた目によつてか、彼女の雰囲気によつてかは忘れてしまつたが。それから彼女に案内^{あんい}され、私は宿をとつてその日を終えた。

この出会いは、彼女にとっては些細なことであり今ではおそらく憶えていないだろう。しかし、私にとっては衝撃的なことであり、今まで感じたことが無い『何か』が生^かみ出されようとしていた。この気持ちは彼女と会つた^かびに発生し且つ体積^{たいせき}が増えていった。

この気持ちは何だろうか？ この嬉し^{うれ}さは彼女から出ているのだろうか？ 私はこの感情に興味を持った。これまで人を恨^{うら}み憎^{にく}みという憎悪と、私が生きるためにモノを作る者に対する無関心のみ生じてきた。表情では笑ったり悲しんだりした、だが心情は愚痴^{ぐち}を吐^はいたり何も感じなかったりしてきた。その黒や灰の色をしている『心』と表現されている脳内で、無彩色ではなく有彩色が何処からともなく出てきたのだ。

その色は私には未経験だったので2、3日は混乱した。彼女と会うたびに嬉しさが生まれそれを表情に表さないように我慢した。そして別れると今度は喪失感^{そうしつかん}が起き無意識に俯^{うつむ}いたりした。それについて誰かに相談しようとしたが、残念ながら気が合う者は私にはいなかった。

私はどうすればいいのだろうか？ 私はこれにどういう対応をすれば直るのか？ 今までの知識ではまったく役に立たなかった。そしてそれから調べてもまったく分からなかった。その国にある心理について書かれている本すべて読み漁っても、書かれていることがあっても理解は出来なかった。

ただ分かっていることは先ほど言った二つだけ。ならば、それらを利用して対策を考えればいいという案が出てきた。私はさっそく思考に耽^{ふけ}る時間を作った。しかし手掛かりとなるであろう彼女と会う時間は減らさず。まずは睡眠時間を減らし、日雇^{ひよめ}いの仕事の間にさまざまな頭を使える時間を見つけていった。

そして彼女と出会い、日を数えて100を少し過ぎた日に、彼女と結婚することにした。その間には初めての感情の名は分からなかったが、私から申し込み相手の反応を窺^{うかが}った。彼女は私の言葉を受け、頬を赤く染め顔を綻^{ほころ}ばせ了解の意を答えた。その様子を見て私

も、久しぶりに心と表情が一致したように笑みを浮かべた。

その日から私と彼女は同じ家で過ごし始め、衣食住を共にしていった。私が彼女に何らかをすると私はとても嬉しく感じた。逆もまた然り、胸辺りが暖かく感じた。

しかし、結果としてはその感情の名は分からないまま、一つの命が生まれた。

生まれたのは女の子だった。生まれたからには名前を付けなければならぬのですぐさま付けた。『リユナ』、そう決めた。理由に深い意味は無い。周りからの質問に答えるために理由をつけるならば、『reunite』から取ったから。その意味は『再会させる』。この子がいれば私たちは何時でも何処でも会える、そして三人一緒に過ごせる、ということにした。もちろんこの理由は名前を付けてから意味を考えた。つまりは偶然というわけである。

周りの人は疑いもせず納得した。もちろん妻もだ。私が博識だからきつといい名前を付けてくれると思っていたようだった。私はそれに対しての罪悪感は一々感じなかった。これまでの生活で嘔吐することに慣れてしまっていたようだ。しかし私は無意識に受け入れていた。そしてその慣れに気付くことができなかった。

娘は私によく懐いていた。理由はよく分らないが私から見る限り、妻へ懐いているよりかは多く見られた。しかし、子供の思考というものは大人が理解できるものではないと知っている。ならば無理に理由を聞くのは野暮ということだ。私も、そして妻も決して理由を聞かなかった。

そして娘が上へと背を伸ばしていくうちに私も妻も歳を重ねてい

き、娘が生まれて6年という時間が過ぎた。その年、その月、その日までは私は家族に接してきた。何故なら感じたことのない『何か』の答えを求めるために妻と娘と共に過ごした。そして、これだけ時間が掛かるとは思っていなかった。

だから、飽^あきた。この答えは分からなくていい、だが諦めることではない、と私は思った。今振り返れば過ぎた我^{わが}儘^{まま}だったと羞^し恥^{うち}してしまう。だがこの時の私は本気だったようだ。だからこれを切^きつ掛けに家族とは接することは無くなり、次の興味を求めるために街中を放浪していった。街道を始め、酒屋や肉屋などの商店、教会やギルドなどの集団など、当てがあるが当てが無い歩き方をしていた。そしてある日、私が興味を持ったものが見つかった。

場所は王城の中にある図書室。たったひとつの本によって私の心は久しぶりに惹^ひきつけられた。一つだけ公開されている蔵書の中で一^{ひと}際^{きは}埃^{ほこり}を被^かり、且^{かつ}つ幾^{いく}度^どとなく使われたように大勢の者^{あか}の垢^{あか}が付いている、それはそれはボロボロの本であった。しかし題名が記されているところだけは新品同然のように写されていた。

『私と貴族と王国と』

著者：ルドファルト・クランデイス

それからの私はこの本を幾重いくえにも読み、最後まで行くとまた最初から目を向けた。もうこの本に執着しゅうちゃくしていると言っても過言では無いほど没頭した。朝起きてから、食事中も、仕事をしている中でも、自宅へと戻っている最中にも、湯船に浸ひたかりながら、そして寝ている間にも、あの本の事だけを考えていた。

もちろんその様子は家族にも見て分かるほどのようだった。妻は私が忙しいいそがのだろつとあまり接してこなくなった。それは娘にもうつったようで、一日に2、3回以上は私の手や体に触ふれているのだがそれが少なくなっていた。だが、私はそれを気に留めなかった。何故なら、本のことだけを考えていたからだ。

そして、私はこれだけの生活では満足できないと考え、その本が置いてある城へと勤めることにした。しかし、いきなり『雇やとってくれ』と言われても疑惑がつくものだろう。ならば信頼を得ればいい

のだ。では誰に信頼を得るのか。そこまで考えた私は、今勤めている仕事場でよく通^{かよ}っている一人の家臣がいることを思い出した。ならば、その家臣を利用すればいいだけの話だ。

私はすぐさま行動へと移した。幸いなことに家臣が来る日というものは決まっていた。それを利用し、家臣が来たときに私が自ら進んで対応する。また、来ない日でも城の図書室へと通い続けその家臣と出会ったら話しかける。その日々を半年も続けた。その日を過ぎていくごとに家臣の私に対する態度が柔らかくなっていった。私はそれを好機と考え、城で勤めさせるよう頼んだ。

結果としては、拒否が返ってきた。その家臣は済まなそうに謝っていたが、表情の一部に安堵が表れていた。それを見た瞬間、私は殺意が体から出ていることを自覚した。『こいつは使えない』、たったこの一言だけが頭の中を満たし、無意識に考えた結果に、『こいつを殺す』という名案が思い浮かんだ。ちょうど彼は私に背中を向けて机へと向かっているし、今いる場所は彼の書斎である。誰かが訪問してこない限りは、人の目は全くない。

絶好の瞬間だった。一気に彼の背中へと詰め寄り、左腕を首へと滑りこませ絞^しめ上げた。いきなりのことであろう、無意識に彼の両手は私の腕を掴^{つか}んだ。それを見た私は空いた右手を彼の腰にぶら下げている剣の柄へと手を伸ばし、素早く抜き取り右脇腹へと突き刺した。息は漏れるが声は出なかった。掴んでいた手に力が抜けていくのを感じながら、絞めていた左腕を離した。自然と彼の体は地面へと落ちていき、息を荒げながら傷口へ手を塞^{ふさ}ぐように置いていった。

実はというと、人を死へと追いやるのはこれが初めてであった。これまで生きてきたのに使った武器というのは『知識』だけであっ

た。実際に手を出すことなく、文字どおりに手を汚すことなく相手を追い詰めたことは何度もあった。そしてそれを受けた相手全ては、自殺をしたり暴動を起こしたりして精神を壊していった。そんな私でも、今この状況に感じるものは全くなかった。実際に相手が死んでいくのは何度も見たし、死ぬ間際の光景も数え切れないほどだ。ならば、今回もこれに当てはまるのだろう。私は単純な考え方でそう思った。

一歩足を前に出し、体を進める。それに反応して相手は体を過剰^{かじょう}に震^{ふる}わす。それは出血による震えなのか、私が来る恐怖心による震えなのか、その時の私にとってはどうでもいいことだった。一歩、また一歩づつ近づぐことに相手の体は大袈裟^{おおげさ}に震え、私へと向けている顔は青く不健康のように染まっていく。なんとも情けない光景なのだろうか。この国を担^{にな}う王の家臣だというのに、今となつては動けそうもない体で目の前の恐怖に逃げようと必死であった。私は笑うのを心の中で抑えつけながらまた一歩近づぐ。

そして彼の腰を跨^{また}ぐところまできた。もう彼の顔は青を過ぎて白まで色を失っていた。傷口を押さえる手は震えるのを止めず、いや、体全体が震え続けていた。それを横目で確認しながらも、右手に持っていた剣を彼の首元へと突き付けた。彼は助けてくれと命乞^{いのちご}いをしてきたが、私は無視した。その代わり、彼に最後の言葉を差し出した。

「残念です。」

喉に突き刺した。

翌日、城へと入っていくと兵士が普段よりも多く見られるようになった。どうやらあの家臣が死んだことによって警備を厳重にしたようだ。しかし、もう遅い。計画は少し狂ってしまったが、『代わり』がいればいいだけの話だ。だから、これから別のやつを探して頼みこめばいいのだ。たったそれだけ、簡単なことなのだ。しかし、予想外な出来事は数日後に起きた。さらにそれが落胆するようなものではなく、逆の良い出来事であった。

それは、城からの呼び出しであった。私は仕事場へ行こうという

朝に、一人の兵士が自宅前で立っていた。私はすぐさま疑心を思い浮かんだ。何故ここに兵士が居るのだろうか？ 一体何の用なのだろうか？

まさか、あいつを殺したのが私だと発覚したのだろうか？ 続いて、その時の状況を頭の中で思い出して確認をとった。あの時に私だと確定できるものを置いてきたのか？ いや、その可能性は極めて低いだろう。あの時の私は何も持って来ていなかったはず。証拠となるものは皆無だ。では、誰かが私が殺めているところを見たのか？ しかし、それも無いだろう。私があいつの部屋へと入るときに予め人払いを施した。そして、部屋から出ていく時にも人気が無いか確認してから出て行った。故に、その瞬間の目撃者は居ないはずだ。

では何故、と実行中での失敗点を面には出さずに探していると、目の前で未だに立っていた兵士が表情を変えること無く次の言葉を私に放った。

『ナヴァジス国王陛下から、貴方を招来させるよう命ぜられた。』

私はすぐさま二つの考えが浮かび上がった。一つは、現国王に発覚されたのかという危機感であった。もしそれが本当ならば懲罰か、いやそれは軽すぎる、軽々と死刑を宣告されることになるだろう。それはどうしても逃れなければならない。せつかく私の新しい人生が始まったばかりだというのに、ここで死ぬのは人生をふいにしたことになる。それだけは避けなければ。

しかし、もう一つの考えがそれを止める働きをした。それは『私を城内職に就ける』という期待感であった。あの家臣の死によって空いた席を私に座らせるのかもしれない。それならば、退屈に働い

ている今の職場よりかは、私の興味がすぐそこにある職位が高い場所のほうで、職務を全^{まっ}うすることができないのではないだろうか。それならば、私が行ったことは無駄にはならないということになる。少し予想外れであり予想外な出来事に期待を持たないというのは、それはありえないことなのではなからうか。

目の前に少し迷う様子を態^{わざ}とに表し、私は肯定の意を示した。兵士はそれを目で確認し、私へ入城する時間を指定してその場を堂々な足取りで去っていった。その光景には興味が無いのですぐさま視界から外し、これからの行動について検討するために、『同居人^{妻と娘}』が居るであろう自宅の扉を開けて戻った。

私が呼ばれた理由、それは『他の家臣からの推薦者』ということだった。話によると、私が殺した家臣は他の者にも私の事について自慢げに話していたらしい。しかもそれを一人二人だけでなく、城内にいる者の大半に話していたようだ。ここにきて彼のことを褒めたのは初めてである。しかし死んだ者に弔うつもりは無いが。

白く磨かれ周りの光を反射しているような壁。その壁の一部には、唯一の別の色である青が狭いながらも穏やかに流れていることを伺える窓。そこから差し込む光が天を照らしているため、私の頭上に広がっている天井にも明かりが映る。私が興味を持ちそうな内容が書き記されている書籍が隙間無く挿されている本棚。歴代の国王が使用してきたことが分かるほど貫禄がある大きな机。そう、目の

前に広がる光景は私が記憶している場所であり、しかし今まで入ったことは一度しかない場所である、多くの者にとって恐れ多い王室であった。

その机の席に座っているのは、この国の長であり第3代目国王である、ナヴァジス・克蘭デイス本人であった。薄い黄金色に染まっている縮れた髪は肩まで伸ばしており、御歳40と言われると頷けるほどの皺が刻まれていて常時の柔和な笑顔でさらにその数を増やしていた。

しかしその笑顔から僅かに見える双碧は私の顔へと全く動くことはなかった。まるで『今の私の様子や行動を一つも見逃さない』かのような視線であった。これは私の考え過ぎかもしれないのだが、このような視線は数え切れないほど感じてきた。ならば、これまでの経験からこれで当たっているのだろう。

さて、私から見たナヴァジス・克蘭デイスという人物は、『国王に相応しい人物でもあり相応しくない人物でもある』という印象を感じた。民衆の噂によると、私たち民の第一に考えながらその政策の鍵となるものを探すべく街へと降りて歩いているらしい。たしかにそれはとても素晴らしいことだと感じる。しかし、彼は『悪』という概念をこの国に出てこないように街を見回っているとも感じた。それは彼の性格によってでもあるだろうし、王位継承からの自念と責任によって彼をそうさせているかもしれない。ただ分かることは、『正義感が強い子どものような性格を未だに持つ国王』ということである。

目の前で鎮座している国王からいくつかの質問を受け、私はそれを難なく答えていった。そして魔法の実技も行われたがこれも無事に終えた。結果はその日に出てきた。私の予想通りに『採用』と『

家臣の座』という字が書かれた紙が手元に渡された。私はすぐさま面だけ感謝の意を示して王室から出ることにした。

これで私の『計画』がまた一つ前進したことになる。湧き上がる感情を出来るだけ面に出すことを我慢したのだが、残念ながら少し表れてしまったようだった。しかし運がいいことに国王には見られることなく退室することが出来た。

そしてそのまま廊下で人に会うまで顔には『嗤^{わら}い』の感情が浮かんでいたことを自覚することはできなかった。

〈番外編　．．．　史を求める首謀者【前編】〉（後書き）

お疲れ様でした。

唯一登場人物との関わりを多く持っているのがこの人です。
そのためすべての話を書くとしたらすごく長くなりました。
そしてまだ続きます。

時間が無いのでここまでとします。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186r/>

神は俺を選んだのか？

2011年10月10日02時19分発行